

御奉行日下部丹波守様寺社支配高木勘兵衛殿後藤惣左衛門殿之節唐船主御願申上、御免之上三ヶ年之間受納仕申候、右之通相違無御座候 以上

遊光明庵即興

惟道以爲樂簞瓢半不存雲霞橫座席苔艸鎖柴門夜露涵空嶽漁燈照遠村都來西祖意栢樹影成屯

庵内には往時慈深庵、福聚庵、海雲庵等ありし由なるも其の位置沿革等は明らかでない。

光明庵歴代庵主世系

- 開基 本光
- 開山 喝浪方淨
- 二代 克傳
- 三代 教傳行立
- 四代 指中 廓

臨濟正宗光明天目第四代指中廓大和尚 寶曆六年六月一日示寂

五代 古潭如澄 臨濟正宗光明天目第五代古潭澄大和尚

六代 禪覺圓彰 臨濟正宗光明天目第七代龍谷瑞大和尚

七代 龍谷真瑞 臨濟正宗光明天目第七代龍谷瑞大和尚

八代 得岸道安 臨濟正宗光明天目第九代默翁說大和尚

九代 默翁說 臨濟正宗光明天目第九代默翁說大和尚

十代 醫中行珠 臨濟正宗光明天目第十代醫中行珠大和尚

十一代 海印通光 臨濟正宗光明天目第十代醫中行珠大和尚

十二代 金鳳行儀 臨濟正宗光明天目第十代醫中行珠大和尚

十三代 桐峰超鳳 臨濟正宗光明天目第十代醫中行珠大和尚

十四代 祖磚仁鏡 當卷第十四代祖磚鏡公和尚

十五代 先聞超修 文久二年八月二十三日示寂

附

水月居

明曆貳丙申年春木庵が稻佐に創建したもので、光明庵はその址に該當するものなりと云ひ傳へて居る。

水月居

木 庵

三四二

密藏祇樹頗幽居水月清輝映艸廬一繫孤舟何所似洞庭風景不曾殊

水月居六景

同

龍鼻徑

水際山形臥玉龍長垂鼻孔插波中偶然鑿徑千餘武恍履青雲上碧空

釣鯿亭

臨流岨上秀孤松結箇茆亭看釣翁巨浸連鉤鯿十二卻教陸地化飛龍

晚棹漁歌

煙浮水面夕陽低來往紛紛棹不齊漁父艸蓑穿倒轉唱歌扶櫓過峰西

長江月色

江心獨耀一輪明萬里無雲眼豁青此際漁舟吹玉笛誰知隔岸有人聽

隔岸鐘聲

千山月白洞無痕北岸敲鐘定裏聞非是聲來非耳到祗緣聞性亘長存

山城煙雨

東望依依數萬家靜朝時節碧煙蒼忽然變幻渾無定細雨斜飛散落花

重遊水月居

同

隱蹟重臨處參差松竹幽斜陽漁父曲古岸渡人舟法瀉長江水心圓片月秋誰知  
真野趣不得盡觀遊

大慈庵

西山鄉妙見社地の南隣に在つた。慈岳の法子文潭映の創建したものである。

明和四年三月調

境内 百八拾六坪

東 拾五間

表通石垣溝筋境但外畑道

南 貳拾貳間五尺

岸境並木有り但外百姓平次小屋

西 拾七間五尺

裏通り楠松木有り竹藪境

北 貳拾八間

竹藪石垣溝筋境但外妙見社

開基 文潭 映

大慈開基上文下潭映大和尙  
元祿十一年四月二十日示寂

二、三、四代 不詳

五代 履道弘坦

大慈五代履道坦公和尙  
文政十年十二月二十九日示寂

六代 茂山通泰

大慈第六代茂山泰公和尙  
天保九年十二月二十三日示寂

長崎市史地誌篇 福濟寺

大慈庵

歴代庵主

中川郷に在つた沿革は明らかでない、明和四年三月の調に據れば境内坪数は左の通りであつた。

境内 四拾五坪

- 東 八間七寸
- 南 九間半
- 西 拾間五尺
- 北 拾間五尺

- 裏通り 白石垣境
- 杉木藪 石垣境
- 表通り 中川郷畑道境
- 白境

遊松林庵

木庵

那房小 小南三間 白日幽晴境 自間四面峰青高挿漢團圓猶似野禪關

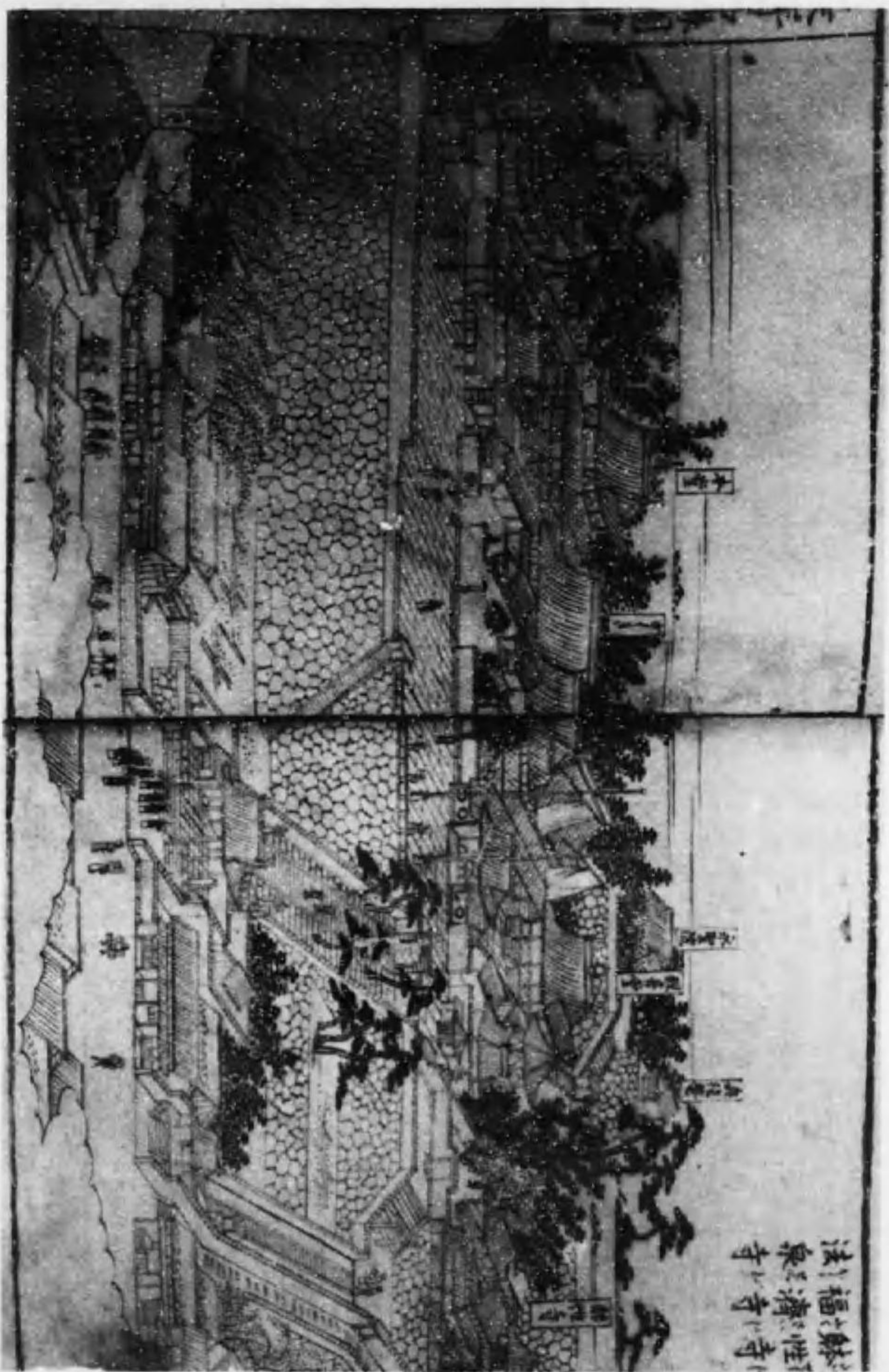
松林深處是禪庵 示現千年優鉢曇遙夜主人盤膝坐中川 唯有月明添

浦上村山里に在つたが、安永年間に解取りて敷地はもとの地主へ返却するこ

とになつた。

明和四年三月調

法源齋



文政年間福濟寺及び其の附近

境內

東 拾六間

樹木有之竹藪境

南 貳拾五間半

表通り畑道有之但畑道境

西 拾八間

竹藪境但外島

北 拾五間

裏通り岸境

遊法源院二首

釋 大潮

勝遊俱是士林賢扶老逍遙江浦邊蕭寺樓臺從地涌梵王華座接雲連千秋創業  
龍鱗會萬古傳燈日月懸香積盛蕊承異設已知甘味自諸天

其二

十載分携今始來上方精舍此新開海晴憑林千帆出天淨當窻萬壑迴竹裏禽鳴  
移玉案松間人嘯動崔嵬忘歸是日歡娛甚詞賦何妨乘興裁

遊法源禪院

同

法水源頭流渺漫天風日夜鼓波瀾全鱗多少從茲躍鏗鏘漁翁把釣竿

題法源院

同

新開荒茅作梵宮法源流遠澤無窮祇林勝形非千古緇白趨風日日隆

稻佐郷に在つた。沿革は明らかでない。少く共幕末の頃迄は存在して居たものであらう。明和四年三月の調に據れば當庵の境内坪數は左の通りであつた。

境内

東 五間六尺 表通り畑道境

南 拾參間 畑道境

西 九間 裏通り藪畑境

北 拾間 畑境

福濟寺歴代住持世系

開

基

覺 悔 支那福建省泉州府の人  
前開山覺海禪師

寬永五年より同拾四年六月まで在職拾年

了 然 支那福建省漳州の人  
圓寂了然禪師

寬永十四年六月より慶安二年まで監寺拾參年

覺 意 支那福建省漳州の人  
覺意禪師正保四年示寂

重興開山

蕙謙戒琬 支那福建省泉州府安平縣の或は云ふ晉江縣の人俗姓林慶安二年六月渡來重建分業開山本師上蓋下置琬和尙

開

法

木庵性瑄 支那福建省泉州府晉江縣の人俗姓吳賜紫黃檗二代紫雲上木下菴酒老和尚

明曆元年七月九日渡來萬治三年十月五日上樂留錫六年  
貞享元年甲子年正月二十日示寂

慈岳定琛 支那福建省泉州府永春縣の人俗姓張明曆元年渡來  
臨濟正宗福濟第二代上慈下岳琛大和尚

寬文十二年より元祿二年正月まで在職拾八年  
元祿二年己巳年正月十二日示寂年五拾八

東瀾宗澤 支那福建省泉州府永春縣の人俗姓張延寶元年渡來  
臨濟正宗福濟第三代上東下瀾澤大和尚

元祿二年より同八年まで在職七年  
寶永三年七月より同四年五月まで再住二年  
寶永四年丁亥年五月三十日示寂年六拾八

喝浪方淨 支那福建省泉州府安平縣の人元祿七年渡來  
臨濟正宗福濟第四代本師上喝下浪淨大和尚

元祿八年より寶永三年まで在職拾貳年  
寶永三丙戌年七月二十三日示寂年四拾四

克 傳 寶永四年十一月より同六年八月四日まで監寺參年

獨文方炳 支那福建省泉州府安溪縣の人元祿六年渡來  
黃檗第十一代當山第五代上獨下文炳老和尚

寶永六年八月より正徳二年まで在職參年  
享保十乙巳年十月八日示寂年七拾

全巖廣昌 支那福建省延平府の人寶永七年渡來  
臨濟正宗當寺第六代上全下巖昌大和尚

七代

大鵬正餽

正徳五年より享保九年まで在職拾年  
延享三丙寅年十二月晦日示寂年六拾  
支那福建省泉州府晉江縣の人享保七年渡來  
賜紫黃裳第五代再住十八代當寺第七代上下大鵬正餽大和尚

八代

廓堂廣音

福濟監寺廓堂音和尚繼公和尚  
享保九年一月より延享元年三月まで在職貳拾壹年  
安永三甲午年十月二十五日示寂年八拾四  
延享二年より寶曆十年まで監寺拾六年  
寶曆十二年壬午年九月二十四日示寂

九代

活宗廣鱈

當山監寺靈鷲三代活宗鱈和尚  
寶曆十一年より明和四年まで監寺七年  
安永四年乙未十月七日示寂

十代

禪覺圓彰

光明六代福濟監院禪覺彰和尚  
明和四年より同七年まで監寺四年  
明和七庚寅年十月十二日示寂

十一代

禪綱正提

當山監院興徳四代禪綱提公和尚  
安永元年二月より安永二年まで監寺貳年  
天明五乙巳年六月八日示寂  
安永二年より天明五年まで拾參年末庵中輪番監寺

十二代

百呆正康

當山監院百呆康公和尚  
天明五年十二月より同六年まで監寺貳年  
寛政九丁巳年九月二十九日示寂

十三代

彌峰圓基

當山七世監院彌峰基公和尚

十四代

祖關圓密

天明六年より文化十一年まで監寺貳拾九年  
文化十四丁丑年六月十七日示寂  
當山監院開山第四代祖關密公和尚  
文化二年より同十二年まで監寺拾壹年  
文政五壬午年五月三十日示寂

十五代

泰林正旭

當寺前監院靈鷲六代泰林旭大和尚  
文化十二年より  
天保五甲午年十月十七日示寂

十六代

海觀通印

當山監院永聖第十代上海下觀印大和尚  
文化十二年より文政九年まで監寺拾貳年  
文政九丙戌年五月七日示寂

十七代

萬山通徳

臨濟正宗第四十世開元第五代紫山前監院萬山通徳大和尚  
文政九年より天保五年まで監寺九年  
天保十四癸卯年六月四日示寂

十八代

海印通光

本寺前監院光明十一代海印光大和尚  
天保五年五月より天保八年二月まで監寺四年  
天保八丁酉年二月二十五日示寂

十九代

提山國鼎

靈鷲第八代提山鼎公和尚  
天保八年六月より弘化元年八月まで監寺八年  
安政四丁巳年五月十八日示寂

二十代

金鳳行儀

光明第十二代金鳳儀公和尚

弘化元年八月より安政二年まで監寺拾貳年  
文久二壬戌年四月二十五日示寂

桐峰超鳳 臨濟正宗本寺前監院光明十三代桐峰鳳大和尚  
安政二年より元治元年まで監寺拾年  
明治六年十月七日示寂

戒林行芳 當寺監院永聖十三代戒林芳公和尚  
元治元年より慶應二年十一月まで監寺參年  
慶應二丙寅年十二月十日示寂

祖梁通柱 俗姓吉田  
明治二年二月より同三年七月まで在職貳年  
明治九年四月十日示寂

喚應行達 (俗姓高比良) 當寺監院永聖十四代喚應達公和尚  
明治三年七月より同九年まで在職七年  
明治十一年六月二十七日示寂

先聞超修 (俗姓松井) 當寺前住光明第十五代先聞修公和尚  
明治九年より同十九年二月まで在職拾壹年  
明治三十年十一月二十三日示寂

村山方中 明治十九年四月より同二十一年三月まで兼務住職參年

神龍寂驥 (俗姓谷)

明治二十一年より同二十二年十二月まで在職貳年

確翁真修 (俗姓德永) 臨濟正宗當寺二十七代確翁真修大和尚

明治二十二年十二月十六日より同三十七年まで在職十六年  
大正二年七月十五日示寂

祖梁廣柱 (俗姓進藤)

明治三十八年四月十一日より大正九年七月十日まで在職拾六年  
大正九年七月十日より

實道通行 (俗姓三浦)

明曆頃より元祿頃に亘り當寺に在住せし唐僧の名を左に掲ぐ。

雪機 支那福建省泉州の人

喝禪 明曆元年木菴に隨從して來朝萬治三年歸唐  
支那福建省泉州海澄縣の人

悅山 明曆元年木菴に隨從して渡來し萬治三年黃檗に上り後伏見善福寺住持  
支那福建省泉州半嶺縣の人

軸賢 明曆三年來朝萬治三年黃檗へ上り寶永二年黃檗山七代堂頭となる  
支那福建省泉州安平縣の人

西意 寬文元年來朝同八年十一月十七日當寺にて示寂  
支那福建省泉州通正縣の人

東岸 寬文十三年來朝(年三十五)延寶三年七月朔日當寺にて示寂  
支那福建省泉州南安縣の人

延寶五年來朝(年三十)元祿元年八月十五日當寺にて示寂

### 第三節 聖壽山崇福寺

寛永六年創建

所在 長崎市今籠町六拾番地維新前は長崎代官支配肥前國彼杵郡長崎村高野平郷に屬  
崎村高野平郡字風頭百四拾八番同拾年長崎縣西彼杵郡長崎村高野平郷八百六拾貳番同貳拾年三  
月長崎縣西彼杵郡下長崎村高野平郷千貳拾壹番同參拾壹年長崎市高野平參拾六番同貳拾年三  
正二年四月より現今の番地となつた。

崇福寺は大光寺の右側に在りて、左側は八坂神社に隣接して居る。真言山の麓に在るので寺地は較や高燥である。

長崎に過ぎたるものゝ一つとして數へられるのは寺院である。而して寺院の建造物のうちで最も壯麗なるは崇福寺及び福濟寺の建造物である。いづれも唐山の式に據れるものであるが、福濟寺は福濟寺の特色を有し、崇福寺は崇福寺の特色をもつて居る。而して崇福寺でなくてはみられぬものは龍宮門みたやうな山門や珍異奇巧を極めてゐる赤門である。

殿堂内の彩棟華梁、唐山名匠の彫刻に係る佛像佛具聯額いづれも明末文化の一面の縮圖とも謂へやう。看經も亦唐音である。往時唐寺の戸口に唐履の多くありしをみて感興を促された旅人もあつた。

所在 位置 崇福寺の建造物

彩棟花梁、佛像、聯額、看經、唐履

此寺地極不除髮  
舊來其地并得  
佛國樂供養英燒  
香土一名奉祀此  
點若委現主不祀  
伊且念礼中  
大光寺  
歲乙卯誕寶  
月廿一日  
廣中寺  
崇福寺  
才文



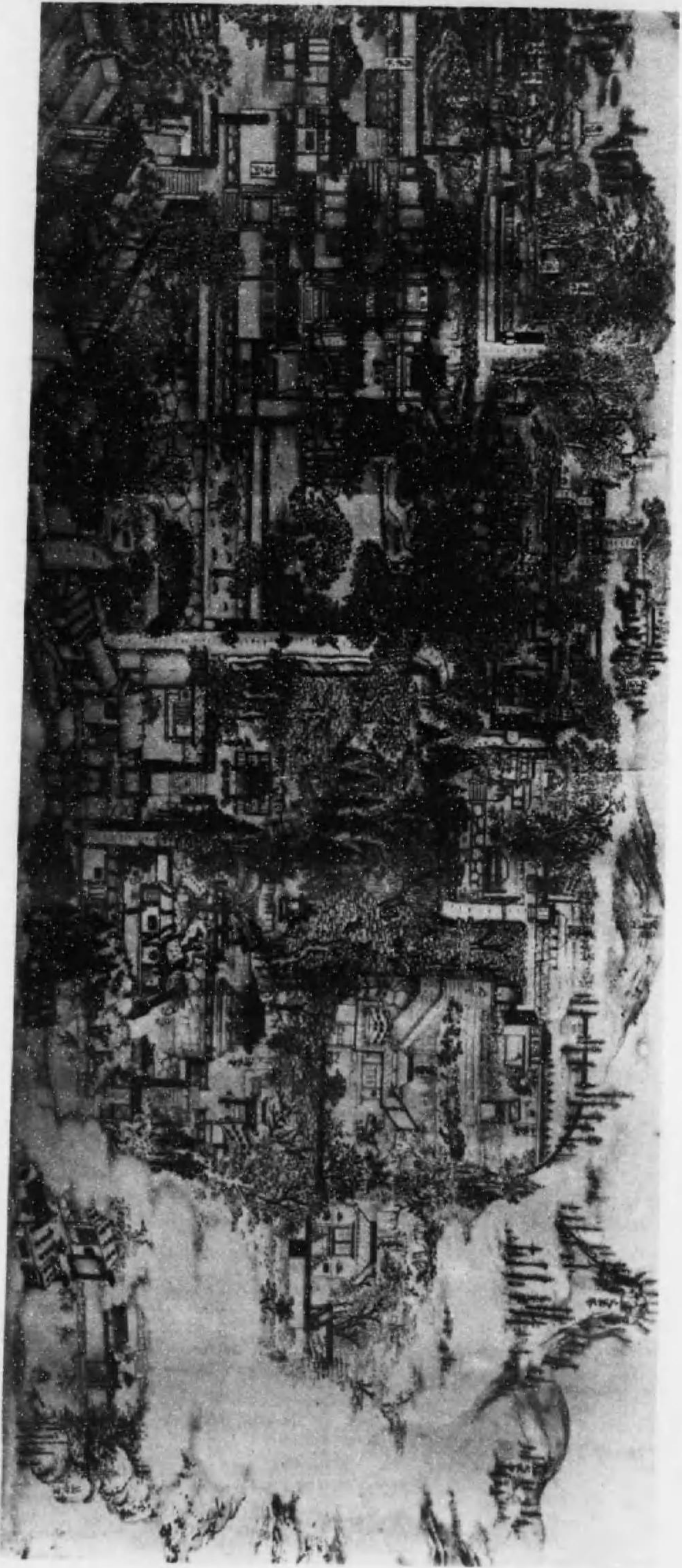
崇福寺開法即非一如

崇福寺四代千代呆性按





「藏郎次均根替小園原」 近附の其び及寺福崇の頃永寶祿元



刹  
竿

巨  
鍋

敷  
石

墓  
城

媽祖殿の前面下段にはもとは櫓のやうな刹竿があつて、赤い旗が翻つて居たものであるが、今はたゞ臺石のみ遺存して居る。往時陽春の媽祖祭の折には牡丹の花をさした瓶や桃饅頭が供へられたものであるが、これも今は口碑に傳へられるのみである。

崇福寺の大釜は長崎の兒童に最も親みのあるものゝ一つに數へられる。長崎の畫人石崎融思は大釜の繪をその著長崎古今集覽附録名勝圖繪に挿んで居る。北齋風に擬したもので、大釜の珍重されたさまを能く畫いて居る。

それから赤門を入りて大雄寶殿の前面下段のあたりから媽祖殿の邊りまで一杯石が敷きつめてある。降雨の後などははだしのまゝで歩いてもよいやうである。眞の意味に於ける石疊である。

殿堂の上手に隱元の髮壽塔、即非及び千駄の塔が三基相列んで居る。即非以前の住持唐僧の墓は割合に粗末である。それから後山には唐人の墓碑が夥しく列んで居る。唐通事彭城氏の墓所などはとり分けて見事である。

長崎に生まれて長崎に育つたものでも、時たまに崇福寺に至れば恰も親しく唐土に在るやうな感じがする。まして他郷の人々の感じは左こそであらうと思

ふのである。

眺望はあまり佳くない。南は小島の邊りから西は稻佐嶽を眺め眼下に市街を見晴して居るけれども、海灣は僅に一部分見ゆるのみである。而して當寺から眺望する山や丘の恰好が餘り佳くない。

聖壽山の八景、十景及び十二景の詩などのうちには眺望に關するもの少く、境内の風致に關するものゝ多いのは當然である。

往時境内には古松多く老杉も亦鋒のやうに其處此處に突立つて居た。後山は森々たる雜木林に包まれ、積翠重疊空に連り朱甍碧瓦をしてひとしほ壯麗ならしめたであらう。

それから唐土より船載せる橄欖樹の如きは頗る珍重されたものであつたが、霜雪に堪へざりしか、遂に枯れて了つた。今も猶ほのこれる後山の竹林はもと唐土より船載せる大明竹の繁殖したものであると云ひ傳へられて居る。そのほか自餘の唐寺の場合に於けるが如く異花珍草の栽培されたものも亦少くはなかつたらうが、今はそれらしいものは絶えて無い。

もと當寺の境内には多少の末菴があつた。而して此等の塔頭末菴は本寺殿堂

眺 望

風 致

橄 欖 樹

東庵の眺望

スミスの記事

背後の丘に在つたので、随つて本寺よりもそれだけ眺望は佳かつた。

萬延元年に宣教師ウイリアムズと共に廣福庵に暫く淹留したジョウジ、スミス (George Smith) はその著 Ten Weeks in Japan に於て先づ廣福庵の室内と庭園とのさまを説き進んで後山の風致と眺望とに就いて比較的詳細な記載を與へて居る。それを讀めば真に今昔の感に堪へぬのである。

Mr. Williams inhabited two rooms boarded off from the general area of the temple, and sheltered by a partition fro the cold wind. One of these was appropriated to my use. My camp-bed was spread; a table, chair, and other necessary furniture were extemporised for the occasion. In half an hour's time I was comfortably domiciled in my new abode. Our priest-landlord took considerable interest in the arrangement of my quarters, and betrayed no scruples in volunteering to remove the image of Budha's mother and the usual implements of idolatrous worship from a small chapel in the adjoining court, in the event of our requiring an extension of our lodging. A little yard upon which our apartments opened contained some fine specimens of Japanese floral beauty. Camellias, fuchisias, double-blossoming

peach and cherry trees, and rhododendrons displayed their richest tints and varied colours. Pines, firs, coppices of larch and the gracefully-waving bamboo, with a number of species of larger timber trees with their wide-spreading branches beginning to be covered with the green foliage of spring, rose on all sides around and above us; and the calm quiet stillness of the scene lent a peculiar charm and enchantment to the spot.

The hill on which our quarters were established rose immediately from the eastern portion of the city of Nagasaki. From our elevation of 200 feet above the general level of the city, we commanded one of the finest views which imagination could picture to the eye. At our feet lay the city, streets and thoroughfares, crowded with busy way-farers. Beyond it stretched the magnificent harbour with its spacious waters, the upper part of the inner bay being covered with shipping, native and European. In the distance a grand amphitheatre of verdure-clad hills closed in the prospect; while every spot of the rising acclivity in the immediate vicinity of our own dwelling was crowded with tomb-stones and family mausoleums, interspersed amid plantations of green trees and shrubs, which were frequented every evening by crowds of worshippers visiting the tombs of their fore-fathers and renewing the pious

offerings of fresh garlands and newly-gathered flowers.

スミスの記述は必ずしも修辭的誇張ではないが、それは寧ろ後山のやゝ高い處から眺望した景色を叙したものであらう。而して風致に關する記事は眞にその實を得て居る。この記事と崇福寺に關する詩とを比較すれば、幕末頃までは當寺後山の風致の佳かつたことを容易に想像することができぬ。

次に崇福寺十景や十二景の詩と夏の崇福寺を詠んだ詩などを掲げておく。

崇福寺即興

道 本

百尺松杉作翰屏、重重樓閣迥蒼冥、象王隔水天然白、獅子臨春分外青、十里煙花歸指顧、千家燈火照禪扃、雲堂梵靜聞蕭鼓、中國帆檣泊晚汀

和菴亭和尚聖壽山即興

謙

光

名奏、字謙光、號東谷、臨川院開基

積翠連空重疊屏、梵閣衝雲杳冥冥、天人接境迷清濁、獅象當門分白青、下界煙開千幅畫、高樓鐘動萬家局、景光從此殿宗鏡、日照長江風起汀

崇福寺

東 谷

梵刹松林遶金沙、一路明、山門餘祖蹟、禪室遠人情、樹老形容瘦、僧浮禮數輕、追思前代盛、法化感天京

夏日即事

道本

三五八

長日園林野澗濱，南窓寄傲一間身。當軒山色濃如黛，舊雨新晴總可人。

夜雨松濤

同

凌空翠粒繞祇園，雨過雄濤萬馬奔。夜背寒燈欹枕臥，却疑身化作鵬鯤。

松

彌登

好在扶桑第一峰，衝開碧落萬年松。春秋毓秀長生色，歲月鍾靈不老容。福蔭恩深垂天地，清風韻遠續先宗。曠時濟祖親栽處，直至如今勢似龍。

度夏偶作

伯珣

壽山忽覺四年長，半榻分過枕簟涼。雲影晚來猶淡蕩，峰前度夏轉青蒼。浮生酷有煙霞癖，何處常分翰墨香。客裏蕭然無一事，簾邊徒倚坐崎陽。

崇福十詠

千呆

聖壽山

虛空爲量，須彌作岡。仰祝聖壽，地久天長。

功德林

法檀布德，以福爲林。日積月累，山高海深。

髮壽藏

祖翁一髮，墜窮三界。光現浮圖，人天頂戴。

舍利塔

法身永固，慧命金剛。浮屠涌出，大地放光。

南薰堂

一線薰風，徧界全彰。豁開戶牖，觀體清涼。

臥雲居

雲中高臥，千峰爲座。柏樹花開，矜看結果。

燕月池

一泓止水，月到天心。澈澈湛湛，源流古今。

松下逕

明月在天，龍蛇滿地。稷稷松聲，談空說偈。

照水梅

一樹梅花，冰心玉鑿。斜照澄波，風流天鑑。

再來泉

長崎市史地誌篇 崇福寺

三五九

一碧湛然靈源法乳今再發祥澤流萬古

聖壽山十二景並序

法界聖凡各具一座壽山巍々獨立但爲迷霧所障遂成憎慢高山異見橫生反不自覺據實而論其跡雖異而體常同也語云仁者壽壽則久久則明明則通通則大大則化化則聖矣故知聖壽名山全體是道由斯分布成二六景主賓互照表裏渾融交光相羅如寶絲網可謂海西傑出一大勝槩者也既有如是殊勝焉能不按景申詞以博曉於天下俾天下後世讀詩而識景識景而知山知山而見道比於以捧喝接人者其省力不亦多乎

釋 大 衡

文 筆 峯

蒼松積翠怪石玲瓏  
斐然卓立在寺之東

突出金輪勢插天蒙恬到此也忙然書翰往復鋒常俊掃盡雲霞體愈堅乘直非同司馬鑑編瀾不落子昂箋曾因選佛場中立早占心空及第年

棲 鳳 林

祥光流溢錫窰窠森  
荀非鳳儀焉能指足

遶刺松杉蒼鬱深向來駐宿不凡禽豈饒易遠廊打損久固多因法需淋扇艷堪邀蘇軾賦興濤易待伯牙琴春秋難薄青蒼操無限風流貫古今

攀 雲 磴

磴道凌空險然拔峻  
欲窮溪澗由此而升

古路通霄不假梯縱饒巖嶮我能躋東天氣接南天迥下界光交上界齊乳洞深深惟見鹿烟蘿隱隱罕聞鷄岩頭涌出清涼水化作人間百道霏

望 海 巒

極頂放眸一碧萬  
頃去文筆峰不遠

欲盡山巔躡展躋烟消巨浸別端倪一漚未發臥龍穩萬浪競奔歸雁迷巖石已明通遠際摩空誰道隔雲泥還思香水遮那境點點鐘聲起岸西

海 天 門

聖天門啓福海波騰震  
且雄功非庸匠之可擬

第一峰頭立化權出興龍鳳動山川潤枯弄玉飄洪崖瑞世揚金布淡烟補席殊動應有在度籌漫說祗三千文林帶涌鯨江聳賓主道交代代賢

報 時 鐘

鐘聲四畔具足圓音  
應時無爽取信於人

經過水火脫青烟撈入虛空頂上懸押定陰陽能作主平分刻漏解通玄根塵既復聲何在離即雙銷耳寂然慶喜不來伴示墮羅睺那得奮推權

市 井 烟

寺通聚落井陌浮  
烟宛落竺乾勝境

歷々繁華入眼新崎陽合配五天春關藍暖得精藍暖聖景淳通俗景淳事業紛紜

非幻化笙歌雜沓本玄真現前佩缺釵鬢者盡是靈山會裡人

萬航津

津開寶藏萬國來航必須  
正眼妙明始得自他俱濟

海岸長江似掌平八方飄舶往來亨鼓音振處心休濁帆影收時意合清刑法既嚴  
須急避利途甚險莫侵爭頻嗟血染灘頭水話到其間目淚盈

再來泉

透石龍泉隨用不竭兩因主法  
罪化咸見轉止復流故取名焉

水出端然自有時逢綠澤物豈無知却歎熨斗煎茶美未羨晶瓶答語奇曾贊滄浪  
漁父引更嘉大海帝王詩洛伽定起拈楊柳遍洒塵沙刹土怡

步月臺

庭前鋪石賽過步臺  
山月夜明足供瑤詠

放曠繇來趣不禁間行偏愛素娥臨乍升殿角忘披卷暫憩松梢可助吟鷺嶺無端  
推上指盤山何故撥歸心爭如此際離分別一任光輝照萬林

放生池

背連經閣面向獅峯  
其形如一彎新月

游泳清泉數百鮮不知受畜幾多年孟柯引典難除垢流水宏經直上天好向禹門  
燎却尾休就淺沼認爲淵吾今助汝伽陀力即刻化龍利大千

濟貧鍋

暇禮巨護造自先師歲久蒙明人不  
敢犯爰收而作景以勉鑒林焉

大人作用不尋常火聚堆頭現釜王垂手入廊開萬善煎糜傾廩賑群荒凡軀既煖  
消塵念毛孔流充遍界香展轉齊成無上道婆婆識得是娘娘

沿革 唐人が長崎に唐寺を建てたことは埃及と貿易を開始せるギリシャの  
商人が埃及にその寺院を建てたことを想起せしむるとヒルドレス(Hildreth)は  
述べて居る併し唐人が長崎に唐寺を建てたのは單に自國語にて説教を聴聞し、  
埋葬、供養その他の儀式を行ふ爲めばかりではなかつた。日本に於ける吉利支丹  
宗門禁歴も亦その建立を促すことに與つて力があつた。

既に福濟寺の節に於て説いておいた通り、寛永時代は吉利支丹宗門の禁歴が  
年毎に峻嚴の度を加へてゆく時代であつた。來船唐人の間にも往々吉利支丹宗  
門を信奉する者があつたので自然禁教令は獨り邦人のみならず、尙ほ在留唐人  
に對しても等しく適用された。

元來日本に渡來する唐人等は貿易の利潤を獲ることを唯一の目的となして  
居るのに、動もすれば吉利支丹宗取締のために種々の故障が出來し場合により  
ては貿易の損得にもかゝる憂ひがあることを感悟して居た。それで長崎奉行

水野河内守の吉利支丹教徒に對する禁壓が最も峻嚴であつた寛永五年に泉南地方の唐人及び歸化人等はさきに元和六年に南京地方の唐人及び歸化人等の興福寺創建の例にならひて、地方別に泉南地方唐人を檀越とする福濟寺を建てた。而して彼等は先づ海神媽姐を祀り、各船に奉祀する媽姐の像をその寺に持ってきて在留中之を預け置き、自らその吉利支丹教徒に非ることを證明した。斯く地方別の唐寺を建てることは長崎奉行の宗教取締を受るに非ても、また自ら互に宗教上の取締をなして貿易の上に故障の起らざるやうに努むるにしても、彼等唐人にとりては最も策の得たるものであつたらう。その年水野河内守は大坂町奉行に榮轉することになつたが、その後任者は水野氏より吉利支丹教徒に對して一層殘忍なりし竹中采女正その人であつた。

竹中氏の吉利支丹教徒に對して峻酷を極めたことは中外の記録の齊しく證明する所であるから今こゝに多言を要せぬ。既に南京地方及び泉南地方の唐人及び歸化人等は各地方別に唐寺を建てたのであるが、福州地方の唐人等はよし唐寺を建てたき希望を持つて居ても、未だ唐寺を建て、居なかつたが、四圍の事情から推して一日も速に福州地方の唐人を檀越とする唐寺を創建することは

崇福寺の建立

媽姐

俗に福州寺と稱す

赤門創建

彼等福州地方の唐人にとりては焦眉の急であつたらう。

斯くて當地在留福州地方出身の王引、何高財、魏之琰、林仁兵衛その外の者は福州より唐僧を招請することになつた。而して寛永六年この聘に應じて長崎に來船したのが唐僧超然であつた。彼は時に六拾參歳であつた。崇福寺の記録によれば超然の生縁は單に福州とのみありて、その俗稱略歴は詳らかでない。

是に於て同年殿堂が現在の寺地に建てられた。當時はもとより主として海神媽姐を祀り唐船の入津や回唐の際に於ける媽姐像乗卸しの儀式などが唐僧の最も重要な任務で、その外は唐船の海上往來の安全を祈り、併せて客死唐人埋葬の式や先亡者の菩提供養の儀式などを司る位のことまで到底高遠なる宗教上の教義などを説く餘裕はなかつたらう。

崇福寺は斯くの如き背景を以て建てられた。福州地方の唐人等が建てた寺であるので、世にこれを福州寺と稱したのである。

寛永十二年に至り諸檀越は長崎奉行の許可を得て殿堂を興した。是に於て當寺はやゝ寺院らしくなつて來た。

その後九年を経て正保元年の頃より諸檀越は資を捐て、大に工を起し、殿堂



の設備を整ふることに着手した。同年林大卿及びその子林大堂即ち林仁兵衛後剃髪して獨振と云ふは赤門を建てた。この赤門は即ち今日一峯門と稱する建物である。この門の木材は悉く唐土の産にして彼國にて切組みたる上にて舶載し明末の建築法によりて建てたと云ふことである。この赤門は當寺の諸建造物中最も異彩あるものである。

超然示寂

正保元甲申年九月八日超然は示寂した。時に世壽七拾八歳であつた。先是寛永十六年唐僧水月及び普定兩僧が長崎に渡來して當寺に入り超然を輔けて當寺の事務を執つて居た。

附考 寶永四年長崎寺社帳に據れば、普定も水月も寛永十六己卯年に來朝し、普定は明暦元乙未年歸唐したが、水月は同年當寺に於て示寂したと云ふことである。兩僧の生縁は福州とのみありて、その經歷も詳らかでない。

大雄寶殿落成

超然示寂後超然の徒子普定は當寺の監寺となつた。

正保參丙戌年正月何高財の喜助によりて大雄寶殿が落成した。同年唐僧百拙生縁福州の人が徒子淨達及び覺開兩僧を伴ひて長崎に渡來し、當寺第二代の住持となつた。それで普定は監寺の職を辭した。

梵鐘鑄造

正保四丁亥年八月何高財、王引林、仁兵衛、魏之瑛その他の崇福寺諸檀越は捐資して鐘一口を寄進した。この鐘は長崎の冶工阿山助右衛門國久の鑄造したものである。

鐘鼓樓建つ

慶安元戊子年八月鐘鼓樓が建てられた。

慶安貳巳丑年四月十八日百拙は示寂した。それで淨達及び覺開は翌慶安參庚寅年まで監寺となつて居た。

百拙示寂

百拙示寂後諸檀越は協議して唐土より隱元の高弟たる也嬾性圭を招請することにした。也嬾に請啓を贈つた。也嬾唐光盤里の陳氏順治七年即ち慶安貳年秋は慶安四辛卯年夏いよ崇福寺の招請に應じて東渡することになりしにより福州

也嬾招請

黄檗山萬福寺に至りてその師隱元和尚に別を告げ、厦門より出帆した。然るに江口を離るゝこと未だ遙ならずして船海中の巖にあたりて摧破したので也嬾は遂に水死するに至つた。

同年唐僧道者超元生縁福建省興化府の人が渡來して當寺第三代の住持となつた。道者元は隱元の法弟亘信和尚の法子にして學徳優長なる名僧であつた。それで臨濟曹洞の俊秀が先を争ふて彼に書を贈り或は親しく長崎に來りて彼に參謁

也嬾水死  
道者渡來

したなかに月舟、當地暗蓋寺住持慧極、潮音、鵬州、暗宗、慧斑、禪貞、乾叟、鉄心、賀州、天徳寺住持、獨庵、暗蓋寺四代盤珪等の如きは最も彼に推服したもので、慧極及び潮音の如きははじめ道者元の徒子であつた。尙ほ陳九官、高四官、林二官等は彼を優遇し、平戸の松浦氏の如きも彼に厚く歸依したものである。それで承應元壬辰年十月道者元は平戸に遊びて大に歡待された。

承應三甲午年隱元は長崎に渡來して興福寺に入りしが、翌明暦元乙未年三月廿二日崇福寺諸檀越の請を受けて也、嬾性圭先年の公案を了し、五月廿三日崇福寺に進んだ。而して同年夏は興福寺及び崇福寺の兩寺に安居した。同年隱元は聖壽山の額を書いた。而してその法子たる即非に書を贈りてその東渡を促した。

即非、名は如一、支那福建省福州府福清縣の人で、萬曆四拾四年丙辰五月十四日申の刻を以て生誕し、林應鳳と云ふ者であつた。父は林英と稱し、母は方氏であつた。即非は幼にして穎敏等倫をぬいて居た。七歳にして學に入りしが、拾參歳の頃父を失ひ母と共に淋しく暮して居た。一日目連傳奇を演ずるを觀て大に感じ佛門に入るの志を立て、拾七歳の折に僧となつた。それから密雲和尚、西來彌公、隱元和尚等に參謁したが、後隱元和尚の法子となり、雪峰の崇聖禪寺に住した。明暦元

隱元

即非の渡來

乙未年隱元が即非の東渡を促したので、即非は東渡の途に就かんとして山を下りて發足し春に入りて寧徳縣まで至りしが、路通じ難かりしを以て一應東渡を見合せ、更に東渡の途につきて海上恙なく長崎に着し登岸して崇福寺に入つた。時に明暦參丁酉年貳月十六日であつた。

萬治元戊戌年道者元は回唐した。隱元渡來後は隱元直系の唐僧の勢力著しきものありて、道者元は寧ろ不遇であつたやうに思はれる。獨庵玄光はその著獨庵藁に於て道者元の師亘信和尚が衣拂を道者元に贈るために之を唐船に附したが同門の師ありて道者元を妬むの餘り衣拂を横奪し、尙ほ執政に諷して道者を逐ふに至つたと云ふ噂があつたと述べて居る。

同年即非の法子千猷は當寺の住持となつた。千猷はまた曇瑞或は千呆と云ひ、俗姓を陳氏と稱し支那福建省福州府長樂縣の人であつた。拾七歳にして出家し、明暦三丁酉年若一弘永等と共にその師、即非に隨侍して長崎に渡來し、崇福寺に入つたのであるが、道者の歸唐により、その後を承けて住持となつたのである。

萬治貳巳亥年即非の法子若一及び弘永は回唐した。この兩僧は即非と共に來船して崇福寺に入つたのである。

道者の回唐

千猷住持となる

若一と弘永

化林及鶴搏渡  
來高泉曉堂等渡

萬治三庚子年唐僧化林生緣福州府姓不詳及鶴搏が渡來して當寺に入つた。  
寛文元辛丑年六月十六日高泉曉堂の兩僧が渡來して當寺に入つた。即ち同年十一月四日は隱元和尙の大誕日に該當するので、唐土黃檗山萬福寺住持慧門はその師隱元和尙に祝賀の意を表せん爲め遙々法子高泉及び曉堂を日本へ遣はしたのである。高泉及び曉堂は間もなく宇治黃檗山に上りて唐土諸官人の壽章その他を隱元和尙に献じたが、隱元和尙は大に悦びて、この二人の法孫を日本に留置いたのである。同年唐僧柏巖も亦渡來して當寺に入つた。

高泉

高泉は伏見佛國寺に住し元祿五壬申年正月廿二日公命を請けて宇治黃檗山第五世の住持となり、尋いて元祿八乙亥年五月廿八日紫衣を賜はり、同年十月十六日遷化した。時に世壽六拾三歳であつた。

柏巖

柏巖支那福建省漳州府漳浦縣の人姓黃氏は寛文三癸卯年その師即非に隨侍して黃檗山へ上り後長崎へ回りにて崇福寺に臥雲菴を建て、寛文十二壬子年再び黃檗山に至り松陰堂に在りて隱元和尙に隨侍し、延寶元癸丑年八月十九日黃檗山の養慶堂に於て示寂した。

一ノ瀬無縁塔

寛文貳壬寅年當地に痘疹大に流行し、無數の嬰兒が夭折したので追福の爲め

即非黃檗山へ上る

一ノ瀬街道の傍に無縁塔が建てられた。その碑面には當寺即非、化林、碧崖、柏巖、瑞等の偶文などが刻してある。

化林住持なる

寛文三癸卯年八月九日即非は唐通事彭城久兵衛を伴ひて長崎を出發し、途中小倉にて太守小笠原氏の優遇をうけ、それから黃檗山に上りて隱元和尙に謁した。その際千駄も亦即非に隨侍した。而して化林が千駄の席を繼ぎて、當寺の住持となつた。

即非小倉廣壽山福聚寺を草創す

寛文四甲辰年即非は黃檗山を辭して歸途に就き回唐の念動かすべからざるものありしが、途上小倉にて太守小笠原忠真に引きとめられ、翌寛文五乙巳年同地に廣壽山福聚寺を創建し、寛文八戊申年に至りて當寺へ還つた。

即非報時所の鐘銘を撰す

寛文五年八月十二日報時所が島原町に設置された。その鐘の銘は即非の撰に係るものである。

化林示寂

寛文七丁未年六月三日化林は示寂した。時に世壽七拾壹歳であつた。是に於て翌寛文八戊申年千駄は諸檀越の請によりて再び當寺の住持となつた。

千駄再住

廣福庵建つ

同年千駄は當寺の境内に廣福庵を建てた。後來舶唐人等は縁銀を當庵に贈ることになつた。而して同年獨振も、林仁兵衛は當寺山門の附近に廣善庵を建てた。

廣善庵建つ

支那黄檗山  
白願よりの謝  
法使渡来す

即非隱元髮  
塔を立つ

媽姐殿石堤敷  
役

范道生逝く

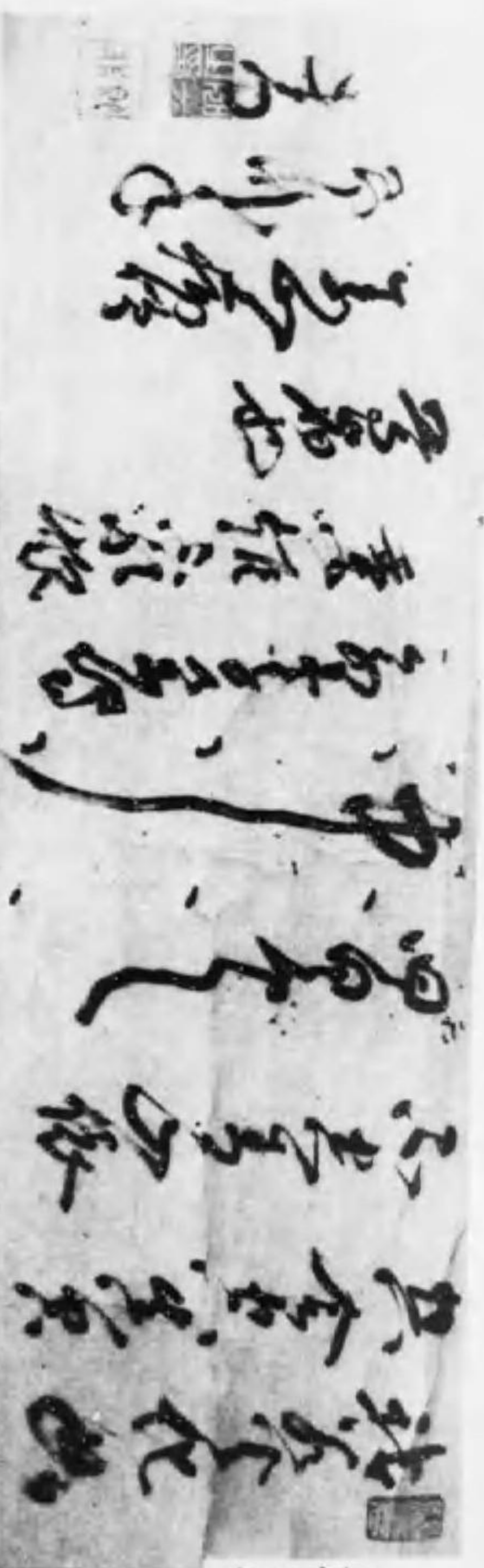
寛文九己酉年閏十月二日支那黄檗山萬福寺住持虚白願和尚よりその師隱元和尚への謝法使として唐僧兩人が長崎に渡来した。それで、その翌三日即非はこの兩僧を崇福寺に一時滞留せしめたき旨を法子千駄を以て長崎奉行所に願出でたが、五日に至りて之を許可せられたので、同日兩僧は上陸して崇福寺に入り、その後間もなく當地を出發して十一月六日に宇治黄檗山に着して隱元和尚に謁し、同年冬歸唐した。その際隱元は費隱和尚を祭るの文と林月樵護法を輓するの偈とを謝法使に託した。

同年即非は當寺後山にその師隱元の髮塔を建てた。碑面にある篆書は林道榮のかいたものである。

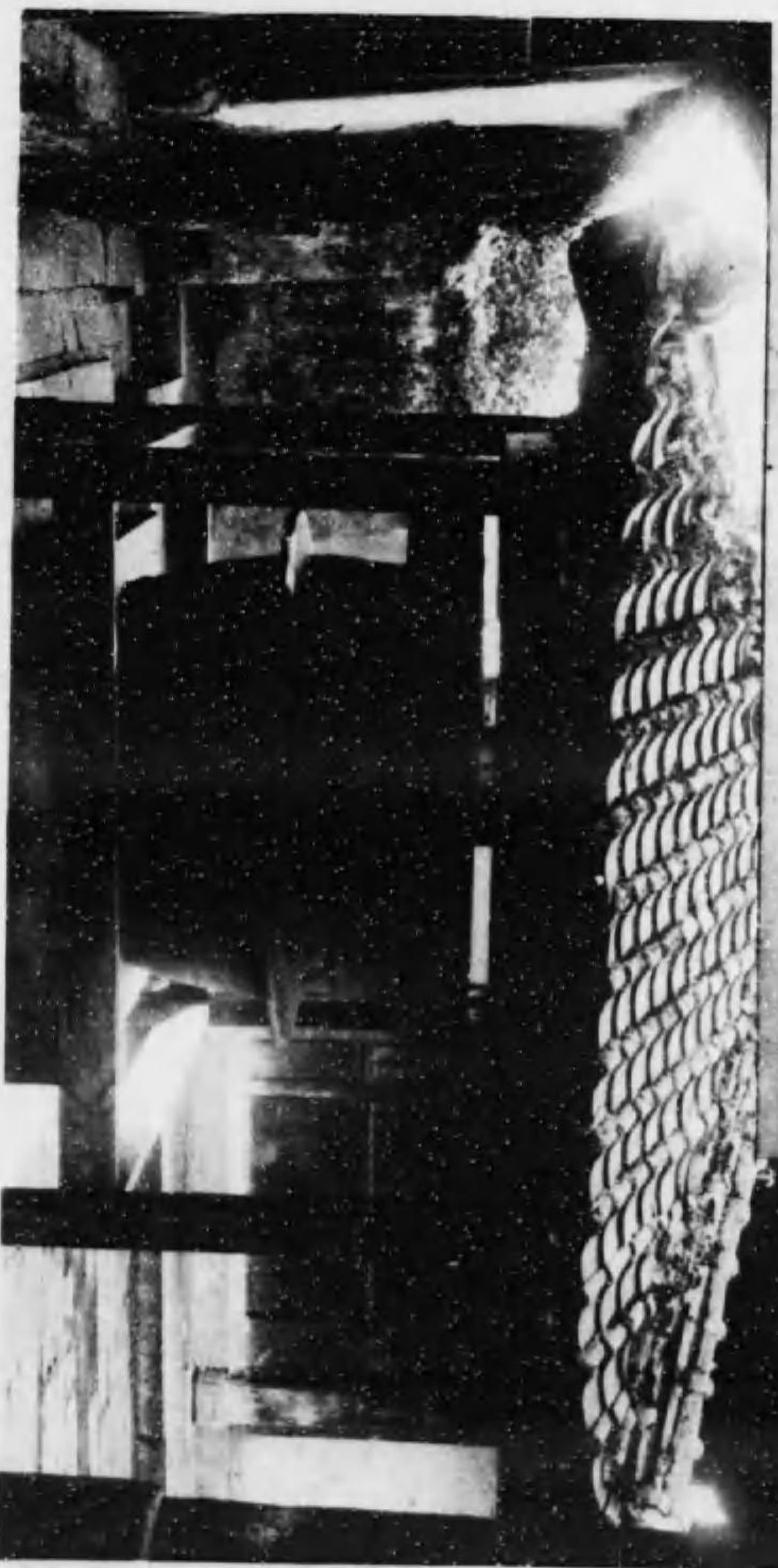
同年東京船主魏之瑛より當寺に銀五百兩を喜捨したので媽姐殿前上下の石堤の敷設工事に着手したが、寛文十一辛亥年に至りて工を竣つた。

寛文十庚戌年何性常より銀拾兩を喜捨したので、當寺は山園一ヶ所を購ふた。尚ほ何性常及び翁志鑑は佛工をして十八羅漢の像を塑せしめて之を當寺に寄附した。

同年十一月二日夜佛師范道生は逝去した。時に春秋僅に參拾六歳であつた。



火化の塔



天和機鐘の大釜

なほち當寺の後山に埋葬された。

范道生は詩文書畫を能くし、佛像を造ることに極めて巧みであつた。當寺の十八羅漢の像はその最後の作である。と云ひ傳へられて居る。尙ほ當寺の外興福寺福濟寺及び宇治黄檗山萬福寺に於て彫刻した佛像は尠くはなかつた。

臥雲庵創建  
即非遷化

同年柏巖は臥雲庵を境内廣福庵東隣に建てた。

寛文十一年辛亥年五月廿日即非如一は當寺に於て示寂した。時に世壽五拾六歳であつた。乃ち後山に於て茶毘に附し隱元髮塔の左側に葬つた。それから千駄は先師即非の舍利骨の一部分を黄檗山萬福寺へ送り度き旨を長崎奉行に願出でたが、長崎奉行より當時切支丹宗門の者共死骨灰などを類門の内へ持配るものも有るにより、念の爲め遺骨の先方へ着次第に是非萬福寺方丈より受取證文を差越すべき旨の申渡しがあつた。而して同年十一月廿一日千駄は先師即非の舍利を携へて宇治黄檗山へ出發した。

千駄先師の遺骨を携へて黄檗山へ上る

獨立示寂崇福寺内に於て茶毘に附す

同年千駄は末次平藏の喜捨によりて先師即非の舍利塔を設けた。

寛文十二壬子年十一月六日獨立性易は當寺廣善庵に於て示寂した。時に春秋七十有七であつた。乃ち千駄は聖壽山に於て之を茶毘に附した。而して侍徒慧明

は遺骨を護送して宇治黄檗山に至りて、其處に之を埋葬した。  
 獨立は明國浙江省杭州府仁和縣の人にして萬曆貳拾四年丙申貳月拾九日を以て生誕し、俗姓戴氏、幼名を觀胤と云ひのち笠字は曼公と稱した。父は銓部戴敬橋と云ひ晋の戴安道の後裔にして家世々儒を業として居た。母は姚江の陳龍江の女であつた。母陳氏は六産して七子を乳した。即ち末産には雙男が生まれ、その一が獨立であつた。

獨立は荷鋸人、天外老人、就庵、楊芳等の號をもつて居た。天資穎悟、蚤く費序に登り、博く古今に通じ、詩文を能くし、醫術に達し、特に痘科に於ては、屢廷賢の秘奥を傳へ、また書善くし、書道に於ては入神の譽があつた。明亡び清代るや、一天虜塵、慘憤に勝へず、乃ち長水語溪に往きて養晦したが、承應貳癸巳年早春行を發し、同年三月長崎に渡來して、額川入徳の家を寓した。偶々同年七月朱舜水も亦渡來して同じく額川氏の客となり十二月に至り去つて安南に渡海した。それから翌承應三甲申年安東省庵が京を去りて長崎に遊びし際に獨立は省庵と相識るに至つたのである。而して同年七月初旬隱元和尚の長崎に渡來するに及び、獨立は十二月八日隱元の座下に歸して、薙染したのである。

明曆元乙未年八月獨立は隱元に隨從して攝州富田の普門寺に至り、尋いて萬治元戊戌年には隱元と共に江戸に赴きしが、その際松平伊豆守信綱などは深く獨立に推服して之を江戸に留錫せしめんと欲したが、故障出來して遂にその事は成らなかつた。萬治貳己亥年長崎に還り興福寺内幻寄山房に留ること三載に及びしが、寛文三癸卯年三月八日の大火に興福寺が焼失して後は居るに地を擇ばなかつた。

寛文五乙巳年春即非は小倉廣壽山福聚寺の開創に際し獨立を迎へて記侍に充てた。而して太守小笠原氏は獨立の爲めに山中に一つの静室を建て、その憩息の所となした。獨立は自ら之に扁して白雲室と稱した。その後久しからずして獨立は長崎に還つた。

獨立は唐僧としてよりも寧ろ學者として將また名醫として當時景仰されたものである。中國九州の諸侯及び重臣は遙々使を遣し辭を厚うして彼を迎へ重病を診察治療せしめた。就中、岩國の吉川氏及び小倉の小笠原氏などはよく獨立を迎へたものである。それから黒田氏の家臣奥西善右衛門も肥後加藤氏の臣長崎高木作右衛門宗順の實父の如きは重病に罹りし際實子高木作右衛門の幹施によりて獨立を筑前に迎へ

てその治療を請ふたものである。長崎の高玄岱及び北山道長吉川氏の臣池田嵩山等の如きはその高足弟子であつた。

延寶貳甲寅年唐僧雪堂支那福建省泉州府同安縣の人俗姓陳氏及び玉岡支那福建省福州府福清縣人俗姓劉氏の兩僧が長崎に渡來して當寺に入つた。

延寶參乙卯年十月三十日林汝默は思明船に乗りて回唐の途に就きしに、海上にて大風に遇ひしたため再び長崎へ還りしが、十一月八日小ヶ倉附近にて水死した。林汝默は隱元和尙俗縁の甥であつたので千駄は長崎奉行に請ふてその死體を當寺境内に葬つた。先是、林汝默は萬治三年にも亦寛文九年にも隱元に謁せんが爲め來船したが、我が國法嚴にしてその面謁を許さなかつたので志を得ずして歸唐したのであるが、延寶元癸丑年四月三日を以て隱元が遷化したことが唐船によりて故國に傳へられたので、林汝默は弔意を表せんが爲め延寶三年長崎に渡來したのであるが不幸にも斯く水死するに至つたのである。

同年千菴は廣福庵に退隱したので、玉岡が當寺の住持となつた。

同年諸國米穀登らず廻米不充なりしたため、當地細民の窮迫はいよゝゝ甚しくなるばかりであつた。是に於て千駄は同年五月中旬頃から施粥をはじめた境

唐僧雪堂及び玉岡渡來す  
隱元の甥林汝默水死す

玉岡住持なる千駄の施粥

内には幕を張りシツボクを列べて細民に粥を恵んだ。初日には五百人餘りも來たが、一日ましに人數がふけて後には毎日千五百人餘になつた。六月八日千駄は托鉢のため市中を巡り長崎奉行所に至りしが、奉行岡野氏は米十俵を寄附した。その後代官末次平藏は一七日の間粥をたき、末次平左衛門も亦三日間粥をたいた。餘裕ある町々よりも思ひ／＼に一日或は二日づゝ粥をたき、町年寄衆も一七日の間粥をたいた。斯く當地の有力者が千駄を輔け崇福寺内にて粥をたいてくれたので、千駄は遺憾なく施粥をなすことを得て七月廿八日を以て之を終り、残れる米を非人共に分配し、その夜は施餓鬼の式を舉げた。

延寶五丁巳年和僧悅岸は寺内隱元髮髻塔西側に廣德庵を建てた。

同年當寺の招請に係る唐僧貳人が廣東より東渡の途に就いたが、廣東にて風難に遇ひ師の僧水死するに至りしを以て弟子の僧は遂に渡海を斷念した。兩僧共名、生緣略歴等不詳

延寶八庚申年諸國米穀登らず廻米不足なりし爲め、同年の暮頃から當寺の細民はいよゝゝ困窮するばかりであつた。それで福濟寺の慈岳が卒先して翌天和元辛酉年正月十七日より寺内に於て施粥を始め、同年六月之を終つたことは既

廣福庵創建

當寺招請の僧廣東にて水死す

千駄の施粥

に福濟寺の節に於て説いておいた。その後またく廻米の缺乏によりて長崎は再び饑饉状態に陥つた。

是に於て崇福寺の千駄は同年九月十五日から寺内に於て施粥を始めた。千駄は托鉢のため町々を巡りて有志者の寄附を募つた。恰もその頃長崎兩奉行川口源左衛門及び宮城監物は町巡見のついでに崇福寺に立寄り施粥のさまをみて感激し早速貨物銀の内貳拾貫目を粥施行のために千駄に寄附することにした。

同年十一月十日長崎奉行宮城監物は市中の者は借屋住家持によらず手前よろしからざる者共へ壹人前米壹升五合と銀壹匁宛を支給し、崇福寺にて施粥をうくる者には右の手當の上に米八合を與ふることにした。即ち米合せて六百石餘銀總額四拾六貫目餘貳口合計百貫目餘の支給があつたわけである。

千駄は施粥に努めて居たが、十一月廿九日までにて施粥の米は絶えてしまつた。それで千駄は長崎奉行宮城監物に米の支給方を歎願して官米五百俵と丁銀拾貫目を下附された。これにて翌天和貳壬戌年二月までは施粥をつゞけてゆく見込があつた。それから町年寄衆よりも當寺へ銀貳拾枚を寄附した。

同年十二月廿一日細川越中守は米千石を下直る米壹俵貳拾六匁に當る壹俵拾九匁替にして長崎惣

町中に賣つた。それから同月廿六日長崎奉行宮城監物は手前よろしからざる者へ壹人前米壹升五合と銀壹匁四分宛を支給した。

翌天和貳年正月廿八日頃まで崇福寺の施粥は繼續したが、又々米は缺乏するに至つた。その際長崎奉行宮城監物は壹ヶ月米五百俵宛を崇福寺に渡して施粥をなさしめることにした。

貳月十四日同十五日兩日は崇福寺にて施粥がなかつたので長崎奉行は壹人前貳合五勺宛兩日の間長崎惣町へ支給した。

その頃施粥をうけなかつた町は本下町、今下町、大村町三町丈けであつた。

二月中旬には長崎奉行より官米千石を市民に借した。代銀支拂は同年八月迄と云ふことであつた。三月中には米價が餘程下落したので、市民は多少餘裕を得ることができた。

それから四月十四日施粥の大釜が出来たので鍛冶屋町より車に乗せて崇福寺に運び、本堂の前に竈を設けてこの大釜を使用した。この大釜は口径六尺壹寸壹分、深五尺七寸、重量千九百六拾五斤で代銀壹貫參百目を要した。

五月朔日より十七日の間當寺に於て疫病退散祈禱のため讀經をなし祈禱の



札を町中へくばつた。而して同月十五日千駄は施粥を終つた。

同年唐僧雪堂は寺内に不二庵を建てた。

貞享參丙寅年唐僧玉岡は當寺境内に竹林院を建てた。

元祿元戊辰年和僧江外木下氏、千駄の法子は當寺境内に清涼庵を建てた。

元祿貳己巳年唐僧惠雲は祇樹林を興福寺境内より當寺境内に移した。

元祿六癸酉年七月二日唐僧大衡支那福建省福州府福清縣の俗姓翁氏及び靈源支那福建省福州府連江縣の俗姓許氏

長崎に渡來し、同四日登岸して當寺に入つた。同年七月九日唐僧尋庵が福濟寺の

招請に應じて長崎に渡來したが、招請及び斡旋方に手落ありとて歸帆を命せら

れ、九月二日回唐した。その際千駄は色袖の袴一つ衣一つを葬庵に贈り、福濟寺東

瀾は白日野綿入着物、白さや單物を、また興福寺悅峯は色さやの衣一つ古蒲團、綿

入一つを、唐通事申よりは野菜などをそれ／＼贈つた。

同年八月十六日千駄は支那黃檗山天池和尚へ地藏經三部紙子三端を福州船

に託して贈り度き旨願出でたが、同月廿二日に至り地藏經を唐土へ渡すこと丈

けは許されなかつた。

同年八月十八日暴風雨のため參拾四番船及び四拾六番船は破損甚しく修復

不二庵創建  
竹林院創建  
清涼庵創建  
當寺境内に祇樹林移轉す  
大衡及び靈源渡來  
唐僧尋庵渡來

唐人破船の船材を寄進薪と

廣福庵改築  
大慈庵創建

千駄示寂

綠羅庵創建

養源院、曇華院、兜卒院等建立

極樂庵創建

棲雲庵創建

唐僧別光智勝兩人渡來

の見込なきにより、同月廿六日船板船具等にして尙ほ用ひ得べきものを除き、參拾四番船は崇福寺へ、それから四拾六番船は福濟寺へ、それ／＼寄進薪として贈られた。同年千駄は廣福庵を改築した。而して大慈庵が寺内に建てられた。この庵は寶永貳乙酉年に至りて西山郷諷方の馬場に移された。

元祿八乙亥年千駄は宇治黃檗山の住持となつた。而して元祿十一戊寅年七月廿四日紫衣を賜はり、寶永貳乙酉二月朔日七拾歳にて遷化した。同年大衡は高野平郷に綠羅庵を建てた。而して靈源は大衡の席を繼いで當寺の看坊となつたが翌年繁を厭ひて綠羅庵に退閑したので、大衡は再び住持となつた。

元祿十一戊寅年大衡は片淵郷に養源院を建てた。而して翌元祿拾貳己卯年には曇華院高野平郷及び兜卒院寺内を建てた。

元祿十四辛巳年大衡の法子鐵柱は高野平郷に極樂庵を建てた。

寶永貳乙酉年和僧昌峰千駄の法子は中川郷に棲雲庵を創建した。

寶永六己丑年五月廿日唐僧別光諱は慧徹、後寂透、俗姓陳氏、支那福建省延平府大溪縣の人、福州鼓山寺恒濤和尚の徒子及び智勝後義勝、別光、同郷俗姓鄭氏兩僧が長崎に渡來し、同月廿五日登岸して崇福寺に入つた。蓋し寶永四

丁亥年當寺住持大衡が支那福建省福州府の鼓山寺へ請啓を贈りしにより同寺

住持恒濤和尚は別光を當寺の後住として推薦し、また智勝をその隨侍として同伴せしめたのである。

別光示寂  
義勝住持とな

寶永七庚寅年別光は大衡の席を繼いで當寺の住持となつたが、同年十一月廿八日遷化した。時に世壽參拾七歳であつた。是に於て義勝も智勝は別光の後を承けて當寺の住持となつた。時に正徳元辛卯年五月二日であつた。

上善菴建立  
義勝示寂  
靈源黃檗山の  
住持となる

享保元丙申年當寺住持唐僧義勝は上善菴を建てた。而して同年八月六日示寂した。同年靈源は宇治黃檗山に上りて第九世の堂頭となり併せて當寺の住持を兼帶した。享保貳丁酉年祇樹林は當寺境内より西山郷に移轉された。

客殿の建築そ  
の他殿堂の修  
繕  
唐僧道本の渡  
來

享保參戊戌年客殿の建築及び自餘の殿堂の修繕工事が始まつたが、翌享保四己亥年竣工した。その工費壹百貫目餘はみな唐人の寄進したものである。

伯珣及び大成  
渡來  
伯珣住持とな

享保四己亥年六月廿三日唐僧道本寂傳支那福建省福州府福清縣の人俗姓陳氏が長崎に渡來して當寺に入り翌年九月當寺の住持となつた。

道本は竹林院に退隱した。

鐘樓、護法堂  
等改築  
寶授庵及び天  
壽庵創建

享保十三戊申年伯珣は鐘樓を改築した。尋いて享保十五庚戌年には唐僧大成が寶授庵を小島郷に創建し、翌享保十六年辛亥年八月には護法堂が再建せられ、その翌享保十七壬子年には天壽庵が片淵郷に建てられた。

林達升九品淨  
土圖經の屏風  
を寄附す

享保十六辛亥年十二月廿六日道本は遷化した。康熙貳甲辰年正月八日生誕時に世壽六拾八歳であつた。

元文元丙辰年唐船主林達升は九品淨土圖經の屏風を當寺に寄附した。この屏風は十六觀圍屏風と稱せられた。毎年涅槃會盂蘭盆會などの節に諸人の觀覽に供したものである。

元文貳丁巳年當寺は興福寺及び福濟寺と共に唐僧招請を許可せんことを幕府に請ふ所があつたので、幕府は之を許可したけれども、唐船主の幹施その宜しきを得ざりしたためか、遂に唐僧は渡來しなかつた。

元文四己未年和僧謙光寂泰は新大工町に臨川院を創建した。  
寶延貳己巳年天華庵が八幡町に創建せられた。  
寛延三庚午年住持唐僧伯庵は退隱して和僧克明が監寺となつた。爾後唐僧の

臨川院創建  
天華庵創建  
和僧克明監寺  
となる

伯珣黃檗山第  
貳拾世の住持  
となる

大成黃檗山第  
貳拾壹世の住  
持となる

山門類焼

大成示寂

禮物毘布調達

廣徳庵修繕

來舶するものなかりしを以て幕末に至るまで和僧が相繼ぎて監寺となり當寺の事務を執つて居た。即ち伯珣以後當寺には唐僧住持は居なかつたのである。明和貳乙酉年貳月唐僧伯珣は黃檗山第貳拾世の山主となつた。而して安永五丙申年十月二十三日遷化した。時に世壽八拾貳歳であつた。是に於て唐僧大成がその後を承けて黃檗山第貳拾壹世の山主となつた。先是延享參丙寅年大成は黃檗山に上りて、そこに留寓して居たのである。

明和參丙戌年二月廿七日西古川町より出火して十六町に延焼し、翌日朝漸く鎮火したが、その際當寺の山門も亦類焼するに至つたのである。

天明四年黃檗山主唐僧大成が唐僧招請の件を幕府に願出でたので、長崎代官は當寺及び興福福濟兩寺へ問合する所があつた。

同年二月十日大成は黃檗山にて遷化した。

同年三月從來當寺及び興福福濟兩寺より唐船主へ禮物として贈るを例とせる毘布の調達方に就いては請負人ありて専ら斡旋の勞をとりしものなるが、當年より改めて長崎會所に於て禮物毘布を調達することになつた。

同年四月廣徳庵が修繕された。而して同年六月には高野平郷なる極樂庵は片

極樂庵は天壽  
庵内に移轉す  
大成公借銀債  
還法

幕府より金銀  
融通のため當  
寺へも出金を  
命ず

同上敷同の布

養源院曇華院  
内に移轉す

末庵僧侶の不  
如法

寄進銀

眉山破裂死亡  
者大法要舉行

淵郷なる天壽庵内へ移轉せられ、その敷地は賣却された。

天明六丙午年もと黃檗山主唐僧大成の公借銀四拾貫目餘は當寺に於て之を引受け當年より年賦唐船主に二百貫の割にて上納することになつた。

同年六月幕府より近年金銀融通宜しからず、諸侯差支へあるを以て幕府より融通の爲め、諸國寺社山伏宮門跡尼御等を除く等へ上の分一ヶ所にて金拾五兩以下は相應の出金高を定め、諸國御領私領百姓は持高百石に付銀貳拾五匁宛但し大坂表にて御用金當年より寛政貳庚戌年迄五年間出金すべき旨を命じたので、當寺は金拾貳兩を差

出す事にした。幕府は應奉金銀に公儀の金銀を差加へ、大坂會所に於て利足七朱の積りを以てが諸侯へ相當の擔保提供の上貸附ける積りであつたが、諸難の聲が頗る高かつたが

同年八月幕府は關東筋其外出水被害ありしにより之を撤回する旨を布達した。

寛政元巳酉年五月片淵郷なる養源院は維持困難なるに因り高野平郷なる曇華院内に移轉された。

同年六月祇樹林の本光、慈眼庵の泰山兩僧は不如法のため退隱せしめられ、尙ほ大慈庵前住恒山及び庵主旭山は戒飭せられた。

同年唐人より當寺へ贈れる寄進銀は五拾壹貫七百目餘あつた。寛政四壬子年四月朔日島原眉山嶽破裂のため該地方に於ては死亡するもの少

異變の際小笠原氏の陣所に充つべきことを承諾す

くはなかつた。それで當寺は同年五月死亡者のために大法要を舉行した。同年五月當寺監寺鳳山は小笠原右近將監の請により異變ある際には當山を同氏の陣所に充つることを承諾し、長崎奉行平賀式部少輔にその旨を届出で、奉行の認可を得たこの件に就いて直接鳳山に交渉したのは小笠原氏の家臣山路太次兵衛であつた。

鳳山の施粥

寛政五癸丑年五月監寺鳳山は市内の貧民の爲めに施粥を行ふた。施粥に使用した白米九石四斗は篤志者の寄附したものである。

祠堂を開山堂に併合す

同年祠堂朽腐太しきにより之を解きて開山堂に併せた。

王履階島原罹災變死者供養のため寄進す

寛政六甲寅年唐船主王履階は島原地方罹災變死者供養の爲めに石佛經千枚線香五拾把の寄進を願出でたので、長崎奉行は之を唐三ヶ寺に預け置くことにした。

費晴湖その父及び船員を託す

同年六月唐船主費晴湖はその父費正夫及び乗組船員等の遺骨の保管方を當寺に託した。費正夫及び乗組員數名はその唐船が明和貳乙酉年二月十日薩摩領阿久根村の内大川村地方にて瀬に乗りあて、難破した爲めに不幸にも溺死したのである。

當寺監寺與福寺の監寺を兼

同月與福寺無住に因り、當寺及び福濟寺の監寺は交代にて與福寺の監寺職を兼帯することになつた。

媽姐堂修繕

同年媽姐堂大破につき唐船主より修繕料として當寺に砂糖壹萬斤代銀拾貳貫目を寄附したので、當寺監寺は媽姐堂に大修繕を加へた。

寺用米

その頃當寺は毎月米拾俵宛末庵は養儀宛を使用したものである。これは長崎代官所より前借し、その代銀は長崎會所に於て唐船主より當寺への寄附銀のうちより差引くことになつて居た。

唐醫胡兆新患者治療

文化元甲子年二月より翌文化貳乙丑年二月頃迄唐醫胡兆新は毎月二七日を定日として當寺及び聖福寺に於て患者の治療に従事した。

山門を再興せん

文化貳乙丑年十二月在留諸船主及び唐國荷主等は山門の再建を長崎奉行成瀬因幡守へ願出で、之を許可せられた。それで翌年五月より經營を始めたのである。この山門は明和三丙戌年二月廿七日夜西古川町より失火して延焼拾六町に及びしが、その際類焼し、その後礎石のみ残りて再建の機未だ熟するに至らなかつたのである。

異變の際唐人避難所たるべきこと

文化五戊辰年十月當寺は異船襲來の際には在館唐人の避難所たるべきこと

きこを命ぜ  
らる  
曇華院小笠原  
氏の陣所に充  
てらる

を指定された。但し若し當寺危き節は唐人を妙相寺へ立退かしむべきことを命ぜられた。随つて異變の際には當寺末庵曇華院が改めて小笠原氏の陣屋に充てられることになつた。

天壽庵及び清  
涼庵移さる

文化八辛未年六月片淵郷天壽庵は高野平郷曇華院内に移され、また爐粕町清涼庵も大破により寺内に移されて、その敷地は賣却された。

同月一ノ瀬無縁塔百五拾年忌供養の法會が舉行された。

同年七月九日勘定奉行柳原主膳正及び長崎奉行曲淵甲斐守は當寺に立寄つたが、その際當寺はその需めに應じて左の品々を觀覽に供した。

繪入金字金剛經 康熙甲申中央門朱士瑛筆 十八羅漢卷物 玉湖書筆 隱元木庵即非贊

聖壽山圖 大衛十二景詩序 林道榮贊 草花園 獨立贊

同年十二月當寺は借用銀壹百拾貫目を參拾七ヶ年賦にて拂込むことになつた。後文政八乙酉年に至り拂込額を從來の年賦銀の半額に改め四拾八ヶ年賦にて仕拂ふことに變更した。

文化拾癸酉年大悲菴の順昭及び綠蘿庵の禪海は多年の功勞により孰れも菴主に昇進した。

借用銀の整理

山門再建成就

寺 債

祇樹林繼席事  
件

媽姐門改築

山門吹倒さる

文化拾壹甲戌年唐商荷主及び在留諸船主中より大門再建料として一船に付白砂糖五百斤宛百艘分都合五萬斤の高を年々持渡り再寄附いたし度旨を願出でたが同年二月之を許可せられた。是に於て四月より經營を始め十月に至りて上梁式を舉げその後數月を経て竣工した。

文政八乙酉年五月寺債總額九百五拾貫目に達したので之を百九拾年賦にて毎年五貫目宛仕拂ふことにした。

文政十丁亥年三月祇樹林繼席問題が漸く解決した。先年より開基雪摩の法子鉄舟下惠燈と同じく雪摩法子南岸下華山との間に繼席問題に就いて紛紜を生じて居たが、當月に至り兩系各二十年交代にて庵主たるべきことにとりきめ、漸く事件が落着いたのである。當寺監寺蘭溪はこの事件によりて九日間の逼塞を命せられた。

同年三月下旬媽姐門の改築工事が竣つた。

文政十一戊子年八月九日大風のために山門は吹倒された。而して境内松椎木なども倒れた。

文政十三庚寅年正月監寺蘭溪は隠退した。而して廣徳院の曦皓及び綠蘿庵の

臨川院内天神堂再建

禪海が當寺の監寺となつた。天保元庚寅年新大工町なる臨川院内天神堂が再建された。弘化貳乙巳年正月竹林院を改築し、同年六月中川郷なる棲雲庵を永昌寺に賣却した。

蘭國使節引見の會場用として屏風を提供す

同年八月當寺は前年阿蘭陀國使節渡來の際公命により使節引見の會場用として屏風を差出したので銀貳枚を賞賜せられた。同年八月十三日蘭國使節引見の際にも當寺に同様の命があつた。而して後に金貳百疋を賞與として下附された。

諸堂修繕

弘化四丁未年三月の頃に至り諸殿堂の頽破太しく雨雪を防ぐこと難かりしにより修繕工事を起さん爲め工費として官銀八拾貫目の借用を願出でしに、銀貳拾貫目丈けを貸與せられた。その返済方法は同年より拾ヶ年に割當て一ヶ年銀貳貫目宛唐方定式寄進銀のうちより長崎會所にて差引くと云ふことであつた。是に於て直に工事に着手し諸殿堂の修繕を竣つた。

山門再建

尋いで嘉永元戊申年九月山門の再建工事に着手し、翌嘉永貳己酉年竣工した。山門再建工事進行中既に工費の不足を告げしにより長崎會所より銀貳拾貫目

ウイリアムズ・スミス、ブルベツキ等滞在す

を借りうけて漸く竣工することを得たのである。その返済法は嘉永貳己酉年送砂糖代銀のうちより差引上納し、不足の場合には寄進銀より不足額を返納すると云ふことであつた。萬延元庚申年ジョウジ・スミス (George Smith, D. D., Bishop of Victoria) は香港から長崎に渡來して、當寺境内なる廣福庵に五週間餘滞在した。先是該庵にその友ウイリアムズ (C. M. Williams) 亞米利加合衆國プロテスタント、エビスコウバル、チャアチ the Protestant Episcopal Church の宣教師) が淹留して居たので、スミスは右の庵に寓することにしたのである。それから、ブルベツキも亦一時當寺境内に住んで居たが後大徳寺に移つた。

當寺の疲弊

その頃當寺は餘程疲弊して居た。唐人の寄進が著しく減少した爲めに當寺の維持は頗る困難であつた。それでも當寺及び末庵の僧侶の數は約貳拾人位はあつた。

皇政維新と共に諸制革新せられ、寺院の如きも寺制の變改に因りて一大打撃をうけた。特に當寺の如きは唐人の定例寄進を失ひしたため著しく衰微するに至つた。随つて幕末まで存續せる末庵も多くは廢庵となつた。

明治元年より同八年までは末庵より出願届出等な

なござりし時期であつたので、この期間に於ては末庵は廢庵同様の姿であつた。随つてこの期間内に廢庵になつたものは何年何月に廢庵になつたものか判明しない。

明治三十六年四月大釜堂の建設と共に大釜はその堂内に置かるゝことになつた。尙ほ奥書院拾五坪も建てられた。

同月千駄和尚貳百年忌法要が執行された。

明治三十九年四月十四日大雄寶殿、赤門海門一舉及び樓門が特別保護建造物に指定された。

明治四十二年曇華院及び寶授庵は維持困難なるにより當寺に合併された。是に於て當寺は一ヶ所の末庵をもつたことになつた。

明治四十三年八月廿九日護法堂及び鐘鼓堂が特別保護建造物に指定された。是に於て當寺は右建造物の保護を完うせんため、寺地千七百五拾七坪九合貳勺を官有地に變更せられんことを當局へ出願したが、翌明治四十四年十月一日に至りて之を許可せられた。

大正十一年四月十四日より廿日まで一週間當寺現住藥師寺藤樹は開山三百年祭と道者元及び開法即非二百五十年大遠忌法會を舉行した。その際黃檗宗管長隆琦大雄を招待した。

大釜堂建設  
奥書院建つ  
千駄貳百年忌  
大殿及び赤門  
特別保護建造  
物に指定さる  
曇華院及び寶  
授庵當寺に合  
併す  
護法堂、鐘鼓  
樓、山門等特  
別保護建造物  
に指定せらる

諸堂修繕

現 狀

末 寺  
年 中 行 事

先是現住職は右の大法要舉行の準備のため大正十年より邦人及び支那人間に寄附を募りて七千餘圓を得たので、その寄附金の一部分を修繕費に充て開山堂、庫裡、媽姐堂、本堂等より墻壁石階等の大修繕工事に着手し翌大正十一年三月に至りて工を竣つた。

現時寺僧參人檀家九拾五戸、信徒貳百戸、内檀家五拾戸、信徒貳拾戸は支那福州地方出身にして當地寄留者である。

末庵は一ヶ所もないが、末寺は一ヶ寺ある。即ち福岡縣三井郡福壽庵である。年中行事は自餘の唐寺のそれとほゞ同一である。而して徳川幕府時代の年中行事は左の通りであつた。

正月朔、三日 祝聖新年頭賀。

四 日 住職は、年頭祝賀の爲め、長崎奉行所へ出頭。

六 日 唐人初參詣につき、卓子饗應。當日、奉行所役人唐譯司等

護衛或は通譯の爲め來山、中々の混雜であつた。

七 日 宗門改として長崎代官所より役人出張、末庵僧侶來集

十一日 帳 祝

二月朔 日 千呆年忌 祭正、五、九月  
 十五日 涅槃會  
 十九日 觀音大士誕辰  
 三月三日 上巳賀節  
 十五日 緊那羅王誕辰  
 二十一日 弘法大師祭 關帝堂内  
 二十三日 媽姐祭  
 四月三日 隱元禪師年忌  
 八日 釋尊誕生會  
 十三日 諸役司交代  
 五月五日 端五帝誕辰 午  
 十三日 關帝誕辰 正、九兩月は莊嚴を略することがあつた。  
 十五日 水神祭  
 二十日 開山忌

六月二日

章歌天誕辰

七月朔、三日

住職以下の衆僧、市中托鉢、一日より利竿頭に燈籠及び  
燈一旒を掲揚

十三日

茂木道無縁塔諷經

宇部黃檗山十四日 住職以下開山塔境域に至りて看燈、一ノ瀬無縁塔諷經。

十五日

蘭盆會

二十三日

媽姐祭

三十日

大門地藏誕辰

同月上旬、唐館内に普度法會舉行、唐三ヶ寺輪番

八月朔、三日

八朔公禮の爲め、住職は長崎奉行所に出頭。

九月八、十日

開基超然誕辰

九日

重陽賀節

十三日

關帝祭

十九日

觀音大士誕辰

二十三日

媽姐祭



十月十三日 大小執事諸寮交代

十一月十七日 彌陀如來誕辰

十二月八日 佛成道忌

十三日 煤拂

二十日 歳暮贈品準備

二十三日 餅搗

二十四日 大小通事へ進物

二十九日 諸堂莊嚴

寺格及び維持

寺格及び維持法 當寺及び興福、福濟兩寺は維新前は本山をもたなかつた。随つて黄檗山の監督を受けたれども、それは本末としての關係では無かつた。併し宇治黄檗山萬福寺は一宗の總本寺なるを以て、その定めたる宗内清規を遵奉するは唐寺一般の義務であつた。

渡來唐僧は、先づ長崎三ヶ寺中の一に住し、此の間に於て日本の國情を知りて他日黄檗山主の席を繼ぐのを例とした。その後唐僧の渡來絶えし後は、已むを得ず和僧が唐寺の寺務を執つたのであるが、和僧は監寺であつて住持の資格はも

監寺

禮席

供廻

たなかつた。維新後に至りてはじめて住職たることを得たのである。年始八朔等に際し、長崎奉行所に於ける當地各寺院住持の禮席は、當地朱印地、准朱印地格寺院住持の次にありて、伴僧參人、役僧壹人、附添出仕するを得るの資格ありし外には特權は無かつた。當時の三ヶ寺住持供廻は次の如きものであつた。

長柄持 壹人 挾箱持 壹人

直 供 壹人或は貳人 伴 僧 壹人或は貳人 草履取 壹人

釣臺荷 貳人 乘 輿 貳人 宰 領 壹人

住持の就任の手續は、人選後先づ長崎奉行所に出願し、其の許可を得るを例とし、奉行の認可濟次第新任住持は左の方面を歴訪して就任を披露したものである。退任も略之に據す

住持就職及び退任披露

長崎奉行所 手札を持ちて玄関先まで出頭す、此の時の進物大奉書壹束、中啓壹本持參、退任の時進物なし。

岩原屋敷 進物なし 長崎代官所 扇子壹箱

町年寄 以下進物なし但し寺社年寄には毛氈壹枚、扇子壹箱 唐方大、小通事 並迄

唐人屋敷乙名、同組頭、同筆者小頭、同日行使

長崎市史地誌篇 崇福寺

長崎會所目附同吟味役

唐方筆者小頭

檀家の内荒々及び出入諸色屋

皓臺寺 大音寺

大光寺

現應寺

大徳寺

三ヶ寺及び惣塔頭

年始八朔に際し各方面に贈呈すべき品目數量は略々一定して居た。即ち次の通りであつた。

長崎奉行所

奉書 壹束

唐茶 壹錫

長崎町年寄

半紙參百枚

そき臺附

唐大通事

半紙參百枚

そき臺附

唐小通事

半紙貳百枚

片木附

唐小通事末席

扇子貳本宛

同稽古通事

半紙貳百枚

唐方筆者小頭

扇子貳本宛

會所拂方  
唐人屋敷乙名及組頭  
筆者小頭

扇子貳本  
半紙貳百枚  
八朔  
扇子貳本  
半紙貳百枚  
八朔

大通事年番  
小通事年番

杉原 壹束 臺附  
扇 參本 片木に載せ  
杉原 壹束 臺附

進上
奉書壹束
唐茶壹錫
以上
崇福寺

中奉書に上の如く認め  
上包百田には上の一字  
がある

右の外唐通事が大通事助に昇進の節は杉原昆布臺附を、小通事助に昇進の時には杉原を贈呈するを例とし、その他筆者小頭に至る迄夫々進物の定規があつた。而して當地寺社は、最初は長崎町年寄の管轄に屬して居たが、天明元年後は、長崎代官の支配する所となつた。

末庵中俗に祿庵と稱せられし庵があつた。唐船主等より毎年定額の寄附を受領する資格ある庵で、此の庵の庵主たらん者は長崎奉行の許可を得るを必要とし、就任後は年始八朔の際長崎奉行所に參賀するの資格を有したものである。天

唐寺の維持と  
唐船

明五年當寺末庵中此の資格を有せしものは廣福緣糞大悲祇樹林廣徳の五庵であつた。最初廣福以下の四庵寶授庵も亦一時この資格をもつて居た。

唐寺の維持は、全く來舶唐人の負擔に屬したもので、唐貿易の自由に行はれし時代には、唐人等は唐寺に年々相當の寄附をなして寺院の維持に寄與したものであるが、堂塔の修繕再建等に際しては、唐船主申合せて寄附額を定め、また商人としては、隨意に寄進した。毎年の定額寄附を定例寄進と稱し、堂塔營繕に要する臨時寄附を修理寄進と云ふ。以上は皆長崎奉行の許可をうけ、物品砂糖白糖黒水砂糖に端物什具その他て寄附したもので、唐寺は隨意に之を賣却して正貨と交換した。

元祿貳年唐人屋敷が設けられて唐人がこの一定の區域内に入りし後も、唐船主等の寄附は些も従前と異なることは無かつた。當時特に特殊の唐僧或は特殊の庵等を指定して、一時に或は年々寄進をなすこともあつた。之を緣銀と云ふのである。後貿易額限定と共に嚴格に一艘よりの寄進は何程宛と規定せられたので、唐船はその額に相當する現品多くは砂糖を長崎會所に納め、長崎會所は之を賣却して得たる正貨を夏冬二回に指定の寺院又は僧侶に下附するを例とした。併し時に價格の高下あるを以てもとより夏冬二期の下附金は必ずしも一定する

定例寄進  
修理寄進

緣銀

寄附銀受領手  
續

唐人待遇

返禮

崇福寺緣記

ものではなかつた。それから唐人の法要、願成就、祈願、死亡等法要は一回に砂糖五百斤水の場合に於ける臨時の収入も亦尠くはなかつた。

右の如く、唐寺は全く唐人の寄附に依りて維持されたるが故に、唐寺の唐人に對する待遇は鄭重を盡したものであつた。その寄附に對して謝意を表せんが爲め、唐船出帆に際し唐船一艘に對し、興福、福濟、聖福及び當寺の四ヶ寺より各銀百大徳寺のも加はり宛の昆布を贖として贈るを例とした。目たることもあつた。

崇福寺緣記

一、當寺之儀者唐僧超然開基造立仕候右超然儀先年唐人町宿仕罷在候節唐人共之内邪宗門之者茂在之由世上風聞仕候故御法度之趣に御座候得ば唐人中承之殊之外氣之毒に奉存通事中に遂相談右体之邪宗崇敬不仕爲證據何卒一字之禪院を建立仕唐僧を相招住持爲致後來歸依寺に仕度旨申候に付唐國福州に申遣寛永六己巳年右超然を呼寄 御公儀に御願申上即年蒙御許容始創仕其後唐僧住持三代相續仕候得共何れも平僧にて禪家之法式等不行届候故當地居住之唐人中商議仕黃檗開山國師隱元和尙之弟子即非を致請待中興開山に仕夫を叢林之格式相定代々朝暮之勤行等不懈候勿論

唐船渡海仕候得ば彼土に致信仰候天后娘々と申船神を寺中の預り置平生香花を備へ海上往來平安之祈禱致精誠候殊更毎年春夏秋三寺巡番に祭禮執行仕其日者唐人中蒙 御免出館參詣仕候且又以前者渡海之船々恭敬仕持渡候船神之内にも紛敷異形之神像も在之候得者自然左様之儀御座候節は急度吟味仕候儀に而唐船入津荷役相仕舞早速持渡候船神南京福州漳州三ヶ寺之内掛り之寺に差送り候に付役僧共立合相改預置出帆先乗之節又々持歸申候近頃寶永四丁亥年御奉行駒木根肥後守様佐久間安藝守様御在勤之節當地之漁人共神崎にて怪敷木像壹体挽上申候に付右之者共御奉行所へ訴出候處中興第三代之住持唐僧大衡に被仰付於當寺吟味仕候處天后娘々之脇立に紛無御座候に付其後御届申上候將又唐人當地に而死去仕候砌は住持罷出引導仕寺中の葬儀に御座候依之別而唐人中歸依寺相定且は唐人屋敷諸法事之節も唐三ヶ寺に無懈怠相勤來法事之節者三寺住持又は役僧立合燒香仕候

一、寄進物之儀は元來唐人建立歸依寺に相定置渡海往返平安祈禱並先亡爲追荐布施縁銀附置年々相續仕來候右之通に而は佛閣等修理難儀に付諸船頭

寄進物

中申合寄進荷物相定置候先年唐人町宿に被召置荷物等不殘賣切に被仰付賣買仕候依之持渡候荷物之内自用之分心之儘に寄進仕候其後構に入候ては商賣銀高も相究申候故御奉行川口攝津寺様山岡對馬守様宮城越前守様御下向之時分唐人中相願寄進永々無相違様に相定置尤色品は唐人志次第書上候を被仰付受納仕候且亦諸堂舎及大破或は新に建立仕候節は格別に御願申上荷物持渡造營等仕來候儀に御座候

天明二年壬寅六月

崇福寺

寛政十一己未年六月にも差出候也少々振合相違申候朱書

組合及び法類

組合及び法類 黄樂宗第一教區甲部に屬し長崎市興福寺、福濟寺、聖福寺、靈鷲庵、西彼杵郡矢上村靈源院、北高來郡諫早村性空寺、同小野村痴雲庵、同小栗村字土師尾觀音寺等は其の組合寺で、興福寺、性空寺及び豊前國企救郡足立村廣壽山福聚寺、同築上郡八尾町寶福寺等は其の法類である。

境内 七千六拾六坪九合貳勺

東四六拾九間  
南北百七間(平均)

寺地 千七百五拾七坪九合貳勺 官有無稅地

境外附屬地

長崎市史地誌篇 崇福寺

宅地 九百五坪八合五勺

地租金七百六拾參圓六拾七錢

畑地 七百九拾八坪貳反六畝

地租金八拾八圓五拾參錢

山林 六百五坪貳反五步

地租金貳拾四錢

墓地 參千拾五坪壹町拾五步

寶永四年

境内惣坪數七千四百參拾四坪餘

内 辨構の内四千七百貳拾坪餘

横 菜園の境際より浴室の界迄 凡五拾參間

中門より後門迄

整 右整横凡四千參百四拾六坪餘 貳拾貳間

横 地蔵の辨際より大門の外辨離迄拾七間

坪數二口合四千七百貳拾坪餘 但寺屏際の内

竹林庵屏外間數横四間、整參拾間、凡百貳拾坪

臥雲、不二、上善、綠蘿四ヶ所の庵地横四拾八間、整參拾間、その内百參拾六坪  
清水寺の地除き千貳百九拾四坪餘

清凉庵又は墓地横六拾五間、整貳拾間、凡千參百餘坪 但寺辨構の外

坪數都合七千四百參拾四坪餘

明和四年三月 境内坪數整横間數同前

東方 九拾九間 五拾八間 生垣 大光寺墓道境

西方廻り 貳百拾五間 拾六間 石垣 今石灰町境

拾六間 石垣 高野平郷水口境

五拾四間 石垣 現應寺境

六拾貳間 生垣 清水寺境

拾九間 辨 疊華院境

七間 貳尺大石垣 今籠町境

七拾壹間 半石垣 大光寺境

山上墓地間數

東方 四拾五間 伊良林郷畑境

西方 七拾壹間 大光寺墓地境

南方 貳拾八間 畑境

北方 貳拾五間 大音寺墓地境

右境内に對する地子銀は、寶永四年には、參百參拾五匁壹分で、安永頃には、參百

四拾四匁參分貳厘であつた。その内譯左の通りであつた。

- 一、五拾四匁七分四厘 内地子 四拾九匁五分五厘 森田周藏方納
- 一、百六拾九匁 内地子 拾四匁四分九厘 高野平郷水口
- 一、拾七匁 内地子 拾五匁四分九厘 市右衛門渡
- 一、四匁參分 内地子 拾六匁四分九厘 同 所 平右衛門渡
- 一、八拾六匁 内地子 七匁九分參厘 同 所 平右衛門渡
- 一、拾匁五分 内地子 七匁八分七厘 小島郷 七左衛門渡
- 今籠町掛り 内地子 九分貳厘 櫻馬場 七左衛門渡

一、大門の土地 表口貳拾六間貳尺 入 拾六間半

坪數四百參拾參坪九合五勺

地子銀六拾八匁五分七厘六毛五弗

ヶ所除 地子銀拾七匁貳分四厘

ヶ所除 地子銀參匁貳分四厘八毛

三口合八拾九匁六厘四毛五弗

右の通今籠町乙名方へ年々納

明治八年 六千拾四步四合

内 境内千參百八拾坪四合四反六畝四步

埋葬地貳千九百八拾參坪八合九反九畝拾參步八合

明治十四年地券證下付當時の寺地は次の通りである。

- 寺地 貳千參百六拾四坪 地價金參百八圓拾錢八厘
- 宅地 四百四拾八坪 地價金四拾七圓四拾壹錢貳厘
- 畑 四畝貳步 地價金貳圓六錢貳厘
- 山林 參反參畝拾五步 地價金壹圓六拾四錢六厘
- 墓地 八反八畝拾參步
- 計六千五百九拾貳坪

境内建物 境内には、大殿、本堂、開山堂、媽姐堂、媽姐堂門、護法堂、關帝堂、觀音堂、天王堂、鐘樓堂、唐門、大門、觀音堂、庫裡、大釜堂等の建物がある。

大雄寶殿 寺地上段 當寺境内を三段に區別しておく。山門所在地を下段とし、の中央にありて、西南に面せる木造、本瓦葺、重層、入母屋造の建物。間口拾六尺八寸五分、奥行四拾四尺、下層拾尺六寸、棟である。向拜には、正面脇間共に高壹尺五寸の闕上に扉が設けてある。

構造裝飾 桁行五間、梁間六間、重層、屋根入母屋造、本瓦葺、上層軒二重繁垂木斗拱三つ斗繪様肘木、斗拱間箕束臺輪頭貫桁行五間、梁間貳間、總丸柱華頭窓九ヶ所下層軒一重繁垂木軒桁行は持送釣束にて支承す、前面向拜柱の所のみは挿肘木二手先内陣外圍正面中一間扉兩脇間各扉左右側面腰附格子立込四ヶ所、内部入側向拜柱を除き總て丸柱太鼓形踏石化粧屋根崇福寺建物調

殿内は、全部煉瓦敷土間で、内陣を除く外は天井を張つて居ない。柱は主として圓筒形で、礎石は太鼓形である。柱梁には別に裝飾はない。而して柱は或は六尺或は九尺、或は貳拾尺の間隔を有して居る。

正面中央須彌壇高參尺幅壹丈五尺上の宮殿には釋迦如來像、阿難、迦葉の二尊者像及び圓覺大師像ありて、其の前に 聖上萬歲萬々歳牌が奉安してある。

右の像は何れも紙糊の製で巧緻を極めて居る。大前机高四尺壹寸幅七尺六寸五具足、太鼓、その他の佛具がそれごとく如法に配置してある。

宮殿前面に高く世尊と題せる大額がかけてある。而して其の下兩側に一棒酬恩雲門之大機用超凡越聖左破顔契旨迦葉之正法眼耀古騰今右と題せる對聯が

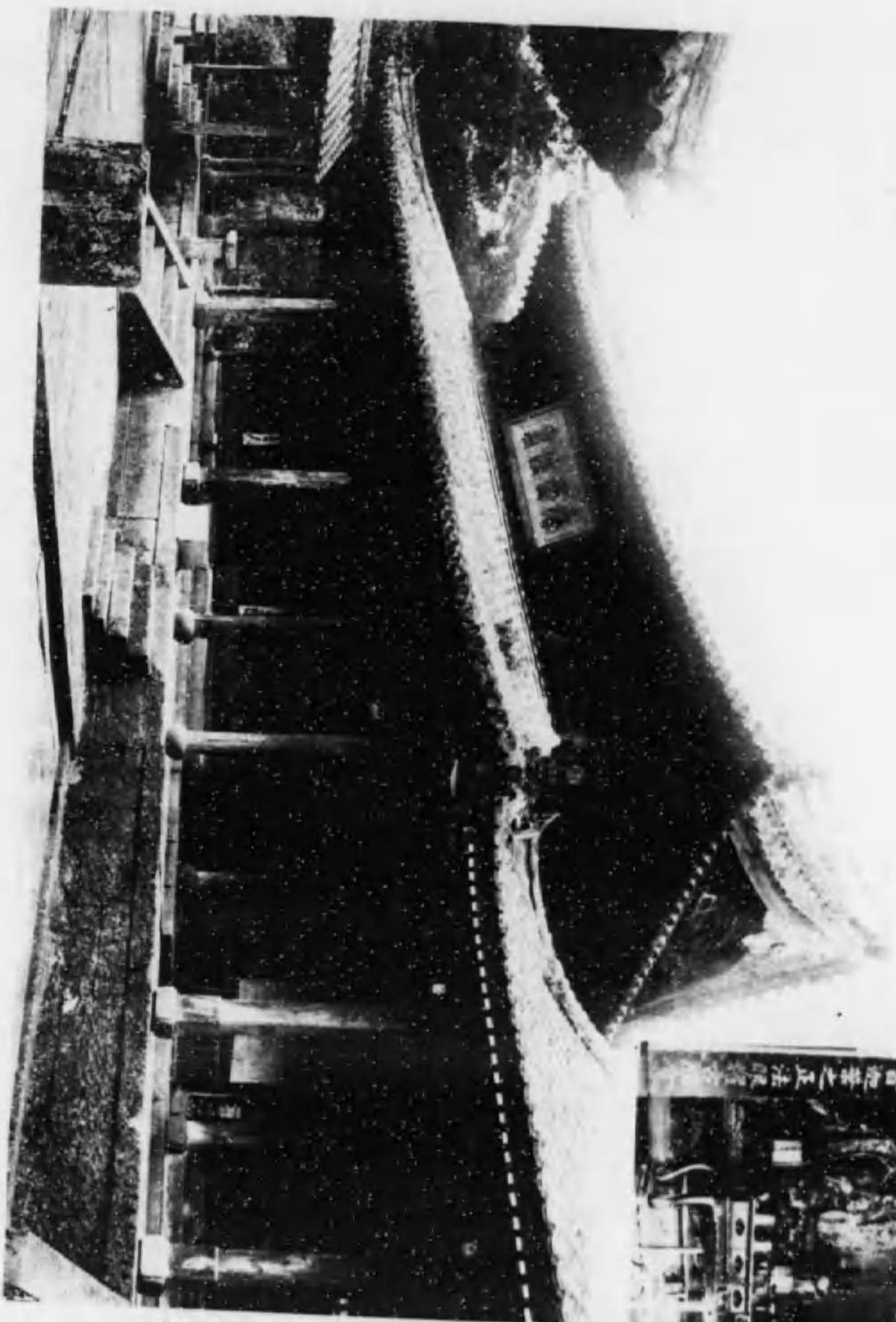
ある。何れも當寺開法即非の筆である。宮殿前右側圓柱の上部に、真鍮板がはめてある。それに正保三年孟春穀旦、信士何高材喜助立と二行に刻してある。堂内兩側壇上に名工范道生の作と云ひ傳へらるゝ十八羅漢の木像が左右各九體宛配列してある。その彫刻巧妙を極め觀る者之を歎美せざるはなく、シーボルトの如きはその名著日本紀事 *Nippon. Archiv zur Beschreibung von Japan und dessen neben- und schutzländern.* 千八百卅二年 Leiden 版にその挿繪を載せて居る。

- 第一 西瞿耶尼洲寶度羅跋囉惰闍尊者 露胸袒腹若化身慈氏
- 第二 迦濕彌羅國迦諾迦伐蹉尊者 以手按膝仰面而笑
- 第三 東勝身洲迦諾迦拔釐惰闍尊者 擊寶蓮花佛現其上
- 第四 北俱盧洲蘇頻陀尊者 屈足觀月手捏數珠
- 第五 南瞻部洲諾距羅尊者 蒙頭入定儼若須彌
- 第六 耽沒羅洲跋多羅尊者 握古藤杖袒肩而坐
- 第七 僧伽茶洲迦哩迦尊者 恆持如意默然靜觀
- 第八 盜刺拏洲伐闍囉弗多囉尊者 以手拈鍼作補衣勢
- 第九 香醉山中戌博迦尊者 掌握神珠龍現臺上

- 第十 初利天中半托迦尊者擊拳努目睨視大蟲
- 第十一 畢利颯瞿洲囉怙羅尊者側身垂足兩手作準枚勢
- 第十二 半度波山中那伽犀那尊者拈消息子作明耳勢
- 第十三 廣脅山中因羯陀尊者右手擊塔側目仰視
- 第十四 可住山中伐那婆斯尊者劈胸示佛安禪入觀
- 第十五 靈鷲山中阿氏多尊者戲金毛兒若返擲狀
- 第十六 持軸山中注茶半托迦尊者龍眉執拂盤膝晏坐
- 第十七 難提密多羅慶友尊者手展梵書莞爾而觀
- 第十八 寶頭盧尊者兩手策眉端然端坐

堂外の廊下幅壹間半には全部石が敷きつめてある。而して柱梁はみな丹堊を以て彩られて居る。軒桁著しく突き出でたるに柱を用ひざるは一特色であろう。正面の柱には即非の筆になれる佛是了事漢左世豈無全人右の對聯がある。檐上には大雄寶殿何高材魏之瑛同立と題せる大額がかけてある。大殿の左側檐下に重修崇福寺碑及び崇福寺重修寄附者芳名碑が在る。

この大殿は二代百拙の時正保三年に建立され、爾後時々修理せられたるのみ



崇福寺本堂(左)と其の内部(右)  
(特別保護建造物)





(作生道范) 部一の漢羅八十



此像は、  
一、非難を蒙る者、  
二、非難を蒙る者、  
三、非難を蒙る者、  
四、非難を蒙る者、  
五、非難を蒙る者、  
六、非難を蒙る者、  
七、非難を蒙る者、  
八、非難を蒙る者、  
九、非難を蒙る者、  
十、非難を蒙る者、  
十一、非難を蒙る者、  
十二、非難を蒙る者、  
十三、非難を蒙る者、  
十四、非難を蒙る者、  
十五、非難を蒙る者、  
十六、非難を蒙る者、  
十七、非難を蒙る者、  
十八、非難を蒙る者、  
十九、非難を蒙る者、  
二十、非難を蒙る者、  
二十一、非難を蒙る者、  
二十二、非難を蒙る者、  
二十三、非難を蒙る者、  
二十四、非難を蒙る者、  
二十五、非難を蒙る者、  
二十六、非難を蒙る者、  
二十七、非難を蒙る者、  
二十八、非難を蒙る者、  
二十九、非難を蒙る者、  
三十、非難を蒙る者、  
三十一、非難を蒙る者、  
三十二、非難を蒙る者、  
三十三、非難を蒙る者、  
三十四、非難を蒙る者、  
三十五、非難を蒙る者、  
三十六、非難を蒙る者、  
三十七、非難を蒙る者、  
三十八、非難を蒙る者、  
三十九、非難を蒙る者、  
四十、非難を蒙る者、  
四十一、非難を蒙る者、  
四十二、非難を蒙る者、  
四十三、非難を蒙る者、  
四十四、非難を蒙る者、  
四十五、非難を蒙る者、  
四十六、非難を蒙る者、  
四十七、非難を蒙る者、  
四十八、非難を蒙る者、  
四十九、非難を蒙る者、  
五十、非難を蒙る者、  
五十一、非難を蒙る者、  
五十二、非難を蒙る者、  
五十三、非難を蒙る者、  
五十四、非難を蒙る者、  
五十五、非難を蒙る者、  
五十六、非難を蒙る者、  
五十七、非難を蒙る者、  
五十八、非難を蒙る者、  
五十九、非難を蒙る者、  
六十、非難を蒙る者、  
六十一、非難を蒙る者、  
六十二、非難を蒙る者、  
六十三、非難を蒙る者、  
六十四、非難を蒙る者、  
六十五、非難を蒙る者、  
六十六、非難を蒙る者、  
六十七、非難を蒙る者、  
六十八、非難を蒙る者、  
六十九、非難を蒙る者、  
七十、非難を蒙る者、  
七十一、非難を蒙る者、  
七十二、非難を蒙る者、  
七十三、非難を蒙る者、  
七十四、非難を蒙る者、  
七十五、非難を蒙る者、  
七十六、非難を蒙る者、  
七十七、非難を蒙る者、  
七十八、非難を蒙る者、  
七十九、非難を蒙る者、  
八十、非難を蒙る者、  
八十一、非難を蒙る者、  
八十二、非難を蒙る者、  
八十三、非難を蒙る者、  
八十四、非難を蒙る者、  
八十五、非難を蒙る者、  
八十六、非難を蒙る者、  
八十七、非難を蒙る者、  
八十八、非難を蒙る者、  
八十九、非難を蒙る者、  
九十、非難を蒙る者、  
九十一、非難を蒙る者、  
九十二、非難を蒙る者、  
九十三、非難を蒙る者、  
九十四、非難を蒙る者、  
九十五、非難を蒙る者、  
九十六、非難を蒙る者、  
九十七、非難を蒙る者、  
九十八、非難を蒙る者、  
九十九、非難を蒙る者、  
百、非難を蒙る者、

聖壽山々規 (即非聖)

で、明治維新に入り更に明治十年、明治三十一年兩度に修繕せられ、明治三十九年四月十四日内務省より特別保護建造物として指定せられた。而して大正十一年三月當寺創立三百年及び開法即非二百五十年記念大法要執行に際し、住持藥師寺藤樹は本堂に小修繕を加へた。

佛殿 上梁

壽山寶殿久唐皇一念圓成百福昌此日法梁高托出國清道泰愈風光

護法堂 この堂は天王殿、關帝堂、迦藍堂、觀音堂等を兼ねて居る。大殿の前面下段に在りて北東に面せる本造、本瓦葺、單層、入母屋造、拾六坪五合五間半に參間の建物である。

構造裝飾 桁行參間、梁間五間、單層、屋根入母屋造、本瓦葺、瓦棟、鬼板付軒一重、踈榑鼻隠付斗拱、印度様三手先斗拱、間前面兩脇間斗束、兩側面は香狹間付小壁、後面兩脇間同中央柱を建設し、總間五間とす、前後面共中央二方柱、他は圓柱各杳石付、前面一間通、向拜開け放し、正面中央一間、上部盤格子、下部盤横組格子開戸、兩脇間方立を以て三分し、中央開戸は下部盤横組格子半戸、内方の間は上部萃

燈窓下部板張外方の間は板戸右側面前二間壁次一間丸窓其の他及後面左側面共總而壁向拜化粧屋根裏床四半石敷内陣化粧屋根裏床四半石敷大虹梁上に兩端方束を建て二重虹梁差し通し斗拱差肘木とす束受及持送は總而彫刻とす

妻飾二重虹梁肘木圓東向拜の間は丹塗他は素木造隨所極彩色崇福寺建物調堂の内外には全部石が敷詰めてある天井には板を張らずその梁柱礎石等は大殿のそれに似て居る堂内には三つの區劃がある而して各區劃毎に扉が設けてある。

中央壇上壇高參尺六寸には觀世音菩薩善哉龍女等の像が安置してある護法藏雪峰頭陀即非謹書の横額の下には千獸の筆になれる一座壽山觀自在左無邊福海大圓通右の對聯がある左壇高參尺六寸幅壹丈六尺には關聖帝關平周倉等の像が安置してある内方楣間には感應無徵張加鏃敬叩の横額ありて下に關聖帝君志在春秋光同日月功昭炎漢義薄雲天或は乃文乃武乃聖乃神等の文字ある帷帳がある外方楣間には威德兼施信士張垣坤敬立と題せる額や心誠保赤沐恩信士葉謙振と題せる額がある而して唐船主樊升吉の筆になれる帝極奠安四海仰恩波洋溢左皇言宣

關聖帝の傳説

論萬民荷德澤淵深右の對聯がかけてある。

關聖帝の傳説

關聖帝像は甚だ精巧な作である關聖帝は殊に靈異ありて古來在留支那人の尊信淺からず今日でも支那商人はその福運を祈るのである傳へ云ふ嘗てこの關聖帝像前に食菓を供すると毎も鼠がこれを噉ふて了うので寺僧の一人は非は恰も當山に在りしが之を聞き一日像を責め其の右頬を策つて剝蝕せしむるに至つたずるとその翌日韋馱天の像の劔に一疋の鼠が貫かれて居た恰も韋馱天が關聖帝の命を奉したもののやうに思はれた是に於て衆僧恐を爲して其の剝蝕の處に修飾を加へ漆工百端すれども遂に成らず今に至りてその痕は存すと。

右壇には韋馱天紙製立像布袋坐像千手觀世音菩薩等の像その他異様なる佛像拾數體があるその前なる厨子には弘法大師が祀つてある。

外面梁上に額が三つある即ち威德莊嚴即非書楷中央の額と臨下有赫即非書草左の額と乾坤正氣已九番船主樊升吉敬立左の額とがある。

第三の額の兩側には德配乾坤浩氣常存漢室左忠昭日月協力威震華夏沐恩弟子張加鏃敬

叩の對聯がかけてある。

堂内大梁の下部に享保十六年歲次辛亥仲秋大吉日當山第七代住持嗣祖比丘伯珣浩鼎建とある。而して廊下圓柱には護法堂内務省指定特別保護建造物と記せる標札がかけてある。

この堂は享保十六年の鼎建に係り、嘗て韋駄天、五方五帝、緊那羅、伽藍神等の像を安置せし故に天王堂、護法堂、伽藍堂、關帝堂等の稱が有つたが、禪堂の廢毀されし時其の本尊觀世音菩薩像を當堂内に移し、緊那羅王像は之を庫裡に移した。この堂は建立以來大破せし事なく、時に小修理を加へたるのみにて今日に至つた。明治四十三年八月二十九日、内務省より特別保護建造物に指定された。

開山堂 大殿の後方一段高き處に在る木造、本瓦葺、重層入母屋造、三十五坪間口、七間奥行五間の建物である。堂内正面中央に須彌壇、高六尺、幅壹丈參尺ありて、その外は全部土間石又は煉瓦を敷かずである。壇上に當山開法即非像、前に木牌を置く、中央千駄像、左大衛像、右各前に木牌を配すが安置してある。壇はチーク材にて造り、圓窓が設けてある。前面梁上に隱元の筆になれる正法眼行書と題せる額ありて、之に大衛の筆になれる全提摩竭令左別展少林風、右草書、の對聯が配してある。又須彌壇上に千駄の筆に

特別保護建造物  
開山堂

崇福寺護法堂(上)と鐘樓堂(下)(特別保護建造物)



なれる無盡光の横額下に同じく千獸の筆になれる遮那性海光明藏左優鉢羅花  
却外春右の對聯がある。而してその前柱には萬古流芳と題せる横額ありて宗門  
無鎖鑰何曾超凡越聖左祖道鉗鏡直教點鉄成金當寺五代義勝筆右の對聯この對聯は拔世  
額と對をなして居たががかけてある。尙はその脇柱には千呆の筆になれる功垂鹿  
苑金湯固左福被檀門世代昌右この對聯は功德祠の額と共に祠堂に掛けてあるの對聯が  
つたが祠堂廢せし後この堂に移したものであるかけてある。而して後方には檀家位牌壇ありて、宮殿左には當寺歷代住持位牌二十五  
基及び各庵庵主木牌等がある。また側面には檀家位牌壇がある。祠堂の廢せられ  
し後は、この堂の一部を以て之に充てゝ居る。堂内外の出入口には扉がある。堂外  
には石が敷きつめてある。而して梁上には即非の筆になれる法海慈航の大額が  
掲げてある。堂内須彌壇の右側に壽山即非和尚舍利塔碑がある。その塔銘は唐僧  
黃泉の撰したもので次の通りである。

壽山即非和尚舍利塔銘

夫人之生也稟天地之氣假四大而成形凡有三十六物所謂髮毛爪齒皮膚血肉  
以至生熟二臟皆臭穢不淨藉飲食以資養一旦氣消則成灰壤何足論哉間有滅  
後而骨石不壞舍利流輝不可得而思議者其惟至人之垂現歟

壽山即翁大和尚即其人也師諱如一即非其字姓林氏福州福唐人父英母方氏長齋誦佛夢大士授呂蓮花而生幼聰穎讀書過目成誦十三歲失怙事母至孝十七出家二十受具嘗習聲梵一夜嘆曰古人說法感天雨花尙未脫生死況循行數墨耶遂罷經遍參名宿所至少留請益弗怠後參

黃璞隱老人雖歷任諸職研究益力嘗堅坐不臥值臘月三十日後山火發向火燄裏打失雙睛受印隱古雪峰丁酉春二月應聘東渡遂開法于崎陽之聖壽山癸卯上新黃璞省師分座說法甲辰秋告歸舟次豐州值豐主及洞禪師請開山廣壽戊申謝事歸崎今年夏五月二十日書頌坐化茶毘頂骨不壞獲五色舍利無算烟所及處皆結如零露四衆瞻禮至數萬人無不悲戀涕泣於戲如師者非特近世罕有求之古人中亦不多得非至人垂現奚自臻此誠如師言三世天臺僧今傳黃璞燈誰知盧行者即是嶺南能師生于萬曆丙辰年五月十四日申時距今遷化享世壽五十有六僧臘四十語錄若干卷遺集若干卷嗣法弟子法雲洞公曇瑞俊公柏巖節公翠峯覺公光巨幢公共五人先是師遺誠不許造塔至是諸門人不忍竟收舍利而藏諸有司末次平藏居士與母氏長福院發大信心就聖壽山之廣福庵營石塔取所藏舍利併不壞者送焉兼給僧膳爲千秋護塔之需其用意亦勤矣當山接

席曇瑞俊禪師徵澣爲塔上之銘澣雖不敏且識師最早受教最濳且與禪師爲法門昆季故不辭爲之銘銘曰

遍觀大地有質之倫堅濕煖動假合成身或賤或貴厥質則均凡四九物卒無一眞腥羶垢穢殆莫可親百年潰散輒作蜚塵胡有設利流映千春惟大知識乘夙願輪於濁惡世出以導人乘戒定慧三者精純乃於烈燄獲此珠珍目戒定故益煉益新藏之寶塔用鎮海濱光爭日月福庇官民咨爾左右嶽瀆之神晝夜呵護禁絕波旬庶幾師道永永無垠 峇

寬文拾壹年歲次辛亥黃鍾月穀旦法苑法姪性激高泉熏盥拜撰嗣法門人性俊百拜立嗣法門人性節稽首拜書

この堂の創建の年代は詳らかでない。堂側に在りし祠堂の朽廢せし後はこの堂の一隅を以て之に代用して居る。長崎名勝圖繪には「開山堂、禪堂の右にあり傳法堂と扁す」とある。寶永四年長崎寺社帳には開山堂の名は見わぬが、傳法堂の名はある。

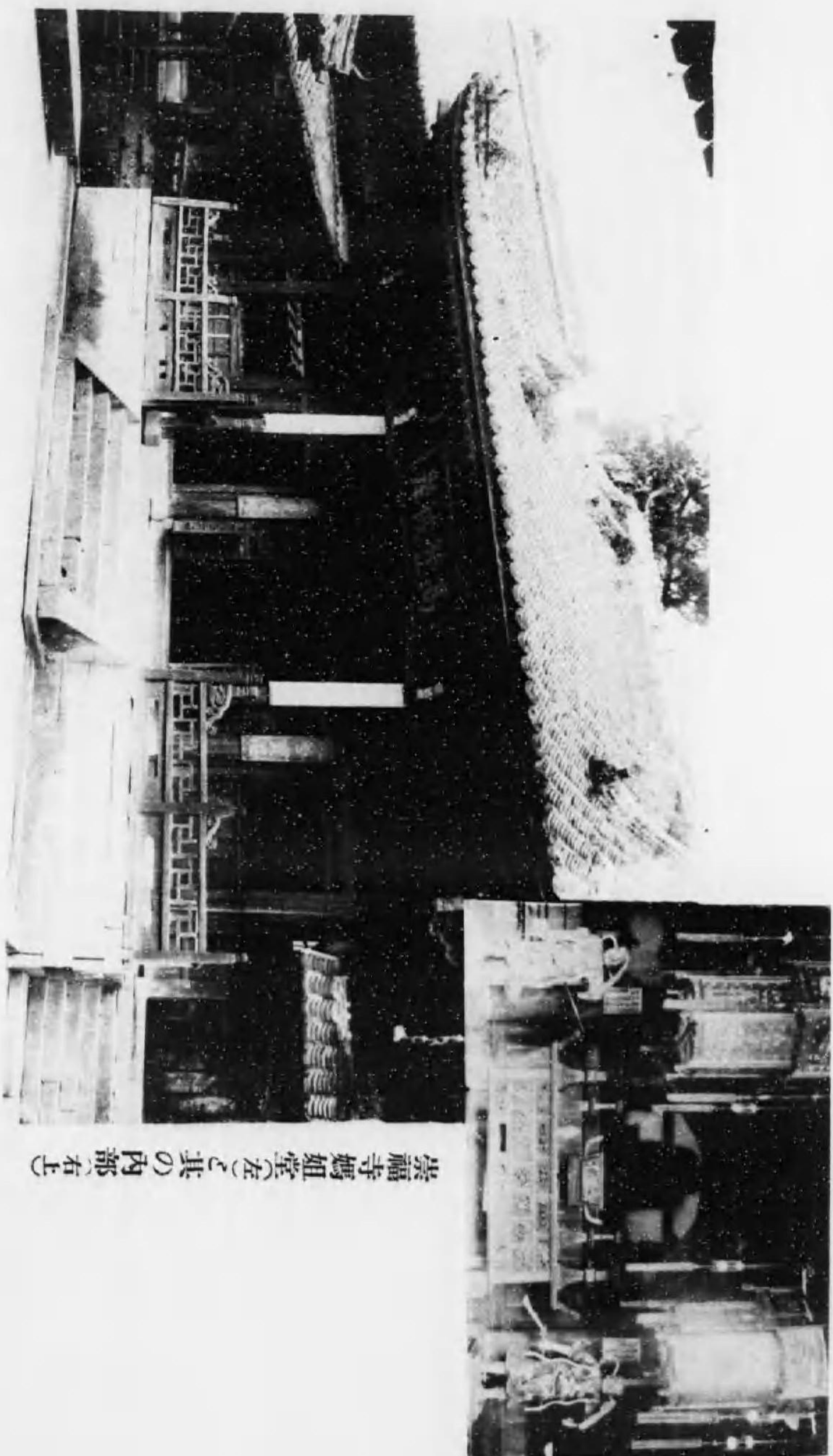
大正十一年四月當寺開創三百年及び即非開法二百五十年記念法要執行に先ち住職藥師寺藤樹はこの堂に大修繕を加へた。

媽姐堂 開山堂の左側なる木造、本瓦葺、重層、入母屋造、貳拾坪、五間に四間の建物である。堂内土間には石盤が敷詰めてある。正面須彌壇高六尺上には海神天后聖母倚像、貳體侍女立像、貳體侍者像、貳體等がある。右壇には觀世音菩薩像、書廣德院本尊九鯉湖八仙像、水官とも云ふ及び十二天將像がある。左壇には大道公像、土神にして三官とも云ふありて、その前にも曇華院本尊像たりし釋迦如來及び脇立二尊の像が安置してある。

額には海不揚波と題してある。魏之琰の立てたものである。聯には體帝心以濟人、登衽席波濤之上、左乘坤德而習坎、駕津梁天海之中、右とある。聯額ともに魏之琰の筆である。

高案の左右に五色を以て彩られたる千里眼及び順風耳の立像がある。まことに見事な作である。室内兩側の戸棚は往時唐船に奉祀する所の媽姐像を唐船在津中預り置いた場處である。

堂外五間入堂丈には石が敷きつめてある。梁上に四つの額がある。即ち中央なるは魏之琰の筆になれる萬里安瀾と題せる額及び林翹の筆になれる高登彼岸と題せる額、左方なるは永護安瀾、沐恩弟子楊嗣雄立の額、また右なるは海天活佛、沐恩弟子沈堪



崇福寺媽姐堂(左)と其の内部(右上)

媽姐門

鐘鼓樓

造敬立と題せる額である。兩側に即非の筆になれる揚帆登寶所、左慈愛見婆心、右と題せる對聯がある。外面の柱には湄嶼靈照千古蹟、壽山崇祀萬年春と題せる對聯がある。明國何紹廸の筆である。

媽姐堂は當寺創始と同時に建立せられたる最初の堂宇である。其の最初の所在及び規模結構は詳らかでない。この堂は寛政六年九月唐人等より白砂糖壹萬斤の寄附によりて修繕せられ、その後たび／＼修理せられて今日に至つたのである。

媽姐門 媽姐堂の前面下段に在りて、大雄寶殿と方丈とを連続せしむる建物である。木造瓦葺單層拾貳坪四間に參間の建物にして、中央に扉が設けてある。明人王儀の筆になれる山河正氣と題せる額及び游允富等立つる所の毘盧藏海の額がかけてある。

鐘鼓樓 媽姐門の前面下段に在りて護法堂の右側に接せる木造、本瓦葺、重層入母屋造八坪七合五勺、參間半に貳間半の建物である。

構造裝飾 桁行三間、梁間二間、重層、屋根入母屋造、本瓦葺、瓦棟、鬼瓦、附上層軒、一重疎垂木鼻隠、附斗拱、印度様二手先、薄肘木、總方柱、正面及後面共中央一間



華燈形三連窓兩脇各圓兩側面各華燈形二連窓下層軒一重疎垂木斗拱上層  
と同一方柱脊石附正面中央方立板唐戸左右脇上部格子窓兩端の間白塼壁、  
左側面前方一間板引戸次間白塼壁右側面前方一間白塼壁次間高窓後面總  
而白塼壁。

上層床拭板敷化粧屋根裏下層踏天井土間内左側後方の隅木階十級。  
妻飾監格子。

内外素木造隨所丹塗 崇福寺建物調

現今階下は物置に充て階上に鐘鼓が置いてある。大梁の裏面に「正保五年仲秋

吉旦鼎造」とある。また棟札には左の如く記してある。

皇圖鞏固 享保十三年歲次戊申

佛日增輝 當寺第七代住持比丘照持再建  
八月吉旦 木匠頭荒木治右衛門

この堂は、正保五年新築の後、享保十三年再建せられ、明治四十三年八月二十九  
日護法堂と共に特別保護建造物に指定せられ、大正十一年四月修繕せられて今  
日に至つたものである。

海天門 唐門赤門、二の門とも云ふ。石階の上に在りて護法堂の左側に接せる

海天門



崇福寺第一峰門（特別保護建造物）

木造、本瓦葺、單層、入母屋造、四坪半、參間に壹間半、棟高廿五尺の四脚門である。

桁 行 拾七尺九寸

梁 間 八尺壹寸貳分

軒 高 拾七尺四寸九分 棟 高 廿五尺貳寸四分

構造裝飾 四脚門、屋根入母屋造、本瓦葺、軒二重、扇繁垂木斗拱、前後面特異なる四手先詰組、左右側面挿肘木三手先中央一戸棧、唐戸方立脇板壁、楣上明放し棟間頭貫冠木冠木に大斗を置き組手を前後に延べて軒桁を承く。總丸柱、太鼓形踏石、隨所極彩色總丹塗、雨落内布目敷石、正面石階十一級。

裏斗拱向梁大瓶束木鼻蟻股等を以て錯綜せる構架を施す。柱間總開放内陣内部天井化粧屋根裏床四半敷石、小屋組構造を化粧に露し、虹梁木鼻二手先斗拱等を用ふ。隨所極彩色彫刻模様内外圓塗崇福寺建物調

この門は其の屋根裏の錯綜せる構造及び纖巧なる彫刻を以て稱せられて居る。簷下は全部丹塗で、兩側の横板壁上部より屋根下無數の腕木に至るまで、極彩色を施し天人、獅子、雲龍形、蓮花、寶蓋し等の裝飾模様がある。横板に畫ける花鳥の繪は見事である。表に即非の筆になれる第一峰と題せる豎額がかけてある。それで近來この門を一峰門と云ふやうになつた。

門の表の兩柱に唐僧道本の筆になれる天空海闊無雙地、虎伏龍歸不二門の對聯がかけてある。なほ崇福禪寺寛永廿一年甲申九月吉日、海天華境國朝永固萬姓安寧と題せる扁額がある。これは當寺檀首譯士林仁兵衛後佛門に入りて獨振と云が正保元年甲申九月に立てたものである。

この門が正保元年に建てられたことは明らかであるが、その當時木材を唐土にて切組みて持渡りたるものであるか、崇福寺文書だけでは判明しない。長崎實錄大成には「當寺山門ハ唐國製作ニテ彼方ノ工匠等彫鏤シテ組合セ當寺ニ於テ造立ス施主年數分明ナラズ」とあるが、林大卿の長子林大堂仁兵衛の由緒書には「唐國木匠ニ囑シテ崇福寺山門ヲ工作セシメ持渡ノ後之ヲ建立スル赤門今ニ顯然タリ」とある。即ち林家にては林大堂が建立したものと主張するものである。當時林氏は崇福寺縁首として尊敬された豪族であるから、斯くの如き事は有り得べきことである。それから元祿六年に崇福寺二ノ門即ち赤門の建築材料を寧波にて切組み翌元祿七年唐船數艘に分載して持渡つたことが唐船進港覺書その他に見ゆるから、元祿七年に二ノ門を改築したことを認めざるを得ないのである。尤も舊門の一部分は記念のため修飾してその儘用ひられたものであらう。この

山門

門は明治卅九年四月十四日大雄寶殿及び山門と共に特別保護建造物に指定された。

山門 大門または樓門と云ふ。今籠町の街路に面せる樓門である。木造、本瓦葺、重層入母屋造七坪半、參間に貳間半の建物にして左右に袖門がある。

桁 行 拾九尺四寸 梁 間 拾五尺七寸  
軒高上層 參拾壹尺九寸壹分 下層穹窿臺上端迄 拾五尺

棟 高 參拾尺五寸

構造裝飾 參間參戶樓門屋根入母屋造本瓦葺垂木斗拱挿肘木一手先、正面參間華頭窓側面貳間各半圓形窓を有し、貳間に一圓窓を有す。濱椽勾欄腰屋根本瓦葺、軒一重繁垂木、丸桁臺輪、下層樓臺瓦石混交積上桃色塀塗礎三段石積左右翼門中央樓臺と同構造にして、築垣形に積上げ、屋根切妻、本瓦葺、參戶穹窿形兩開扉隨所極彩色樓門敷地域内四半敷石、正面石壇石階十五級。  
この門の腰部以下は瓦石を以て穹窿形に積上げ、桃色の漆灰を塗り、中央を通り抜けとし、此處に扉を附設して居る。欄間に鯨の水を吹けるさまを彫刻し、内部天井には龍が畫いてある。而して腰部には高欄を附せる廻椽がある。左翼門には

崇福寺建物調



大釜堂 鐘鼓樓の右側前面に在る木造瓦葺平家寄棟造、貳坪七合七勺方丈の建物である。うちに石灰を疊みて臺を造り、其の上に大釜が据ゑてある。この大釜は崇福寺の大釜或は萬人鍋、濟貧鍋など、稱し、崇福寺の大釜か大釜の崇福寺か。とまで世に謳はれたものである。天和二年の鑄造に係り、深五尺七寸、口徑六尺壹寸壹分、重千九百六拾五斤、一時に米四石貳斗を炊ぐを得ると云ふことである。當寺開法第二代千駄の時、延寶の末より諸國米穀登らず、天和元年に入りて米價騰貴し、崎民饑餓のために苦みし際、千駄は惻隱の情に堪へず、親しく托鉢のため市中を巡り、仁人喜捨の米及び官米を得て粥をたき、之を貧民に施した。而して翌天和二年四月に入りてこの大釜を鑄たのであるが、幸にもその頃には長崎奉行や細川越中守の盡力によりて米の供給に餘裕があつたので、米價は下落するやうになり、長崎市民も漸く蘇生の思ひをなすことを得たので、この釜は一月位使用されて崇福寺の施粥は止んだのである。

この釜は鍛冶屋町で鑄造されたと云ふ丈けで、鑄工の名は詳らかでないが、恐らくは安山氏の作ではあるまいかと思はれる。その鑄造費は銀壹貫參百目を要したのである。釜の周圍に崇福禪寺施粥巨鍋天和二年壬戌仲春望後日の文字が

ある。この堂の木板に左の如く記してある。

天和二年海内饑饉我長崎又餓死するもの多し是に於て當山第二代千呆禪師深く之を患へ衣資を投じ鑄工安山某に命じ此鐵鍋を鑄造せしめ禪師自ら一山の僧衆を引率なし遠近に行乞をなし粥を煮て普く貧民に施せし記念品なり。

この巨鍋はもと鐘鼓樓と天王殿との間に据へてあつたのを、明治三十六年四月當寺住職拙門が堂を現在の場所に建て、釜を移したのである。

方丈と庫裡 共に壹棟をなして居る。木造、瓦葺、平屋、入母屋造、七拾五坪七間半に拾間の建物にして前面に七坪七間に壹間、煉瓦敷土間の廊下がある。この建物の内に方丈拾八坪、参間に六間、庫裡參拾五坪、参間半に拾間、事務室五坪、玄關六坪、貳間に参間等がある。玄關正面に隠元の筆になれる不二門と題せる額と大衡の筆になれる傳法堂と題せる額とがある。方丈入口には方丈と題せる額ありて、書院外梁上には曇華會の横額がかけてある。尙ほ内玄關梁上には山門清規一張が貼付してある。

この建物の建築年代は詳らかでない。維新前は書院に専用して居たが維新後大殿の右側に在つた庫裡が腐朽したので、之を取毀ちて書院に合せたのである。大正十年四月開法三百年大法要を勤修するに先だち之に大修繕を加へた。奥書院はこの建物の左に接せる木造、瓦葺、二階建、拾五坪、参間に五間の建物で明治三十

方丈と庫裡

奥書院

六年四月に建築したものである。

鄭幹輔碑及び額川重寛碑は二基相並びて海天門下段の平地西側に在る。

觀音堂 山門内石階の左側なる木造、瓦葺、單層四尺に六尺の建物にして、うちに

彌勒菩薩、觀世音菩薩、地藏菩薩等の石像六體が安置してある。

觀音堂の前、石階の右側に一つの巨石がある、それに觀世音菩薩の五字が刻してある。いつ頃刻したものか明らかでない。この巨石の下段に大乘妙典一字一石

塔寶曆貳年臘月及及び大乘妙典廻國供養塔寶曆拾貳年九月筑後柳川大和郡大塚村淨心がある。

仙人掌 開山堂の右に在る木造、瓦葺、平屋拾坪半、参間に参間半の建物にして、大

正十一年二月建てられたものである。

再來泉 往時當寺十二景の一に數へられたものである。現今開山堂の右方、十

數歩の墓地の間に在る。墓側石壁の下に徑壹尺位なる井口の奥に小池入、參尺幅、壹尺五寸ありて、清水つねに竭きることなく、今日でも附近の者之を汲みて用ふるのである。傍に龍窟と稱する岩窟、高壹尺六寸ありて、内に水神宮、文政午貳月吉日が祀つてある。其の右方なる貳尺貳寸の石に瀧眼池と刻してある。この泉は寛文九年の春、即非が工に命じ穿たしめて得たるもので、水質清冽なるを以て世に稱せられ

鄭幹輔碑と額川重寛碑

觀音堂

仙人掌

再來泉

たものである。

再來泉有引

千 呆

再來泉者崇福方丈内小池邊之所湧也先是巳酉春本師命工墾土俄然迸出流注不竭清而且冽足供所需辛亥夏先師方坐脫泉無點滴衆咸異之至十一月十二日其泉復湧尤勝于前是日長福院入寺營齋而黃檗瑞光塔院地亦斯辰動土因緣際遇千里相符奇矣雖然不可作奇特想亦可作等閒觀因紀以偈曰曹谿法脈閩東方壽嶺道泉徹底香福地福人彰至德今朝再湧異尋常

一崇福寺重修寄附者芳名碑

崇福寺重修寄附者芳名碑

高七尺 橫參尺參寸 厚九寸 臺貳尺四寸

壹 基

一重修崇福寺碑銘

重修崇福寺碑

高六尺九寸 橫參尺貳寸 厚九寸 臺貳尺七寸

壹 基

夫以川嶽鍾靈啓百年之宮闕幽明感格肇萬姓之香華誠哉神依人而顯人以神而安也溯長崎聖壽山之崇福寺者創自古昔昭茲來許前列巍巍寶殿後築鬱鬱佳城吾邦東渡奉爲香火者蓋貳百餘載矣奈歷年既久傾圮堪虞閱歲孔多重修非一茲乃募集長崎橫濱神戶大坂衆紳商等同肩義舉用整舊規自丙申年上冬興工修葺越歲季夏告厥成功規模丕振輪奐聿新覺錫福降祥應

神恩之默佑而勒碑記蹟貽後進之觀瞻焉已矣

大清光緒貳拾四年歲次戊戌陽月吉旦 寄附者貳百拾九名氏名略

一敏齋鄭先生遺德碑

高五尺九寸 厚九寸 臺貳尺貳寸

壹 基

敏齋鄭先生遺德碑

先生德行衆望表率官憲知重鄉黨首推奚特吾徒孺慕殆不自知其爲嚴師也先生邑唐譯司諱昌延字素敬號敏齋稱大助後改幹輔以文化八年辛未正月八日誕自始祖鄭君諱宗明九世孫也考君諱邦宗稱官十郎嫡妣加幡氏生母早別事嫡母孝受業於竹溪周老師聰慧出衆年十五登仕十七陞遷時稱跨龍考君喜未幾卒適周老師幫辦當年事因陞職卸事薦先生補缺遂爲諸先輩及唐商所倚重蓋乃職劇要務取時望云二十七膺選入江戶昌平校一任四年歸里公暇授徒先是娶某氏苦多病不終聚塾中舉同僚吳氏泰藏弟牛郎爲嗣子即永寧君也先生甫隴不惑乃列九家尋陞大譯司鄭氏至此始顯嘉永末俄國遣使北蝦夷也幕府備意命唐譯司創譯滿洲語言實先生啓之也安政丁巳清國髮匪之亂採銅局商墜業崎地無復見唐船來戊午春幕府議准外國開橫濱港先生請于官聘美國人瑪高温氏倡率僚中子弟就學英語時言者以爲異先





病乞休歸於故山朝廷嘉其訓迪有方勞績懋著特叙正六位二十四年辛卯四月二十一日歿於家享年六十有一葬於祖塋之次考重明妣瀨川氏配加古氏二男三女長天次子甲子郎善繼家業官臺灣總督法院通譯叙從七位尋以疾卒桑原英馬入贅三女先生歿後十四年同人等追慕栽培之德因叙先生之生平立石於崇福寺前以垂不朽

明治三十七年二月

門人 從四位勳四等 中田 敬 義 謹 題  
 門人 正七位勳六等 草場 謹 三 郎 謹 撰  
 門人 從六位 北條 直 方 謹 書

門生 共 建

伊東小三郎 石原逸太郎 池田忠吉 池田 載  
 盧 高 朝 速見一孔 北條直方 豐島捨松  
 德丸作藏 小田切萬壽之助 御橋雅文 大河平隆則  
 小原金三郎 大貫次郎 加藤義三 小川忠彌  
 若杉米太郎 川島 潤 速 加藤 正 生  
 金田千代吉 吉田椿四郎 橫田三郎 吉野利喜馬  
 吉田清揚 田邊熊三郎 谷 信 近 草場 謹 三 郎  
 辻 偉 太郎 中田 敬 義 長 川 新 吾

一石  
 照柳重昌 神代延祥 草鹿又次郎 山本瀧四郎  
 松永由熊 二口美久 吳 大五郎 小林光太郎  
 吳 永 壽 吳 泰 壽 額川君平 榎本師美  
 鄭 永 昌 鄭 永 邦 里見義正 榎原源太郎  
 木野村政徳 島田祭太郎 白 須 直 重野紹一郎  
 平野貫一 廣渡桂太郎 末吉保馬 瀨川淺之進  
 關口長之 鈴木行雄 山田萬里四郎  
 彭城邦貞 森本貞徳

燈籠 籠風頭石 高八尺 壹 對

當寺建物建坪數變遷表を左に掲ぐ。  
 石階の半程にある正保四年仲春吉旦の文字辛ふじて讀むべくその他は明らかでない。

大 殿	寶 永 四 年	天 明 年 間	明 治 八 年	大 正 十 年
天 王 殿	六四、〇〇 八間方	同 上	同 上	同 上
廊 下	參、〇〇 入壹間半横貳間	四四、〇〇 四間に六間五帝章駄天關帝合祀	四四、〇〇 六間に四間	四六、〇〇 五間半に參間
禪 堂	壹、〇〇 入貳間横六間	同 上	同 上	同 上
開 山 堂	四五、〇〇 入六間横七間半	同 上	四五、〇〇 七間半に六間	四五、〇〇 七間に五間

鐘樓	九、〇〇 參間方	同上	七、五〇 參間に參間	七、五〇 參間に貳間半
齊堂	壹貳、〇〇 入參間橫四間	六六、〇〇 六間に拾壹間	貳四、〇〇 六間に四間	參五、〇〇 參間半に拾間
庫裏	四五、〇〇 入五間橫九間	同上	五、貳五 參間半に壹間半	四、五〇 參間に壹間半
唐門	七、〇〇 入貳間半橫參間 但廊下左右に橫五間	同上	參〇、〇〇 六間に五間	貳〇、〇〇 五間に四間
媽姐堂	三〇、〇〇 入五間橫六間	同上	同上	六六、四尺に壹間
觀音堂	同上	同上	同上	同上
媽姐門	壹五、〇〇 入參間橫五間	同上	同上	同上
傳法堂	四貳、〇〇 入六間橫七間	同上	同上	同上
祖師堂	六、貳五 貳間半方	同上	同上	同上
關帝堂	六、貳五 貳間半方	同上	同上	同上
大釜堂	九、〇〇 參間方	同上	同上	同上
仙人堂	同上	同上	同上	同上
書院	三四、〇〇 入四間橫八間半	同上	同上	同上
方丈	壹五、〇〇 入參間橫五間	同上	同上	同上

佛像

佛像什寶物記錄古文書等

一聖上萬歲萬々歲尊儀	本堂	高 貳尺七寸六分	壹	個
一釋迦如來像	本堂本尊	高 五尺壹寸參分 蓮臺 參尺貳寸	壹	體
一迦葉尊者像	本堂脇立	高 四尺九寸參分	壹	體
一阿難尊者像	本堂脇立	高 四尺九寸參分	壹	體

長崎市史地誌篇 崇福寺

副司寮	四四、〇〇 入六間橫四間	四八、〇〇 四間に七間	同上	同上
五帝堂	六、貳五 貳間半方	同上	同上	同上
山門	四四、〇〇 入四間橫六間	同上	同上	同上
看門舍	壹貳、〇〇 入參間橫四間	六、〇〇 貳間に參間	七、五〇 參間に貳間半	七、五〇 參間に貳間半
浴室	壹貳、五〇 入貳間半橫五間	同上	同上	同上
經堂	貳〇、〇〇 入四間橫五間	同上	同上	同上
裏門	六、〇〇 入貳間橫參間	同上	同上	同上
土藏	同上	同上	同上	同上
物置	同上	同上	同上	同上

一達	磨	像木堂	坐	像木高	貳尺七寸六分	壹	壹體
一十八	羅漢	像木堂	坐	像木高	參尺八寸	四	四體
一天	后聖母	像媽姐堂本尊	倚	像木高	參尺九寸	壹	壹體
一侍	女	像媽姐堂脇立	立	像木高	四尺	貳	貳體
一侍	者	像媽姐堂	立	像木高	貳尺八寸	貳	貳體
一天	后聖母	像媽姐堂	倚	像木高	五尺	壹	壹體
一釋迦	如來	像媽姐堂	坐	像木高	壹尺四寸	壹	壹體
一阿難	迦葉尊者	像媽姐堂	立	像木高	壹尺八分	貳	貳體
釋迦、阿難、迦葉三尊は、目下新築中の仙人堂の本尊である。もとは曇華院の本尊であつた。							
一觀世音	菩薩	像媽姐堂	坐	像木高	壹尺四寸五分	壹	壹體
一觀世音	菩薩	像媽姐堂	坐	像木高	八寸	壹	壹體
一十二	神將	像媽姐堂	立	像木高	壹尺貳寸	拾	拾貳體
一大	道公	像媽姐堂	倚	像木高	參尺	參	參體
一千	里眼	像媽姐堂	立	像木高	五尺壹寸	壹	壹體
一順	風耳	像媽姐堂	立	像木高	五尺壹寸	壹	壹體

人物像

佛具

一關	帝	像護法堂本尊	倚	像塑高	五尺參寸八分	壹	壹體
一陳	倉平	像護法堂	立	像塑高	四尺七寸五分	壹	壹體
一觀世音	菩薩	像護法堂觀音堂本尊	坐	像塑高	參尺貳寸	壹	壹體
一善哉	童子	像護法堂	立	像塑高	貳尺五分	壹	壹體
一龍女	童子	像同脇立	坐	像木高	壹尺參寸	貳	貳體
一千手	觀世音菩薩	像護法堂	坐	像紙高	五尺七寸七分	壹	壹體
一章	駄天	像護法堂	立	像紙高	九寸貳分	壹	壹體
一布	袋	像護法堂	坐	像木高	壹尺貳寸七分	壹	壹體
一即	非	像開山堂	倚	像木高	參尺參寸	壹	壹體
一千	呆	像開山堂	倚	像木高	參尺參寸	壹	壹體
一大	衡	像開山堂	倚	像木高	參尺壹寸	壹	壹體
一歷代	住持位	牌開山堂	倚	像木高	參尺壹寸	壹	壹體
一大	前	机本堂	前高	四尺壹寸五分	入參尺	貳拾	貳拾五基
一香		爐本堂	前高	七尺六寸五分		壹	壹脚
一燭		臺本堂	高	八寸六分		壹	壹個
一花		瓶本堂	錫製	高	壹尺八寸六分	壹	壹對
			錫製	徑高	四寸五分	壹	壹對

一磬 子木堂

一木 魚同

一太 鼓同

一大 机媽姐堂

一大 机護法堂

一雲 版

一海 鄒

一梵 鐘

高壹尺貳寸

高壹尺四寸四分

高壹尺參寸貳分

高貳尺壹寸

高貳尺八寸五分

高參尺九寸

高參尺五寸

高參尺壹寸

高貳尺七寸六分

高貳尺六寸

高四尺參寸五分厚貳寸七分

高四尺九寸八分龍頭壹尺貳寸壹分

入幅參尺參寸

入幅貳尺五寸

壹 壹 壹 壹 壹 壹 壹 壹 壹 壹

個 個 個 脚 脚 個 個 個

皇圖鞏固 帝道遐昌 佛日增輝 法輪常轉 聞鐘聲 離地獄 菩提長 願成佛 唵伽羅帝耶娑婆訶

煩惱輕 出火坑 智慧生 度衆生

大明國等處奉

佛弟子魏之瑗 喜捨壹百五拾兩

林 邦 環 燬 共捨壹拾兩

潘 啓 祥 喜助五拾兩

薛 士 筌 喜助四拾兩

劉 廷 燃 喜助參拾兩

范 文 復 喜助貳拾兩

洪 希 聖 喜助拾貳兩

何 元 吉 共助拾兩

程 士 理 共助拾兩

林 攀 龍 喜助拾兩

張 大 全 共助拾四兩

楊 星 翼 喜助六兩

薛 崇 熙 喜助五兩

張 奇 碩 喜助壹拾米兩

潘 文 亮 喜助拾兩

方 忠 喜助參拾兩

何 其 森 喜助貳拾五兩

何 興 楚 喜助拾六兩

顧 肇 基 共助貳拾兩

姜 恩 隆 喜助肆兩

葉 正 堅 喜助拾壹兩

何 文 典 喜助拾壹兩

施 文 柯 喜助八兩

鄭 英 喜助四兩

何 知 聖 喜助貳兩

何 高 材 喜助伍拾兩

化主

崇福寺緣首

王 林仁兵衛尉守壁

正保四年丁亥仲秋吉旦住持僧如理

治士阿山助右衛門尉藤原朝臣國久

佛 畫

- 一太 鼓鐘樓 直徑貳尺九寸參分 橫參尺五分 壹
- 一釋迦、文殊、普賢像 傳逸然筆 絹本着色 四尺九寸七分 貳尺六寸七分 參
- 一出山釋迦像 紙本 四尺四寸參分 壹尺八寸參分 壹
- 一涅槃 萬曆庚戌仲春吳彬寫 絹本着色 六尺八寸九分 壹丈參尺參分 壹
- 一觀音、文殊像 絹本着色 五尺六分 參尺貳分 壹
- 一諸天善神像 紙本着色 四尺九寸五分 貳尺六寸四分 壹
- 一達磨 像 伯珣題 紙本着色 參尺九寸 壹尺八寸七分 貳
- 一布袋遊戯圖 松井慶仲筆 絹本着色 參尺九寸七分 貳尺四寸七分 壹
- 一曼陀羅 紙本着色 貳尺九寸四分 壹尺七寸五分 壹
- 一源流列祖像 絹本着色 五尺九寸參分 參尺五寸七分 壹
- 一高峰、中峰、千巖三祖像 逸然筆 絹本着色 參尺四寸五分 壹尺四寸五分 壹

右三祖像の内高峰像には獨湛の賛、中峰像には悦山の賛、千巖像には千杲の賛がある。

一百丈禪師像 獨湛畫賛

一隱元倚騎獅像 像

一隱元 木庵贊元規筆 絹本着色 四尺四分 壹尺六寸 壹

一歷代住持及び當寺關係僧繪像 絹本着色 參尺六寸八分 壹尺參寸九分 壹

一即非 即非自題 喜多元規筆 絹本着色 四尺五寸 貳尺壹寸八分 壹

一即非 喜多元規筆 絹本着色 參尺六寸八分 壹尺參寸九分 壹

一千杲 千杲自題 喜多元規筆 絹本着色 參尺六寸八分 壹尺參寸九分 壹

一大衛 大衛自贊 紙本着色 參尺七寸八分 壹尺八寸五分 壹

一大成 像 黃檗七拾翁大成自題 紙本着色 四尺五寸五分 貳尺參寸五分 壹

一靈源 渡邊元真筆 紙本着色 四尺七寸七分 壹尺七寸七分 壹

一江外 江外自題 小原慶山筆 紙本着色 貳尺八寸九分 八寸七分 壹

一隱元 萬古資林春 紙本 四尺參寸壹分 壹尺參寸壹分 壹



長崎市史地誌篇 崇福寺

一額 護法藏 雪峰頭陀即非誦書

橫 壹尺八寸五分 內緣四寸 壹

面

一額 乾坤正氣 丁未歲小春月上浣

橫 三尺二寸四分 內緣五寸六分 壹

面

一額 威德莊嚴 沙門即非敬書

橫 壹尺八寸四分 內緣四寸二分 壹

面

一額 臨下有赫 歲癸卯孟春吉旦捨緣衆弟子拜立

橫 壹尺六寸六分 內緣四寸六分 壹

面

一額 海不揚波 弟子魏之瑛立

橫 參尺七寸 內緣八寸 壹

面

一額 高登彼岸 寬文歲在壬子孟冬穀旦 同邑文岐弟子林翹敬立

橫 參尺四寸九分 內緣六寸四分 壹

面

一額 萬里安瀾 弟子魏之瑛立

橫 參尺六寸九分 內緣八寸 壹

面

一額 永護安瀾 道光肆年荷月 沐恩弟子楊嗣雄敬立

橫 貳尺七寸一分 柒尺五分 壹

面

一額 海天活佛 大清道光八年孟立穀旦 沐恩錢塘弟子沈堪造敬立

橫 參尺壹寸 六尺壹寸七分 壹

面

一額 正法眼 隱元書 開山堂

橫 參尺參寸五分 參尺四寸五分 壹

面

一額 無盡光 黃檗賜紫門人性安千泉書 開山堂

橫 貳尺參寸 四尺六寸 壹

面

一額 萬古流芳 大衡書 開山堂

橫 貳尺貳寸五分 六尺貳分 內緣七寸貳分 壹

面

一額 法海慈航 嗣祖沙門即非書 開山堂

橫 參尺六寸 八尺八寸 內緣八寸 壹

面

一額 毘盧藏海 龍飛癸酉歲孟夏穀旦 佛弟子游九宮李國泰翁茂鼎張一相立

橫 參尺四寸七分 六尺壹寸 內緣八寸 壹

面

一額 山河正氣 二山弟子王儀拜立 媽姐門

橫 參尺貳寸 八尺五寸 內緣七寸 壹

面

一額 聖壽山 隱元書 山門

橫 貳尺五寸 參尺八寸 內緣壹寸貳分 壹

面

一額 慈雲普蔭 山門

橫 貳尺貳寸四分 參尺八寸五分 內緣貳寸四分 壹

面

一額 方丈 方丈

橫 貳尺壹寸四分 四尺壹寸九分 內緣五寸貳分 壹

面

一額 傳法堂 不肖孫海權拜書 方丈

橫 貳尺貳寸 五尺四寸 內緣六寸 壹

面

長崎市史地誌篇 崇福寺

一額 不二門 明曆元年孟秋吉旦 老僧隱元立

橫 貳尺九寸參分 內緣四寸四分 壹 面

一額 額

一聯 第一峰門 即非書

橫 四尺貳寸七分 內緣壹尺壹寸 壹 面

一聯 第一峰 即非書

一聯 本堂

橫 九尺八寸 壹尺壹寸壹分 壹 對

一聯 一棒酬恩雲門之大機用超凡越聖右  
破顏契旨迦葉之正法眼耀古騰今左  
嗣法即非拜題

一聯 佛是了事 漢左

橫 六尺 壹尺貳寸壹分 內緣七分 壹 對

一聯 世豈無全人右  
即非書

一聯 帝極奠安四海仰恩波洋溢右  
皇言宣諭萬民荷德澤淵深左

橫 壹丈八寸五分 壹尺參寸七分 壹 對

聯

一聯 已九番船主機升吉敬立(銘)  
護法堂

橫 八尺 壹尺貳寸五分 內緣九分 壹 對

一聯 一座壽山觀自在右  
無邊福海大圓通左  
沙門性俊曇瑞拜書(銘)

一聯 德配乾坤浩氣常存漢室右  
光緒丙午中秋月穀旦

橫 四尺七寸參分 內緣貳寸八分 壹 對

一聯 忠昭日月協力威震華夏左  
沐恩信士張加鏢敬叩

一聯 體帝心以濟人登衽席波濤之上右  
秉坤德而習坎駕津梁天海之中左

橫 九尺八寸參分 內緣八分 壹 對

一聯 弟子魏之瑛董沐拜題

一聯 涓嶼靈照千古蹟右

橫 六尺壹寸 壹尺參分 壹 對

一聯 壽山崇視萬年春左  
何紹迪書(銘)

長崎市史地誌篇 崇福寺



一、額

揚帆登寶所右 媽姐堂

橫 六尺五寸 內緣六分 四四八

壹 對

慈愛見婆心左 即非山僧聖壽主人銘

一、聯

開山堂

橫 四尺四寸七分

壹 對

全提摩羯令

別展少林風 大衛書(銘)

一、聯

開山堂

橫 六尺四寸 內緣壹寸

壹 對

遮那性海光明藏右

優鉢羅花劫外春左 墨瑞千朵書(銘)

一、聯

開山堂

橫 七尺八寸 內緣壹寸四分

壹 對

宗門無鎖鑰何曾超凡越聖

祖道有鉗錘直教點鍊成金 義勝書(銘)

一、額

開山堂

橫 六尺貳寸五分 內緣壹寸

壹 對

功垂鹿苑金湯固右

福被檀門世代昌左 沙門千賦安合十敬題(銘)

一、聯

開山堂

橫 四尺參寸 內緣壹寸

壹 對

法道超今古右

風光徧刹塵左 大衛書(銘)

一、聯

第一峰門

橫 六尺貳寸四分 內緣壹寸

壹 對

天空海闊無雙地右 享保辛丑相月設旦(銘)

虎伏龍蹄不二門左 住上道本願並書(銘)

一、崇福開創歷代住持事實

美濃假綴

壹 冊

一、當寺歷代住持及境內建物末庵調

中奉書假綴

壹 冊

一、本寺歷代主法並渡海唐僧來由簿附諸殿堂各庵院事

中奉書假綴

壹 冊

一、當寺並未庵境內坪數御地子銀帳

美濃假綴

壹 冊

一、當寺境內間數繪圖並山外塔頭拾貳ヶ所間數繪圖之書付

中奉書假綴

壹 冊

一、當寺由緒歷代並境內坪數諸堂舍間數之覺

美濃假綴

壹 冊

天明二壬寅年六月改

寺社方御代官所へ相認差出置候控 崇福寺控

天明二年寅六月長崎鎮

一 聖壽山崇福寺縁記書

明治二十四年辛卯五月 住持寶林改置

美濃假綴

壹

冊

一 聖壽山崇福寺由緒

美濃假綴

壹

冊

一 崇福寺明細書

中奉書假綴參枚

壹

冊

天明二年十二月

一 唐僧請待銀御貸附利銀御内渡請取帳

中奉書假綴

壹

冊

一 黄檗派崇福寺末院庵

美濃假綴

壹

冊

一 當寺並塔頭聯額記控

美濃假綴

壹

冊

寛政八丙辰三月中川飛驒守様初在勤三寺並末庵等にお尋に付此通相認差出候事(表紙記載)

文化十二年乙亥七月年番崇福寺

一 唐館土神堂修覆諸願書留

半紙假綴

壹

冊

七月八日方始り九月十六日迄晴天十九日限にて皆出来に相成

弘化二年巳十二月

一 聚會決談帳

半紙假綴

壹

冊

一 竹林道本和尚由縁

美濃假綴

壹

冊

一 制 詞知客寮

中奉書假綴

壹

冊

一 什物帳

大正七年拾壹月調

美濃假綴

壹

冊

一 土地臺帳

半紙

壹

冊

一 地券記

半紙

貳拾七枚

明治十四年四月三十日附貳拾壹枚 明治十五年五月三十日附六枚

天明八年八月

一 唐館土神社板橋新に掛替願書等之控

半紙假綴

壹

冊

安永九庚子七月中旬記同年十月迄四ヶ月分記

一日 録

美濃假綴

壹

冊

天明元五年九月願通相濟

一 利銀請取帳

美濃假綴

壹

冊

天明四甲辰年二月晦日至三月初五日

一 宇治黄檗山當住大成和尚並役僧龍門長老右兩位を於江府寺社御奉行所

請唐僧願書被差出候處當所 御代官所において黄檗山を請唐僧願書關

東寺社奉行所へ差出候に付件々御尋之趣手頭を以被仰渡候に付三ヶ寺

同末十三庵を御代官所へ差出請書並黄檗山を關東寺社奉行所へ差出の

願書等共控

美濃假綴

壹

冊

- 一 公用諸願之控  
天明五巳年正月 美濃假綴 壹冊
- 一 諸願之控  
天明六丙午年 美濃假綴 壹冊
- 一 諸願之控  
天明九巳酉歲正月吉旦 美濃假綴 壹冊
- 一 諸願之控  
寛政貳戌年 美濃假綴 壹冊
- 一 諸願之控  
寛政三年亥二月二十一日 美濃假綴 壹冊
- 一 御書出披露各々承知印形帳  
寛政五年丑四月二十六日起 美濃假綴 壹冊
- 一 施粥米並銀錢等請取帳  
寛政六年 美濃假綴 壹冊
- 一 諸願之控  
文化六巳巳年正月吉旦 美濃假綴 壹冊
- 一 諸願之控  
文化八年辛未年開正吉旦 美濃假綴 壹冊

- 一 諸願之控  
文化十年 美濃假綴 壹冊
- 一 諸願之控  
文化十一年戊正月 美濃假綴 壹冊
- 一 諸願之控  
文化十二年乙亥正月 美濃假綴 壹冊
- 一 諸願之控  
文化十四丁丑正月吉旦 美濃假綴 壹冊
- 一 諸願之控  
文政八乙酉開正吉旦 美濃假綴 壹冊
- 一 諸願之控  
文政十丁亥歲正月 美濃假綴 壹冊
- 一 諸願之控  
文政十三年庚寅正月吉旦 美濃假綴 壹冊
- 一 媽姐祭要書  
天保六年未八月改 美濃假綴 壹冊
- 一 唐館内臨時法事要書  
天保六年未八月改 美濃假綴 壹冊

- 一諸願書留賬 天保八年酉正月 美濃假綴 壹冊
- 一諸願屆書記錄 天保十五年辰九月改 美濃假綴 壹冊
- 一諸願書留 弘化二年巳正月 美濃假綴 壹冊
- 一諸公廳之簿 弘化四丁未正月吉日  
文久三年亥六月 美濃假綴 壹冊
- 一唐館内土神社屋根雨漏並練塚築直し見分願修復願書等之控 美濃假綴 壹冊
- 一差入申永代取究證文之事 明和四年丁亥九月黃檗現住伯珣記 横 壹尺七分  
横 壹丈貳尺五寸 美濃假綴 壹冊
- 一大悲禪庵輪流繼席規約 横 壹尺貳寸七分 美濃假綴 壹冊
- 一石峰寺一條 横 壹尺 美濃假綴 壹冊
- 一請唐僧願に付演舌之覺 巳九月(元文?) 横 八寸四分 美濃假綴 壹冊
- 一乍恐奉願口上之覺 横 貳尺六寸七分 美濃假綴 壹冊

辰閏十月

- 一唐三ヶ寺先年奉願蒙御免申越置き唐僧の名所書之覺 横 壹尺 壹冊
- 一別紙奉願口上之覺 横 壹尺五寸 壹冊
- 一請唐僧申渡 明和五年十二月  
長崎譯司より范天錫楊裕和に宛てたるもの 横 六寸壹分 壹冊
- 一約券證文 寛政四壬子年五月  
補 小笠原左近將監より崇福寺を陣屋として借受證文 横 貳尺貳寸 壹冊
- 一黃檗山住職補任狀 横 六寸 壹冊
- 一乍恐奉願口上書 唐僧招聘方願書福濟寺より後藤惣左衛門宛 横 九寸 壹冊
- 一西二月 横 六尺貳寸 壹冊
- 一口上之覺銀借用目錄 横 六寸五分 壹冊
- 一乍恐奉願口上書 大成萬福寺住職任命後黃檗山日用費につき給與銀下附願 横 八寸八分 壹冊
- 一乍恐奉願口上書 横 四尺五寸 壹冊

西三月

一覺 文化二年五月 銀借用目録

一御借地證文

小笠原家代替りに付崇福寺陣屋借受證文を書き改めたものである。

一寄崎陽三唐寺執事禪師書

未四月

一口上之覺

唐僧招聘願書町年寄後藤惣左衛門宛

寛政五年丑二月六日

一唐三ヶ寺法務糺書控

天明四年甲辰正月黄檗二十一氏大成立

一規 大慈悲庵後住規定也

明和三年丙戌歲初秋日

一規 大慈悲庵後住に關す

享保貳年四月二日

一末庵票

寶永乙酉年五月

一公論

横 六寸五分

壹

枚

横 壹尺七分

壹

枚

横 壹尺五分

壹

枚

横 壹尺四分

壹

枚

横 壹尺八寸五分

壹

枚

横 壹尺八寸

壹

枚

横 壹尺壹寸

壹

枚

横 壹尺七寸

壹

枚

横 壹尺七寸八分

壹

枚

横 壹尺壹寸

壹

枚

版木

一大悲庵圖面

一庵地間數覺

一佛祖正印源流圖像贊

一即非禪師全錄 卷七、卷八缺

一也懶禪師語錄

一聖壽千呆禪師語錄

一版 木 楊柳觀音即非贊范道生作

一版 木 洛游草道本稿

一會符

一推 朱香篋

一即非用鐵鉢

一即非用筋子箱 付

一朱泥應量器蓋 付

一法衣座具

長崎市史地誌篇 崇福寺

長崎市史地誌篇 崇福寺

長崎市史地誌篇 崇福寺

長崎市史地誌篇 崇福寺

長崎市史地誌篇 崇福寺

長崎市史地誌篇 崇福寺

長崎市史地誌篇 崇福寺

長崎市史地誌篇 崇福寺

長崎市史地誌篇 崇福寺

長崎市史地誌篇 崇福寺

長崎市史地誌篇 崇福寺

長崎市史地誌篇 崇福寺

長崎市史地誌篇 崇福寺

長崎市史地誌篇 崇福寺

長崎市史地誌篇 崇福寺

長崎市史地誌篇 崇福寺

長崎市史地誌篇 崇福寺

長崎市史地誌篇 崇福寺

横 壹尺四分

横 壹尺四分

横 壹尺四分

横 壹尺四分

横 壹尺四分

横 壹尺四分

横 壹尺四分

横 壹尺四分

横 壹尺四分

横 壹尺四分

横 壹尺四分

横 壹尺四分

横 壹尺四分

横 壹尺四分

横 壹尺四分

横 壹尺四分

横 壹尺四分

横 壹尺四分

横 壹尺四分

横 壹尺四分

横 壹尺四分

横 壹尺四分

横 壹尺四分

横 壹尺四分

横 壹尺四分

横 壹尺四分

横 壹尺四分

横 壹尺四分

横 壹尺四分

横 壹尺四分

横 壹尺四分

横 壹尺四分

壹

壹

壹

壹

壹

壹

壹

壹

壹

壹

壹

壹

壹

壹

壹

壹

壹

壹

壹

壹

壹

壹

壹

壹

壹

壹

壹

壹

壹

壹

壹

壹

枚

枚

枚

冊

冊

冊

冊

冊

冊

冊

冊

冊

冊

冊

冊

冊

冊

冊

冊

冊

冊

冊

冊

冊

冊

冊

冊

冊

冊

冊

冊

冊

隱元禪師用明治三十九年佐倉彌三、支那黃檗山より將來寄贈(題)

一 即非用法衣法服

辨縮絹二十五條

各壹領

即非大和尚の法衣裏書に鎮崇福常住永遠供養千呆とある。

一 大 衡 用 袈 裟

麻貳拾五條

壹 領

一 千 呆 用 鉗

長 七寸壹分

貳 本

一 千 呆 用 匙

長 六寸七分

貳 本

一 即非使用柱杖

長 七尺二寸七分

壹 本

先師柱杖永鎮方丈萬載之下留供養法子性俊拜(銘)

一 錫 杖

長 六尺八寸八分

壹 本

右錫杖は千呆の用ひしものなりと云ふ。

一 即非舍利塔

真鍮製 高 參寸八分

壹 個

一 同 舍 利 殿

真鍮製 高 壹尺貳寸九分 横四寸貳分 四面 壹 個

末次平藏茂朝及びその母長福院の寄附に係り、内に即非の舍利が藏めてある。

長崎名勝圖繪には當寺什寶として左記のものを擧げて居る。

繪像舍書金剛經

壹 幅

十八羅漢隱元木庵即非三和尚畫並贊

壹 幅

獨立禪師草花畫讀詩畫は狩野益信筆

壹 幅

末 庵

末 庵

聖壽山十二景圖並大衡和尚詩林道榮題  
即非和尚東渡小影  
雲上諸名公六歌仙色紙並畫

壹 卷  
壹 幅  
壹 幅

當寺末庵は、二十三、或は二十四、山内十一、あつた。即ち寛文八年、千呆が廣福庵を創建してから、延享二年、天華庵が八幡町に建てられるまで、前後二十有餘の末庵が建てられたのである。斯く多數の末庵を有したる崇福寺は、其の全盛時代には、海西の一大法窟を以て誇つて居た。諸庵中、廣福、綠菫、大悲、祇樹、廣徳の五庵は、祿庵として、名は末庵なりと雖も、實は獨立せる一山に準せられたものである。

廣 福 庵

本 尊 釋 迦 如 來

寛 文 八 年 創 建

寛文八年、唐僧千呆がその師即非の命を奉じて創建したものである。尋いで即非示寂後、即非の舍利塔が設けられ、また即非の塔も立てられた。元祿六年、庵を改築し、併せて法寶殿を建て、一切經を收藏した。千呆示寂後、其の塔が建てられたから、三基の塔が相並ぶに至つた。當庵は以上三塔を守り、一山を護る庵として、將

隱元髮塔即非舍利塔  
法寶殿千呆壽塔

廣 福 庵

境内

たまた本寺末庵中の随一として重きをなして居たが明治維新後遂に廢絶した。境内に報資室、出定鐘洗鉢泉、補衣石、三友軒、觀潮坪、又笠雲亭ふるここありを加等の六景があつた。

境内 坪數五百坪、堅貳拾五間、横貳拾間にして、庵室は參拾坪、六間に五間で、庫裏は四拾坪、八間に五間の建物であつた。それに貳拾坪、拾間に貳間の廊下が附屬して居た。

左に廣福庵に關する詩數首と廣福庵六景の詩とを掲げておく。

示曇瑞徒子建廣福庵上梁二首 即 非

托出一梁橫法界、撐持自有好兒孫。片椽隻瓦丘山重、貴要知恩解報恩。 又

曇花纔現瑞法雨、便均霑異日道弘博。自然福愈添。 曇禪師構廣福庵落成賦贈 蘊 謙

檀林不隔放團瓢、清入肺腸道自饒。滄海聊爲雙眼供、高堂還受列峯朝。移梅種竹交初訂、盟鶴伴雲期再招。景發天藏開廣福、得逍遙處且逍遙。逍遙並艸

廣福庵上梁 下 呆

法界包藏一箇庵、福林瑞氣繞團團。寶盤壓起高無際、覆蔭兒孫道自寬。

廣福庵六咏

報資室

即

非

何以資恩首全憑、三昧力一念未萌時。頓超千百億

出定鐘

身心空似鐘鐘鳴、猶出定是定不是定。寂寂見聞性

洗鉢泉

地涌一泓泉、天賜供洗鉢。放去潤福田、解盡塵勞渴

補衣石

衲破剪春雲、石破如何補。跣趺石盡處、一任莓苔裏

三友軒

香翠結一團、依然室是蘭。愛君均節操、留客倚闌干

觀潮坪

瓊花逐浪開、眼裏添塵埃。返照本來面、大千一鏡臺

右先師即老人題廣福六詠黃檗法子佞千呆敬錄

廣福庵即景

同

壽峰千井外大隱樂棲遲野客節相訪山僧定出時煙描江上景潮咏畫中詩造物  
留心地茅庵卜夏宜

廣福庵六詠並序

庵在崎江聖壽山之上吾千兄和尚手勸為駐錫棲禪處有六景憑高望遠吞風咄  
月雖在人寰而有遺世獨立之趣吾古即大師嘗有作詠予每讀之若身履其間而  
逸興旋飛乃不揣續貂以寄千兄以寫遠懷云

報資室

高

泉

曉昏獻水獻花恩有難資難報爭如一念無為直使頓成十號

出定鐘

炷香燕坐放牀大定初無出入誰教稚子輕敲幾度和雲聲濕

觀潮坪

海門風送潮來怒勝奔雷驟馬能澄眼處聞聲乃是圓通之者

三友軒

庭前不蓄凡花但種青松梅竹幾回雍毳推窻喜見歲寒昆玉

補衣石

松根剝片磐陀歲久半埋泥土道人衣破裁雲往往就中縫補

洗鉢泉

淨名室裡齋餘香飯猶粘瓦鉢歸來浣滌臨流聊濟鬼神饑渴

佛國激高泉敬書於瑞竹軒

廣福庵六詠

千

呆

報資室

天高地厚恩無盡海澗山長報未由福舍道基合法界四三恩首一齊醉

出定鐘

新開禪室白雲中鐵壁銀山聳現空陳爛葛藤都坐斷那伽定裡一聲鐘

洗鉢泉

法泉涌出自無心洗到無塵意轉深鉢底偶然傾一滴大千從此化甘霖

補衣石

一線清風石上生滿輪紅日眼中明針針相似了無別粉碎虛空補得成

三友軒

大夫君子與高士節操虛心闢雪香不二色空當下領清風明月奏笙簧



觀潮坪

達觀四海一浮漚閑看孤舟載客遊浪蘂漚花生滅法幾人觀破水源頭

歲次庚辰仲夏望前六日也黃藥賜紫千呆老人書於願指方丈

經閣上梁拈香

千 呆

梁擊慧日耀三臺喜見遮那應現來普覆香雲垂法界百千諸佛咲顏開

賀廣福建藏經閣

東 瀾

施來一大教寶閣已圓成龍獻長生水鳥宣微抄聲羣芳爭吐瑞千嶂競呈英高掛  
碧霄裏祥雲映日宏

咏洗鉢泉

廣福有靈泉其名曰洗鉢吾師曾有言解世塵勞渴泉靈澤自廣四時用不竭或時  
臨池澡湛然鑑鬚髮掬之歡喜生飲之胸襟豁或時供陶泓煙雲筆底發夜靜鐘磬  
停聲塵入窻榻疑是師舌頭空中長說法

由緒書

一廣福庵之儀唐僧千呆寬文八戊申年造立仕候然處唐人共千呆退院之爲助成  
緣銀附來受納仕候然者元祿九丙子年唐人共費多きを御厭被遊候而

歷代庵主

近藤備中守樣丹羽遠江守樣御代に所々之緣銀被召上候然共翌丑年唐人  
方右之緣銀遣申度由奉願候所に舊例通 御赦免被遊緣銀受納仕來り申  
候

一廣福庵寄進物儀唐人共町屋に罷在候節心儘に寄進物仕候得共二十一年以  
前巳年構御入被遊候以來唐人共御願申上色品不限多少心次第に寄進仕  
申候但七年以前未年寄進物五色程宛受納仕申候寶永六年屆

廣福庵歷代庵主世系

- 開基 千呆性安 嗣即非一 寶永二年乙酉二月朔日示寂
- 二代 石門海龍 嗣千呆安 寬延元戊辰年十月六日示寂
- 三代 金鳳寂文 嗣石門龍 享保元丙申年十一月五日示寂
- 四代 天外寂般 嗣石門龍 享保六辛丑年十一月十日示寂
- 五代 仁翁寂壽 嗣石門龍 寶曆十二壬午年七月廿二日示寂
- 六代 蓋天寂普 嗣石門龍 明和四丁亥年十月十七日示寂
- 七代 時學寂玄 嗣石門龍 安永六丁酉年十月三日示寂
- 八代 鶴揚寂高 嗣石門龍 寶曆十三年癸未正月廿九日示寂

- 九代 立仲寂旨 嗣石門龍 明和二乙酉年三月六日示寂
- 十代 關振照仰 嗣天外般 明和四丁亥年九月朔日示寂
- 十一代 密源照明 嗣金鳳文 享和元辛酉年十月十九日示寂
- 十二代 密山照修 嗣蓋天普 文化十三丙子年三月廿一日示寂
- 十三代 大林普操 嗣關振仰 文化十癸酉年三月廿一日示寂
- 十四代 鳳山照瑞 嗣高雲祥 享和三癸亥年六月九日示寂
- 十五代 祖來普意 嗣密源明 文化十四丁丑年四月廿九日示寂
- 十六代 惠衡照權 嗣時學玄 文政六癸未年七月四日示寂
- 十七代 成山通功 嗣珠山仙 文化十癸酉年三月九日示寂
- 十八代 雪庵普謙 嗣密山修 嘉永二己酉年七月廿九日示寂
- 十九代 圭田普清 嗣鳳山瑞 文政十二己丑年二月二十三日示寂
- 二十代 實參普悟 嗣嘉衡權 嘉永五壬子年五月十二日示寂
- 二十一代 鑛冲通鍊 嗣大林操 伊豫安城寺ニ轉住
- 二十二代 隣山通徳 嗣圭田清 明治七甲戌年二月十二日示寂

廣善庵

本尊 釋迦如來

寛文八年創建

當寺山門の附近に在つた。寛文八年、和僧獨振林大綱の長子林大堂即ち林仁兵衛、元禄七甲戌年閏五月六日黄檗山に於て示寂の創建したものであるが、明和三年二月廿七日夜、西古川町より失火せる大火に際し、當庵は全焼した。その後當庵は再建せられなかつた。

境内 六拾參坪横九間に入七間  
庵室 拾貳坪四間に參間

臥雲庵

本尊 釋迦如來

寛文十年創建

一に臥遊軒と云ふ。竹林庵の東隣に在つた。寛文十年唐僧柏嚴の建立したものである。文政末年頃廢庵となつた。

境内 五百坪横貳拾間入貳拾五間  
庵室 四拾八坪八間に六間

長崎市史地誌篇 崇福寺

示臥雲庵主有引

千 呆

四六八

禪燈上座素欲結庵以放蒲團不果山僧知之久矣客歲常住偶得山園數畝其  
 東有一雲窩清幽可喜遂撥興開關將臥雲舊室從而新之雖地連咫尺其勝概  
 又別成一人間世也經始于丁巳初冬告成日述偈四首爲慶  
 法界爲庵雲一窩燈籠開口咲呵呵而今放下全無事那管人來問有麼  
 古格叢林都勘過姑移艸構入煙蘿長伸兩脚安閒臥咲破虛空一刹那  
 衲僧住處是禪林爲法何分庵窄滾雲臥不知天地老道存時對聖賢心  
 勤苦多年掛鉢囊一庵高臥白雲傍人來問道空彈指坐續燈光柏子堂

栢禪師構臥雲庵次韻奉贈

蘊 謙

爲法藩籬構碧巖不須費卻艸鞋錢豹斑隱霧文成彩鯤化圖南翼振天拔萃驚羣  
 無以敵買間移榻自相便雲根截斷傍雲臥劈破虛空只一拳適茲艸

題臥遊軒六首

沈 燮 庵

東崎景物似江南攬盡風光戶牖參最是秋空新雨霽山凝螺黛水拖藍  
 臥看青山放白雲楓丹萸紫襯斜曛膏肓泉石煙霞癖吾愛風流宗少文  
 山樓屑霽水浸空臥遊晨夕景非同此間畫圖天然好底用調烟倩畫工

猿聲清絕出長林霧岫烟嵐演染深長嘯衆山皆響應何須琴操發清音  
 一盞香茶一炷烟軒中臥對儘悠然知交若個頻來往好結他鄉山水緣  
 招邀詩友散觥籌碧水丹山筆底收此際憑欄真不厭秋風秋月恣遊游

臥遊亭次即和尙韻

蘊 謙

克構源頭上喝開百道流亭從樹裏出人在雲中遊法眼光於日禪心湛  
 若秋時芬花雨氣別是一滄洲適茲艸

廣 德 院

本 尊 釋 迦 如 來

延 寶 五 年 創 建

延寶五年千呆の法子和僧悅岸の創建したものである。隱元即非千呆三和尙の  
 塔の西側にあつた。

境 内 貳百八坪横拾參間入拾六間

庵 室 壹棟拾八坪六間に參間廢庵年月日不明

千 呆

德不孤兮必有鄰廣開精舍獲完成而今更弗間之繞斷岸江頭絕送迎

天遭地設妙渾成傑構虛堂德信明此日功園善果滿修持操縱愈精誠  
壽林影裏翠堆堆古道于今半是苔聖果凡因都坐斷一毛頭上德庵開  
好山只屬脚頭尖何必千巖萬壑尋山色水光長在眼夏於何處覓瓊林

歷代庵主世系

- 開基 越岸海登 嗣千呆性安 享保十八癸丑年三月廿六日示寂
- 二代 寶珠寂光 嗣越岸登 寶曆七丁丑二月廿八日示寂
- 三代 廓音寂潮 嗣越岸登 享保十八年癸丑四月廿八日示寂
- 四代 天朗照晃 嗣惠滿智 明和三丙戌年三月十三日示寂
- 五代 大航照載 嗣惠滿智 安永七戊戌年三月十三日示寂
- 六代 梅山照禎 嗣惠滿智 文化元申子年十一月十二日示寂
- 七代 鳳林普瑞 嗣天期晃 文化三丙寅年六月廿五日示寂
- 八代 恒善普長 嗣梅山禎 文政十一戊子年轉住千秋寺
- 九代 蘭溪通芳 嗣鳳林瑞 文政十三庚寅年正月六日示寂
- 十代 義光普信 嗣大航載 天保十四癸卯年七月九日示寂

不二庵

- 十一代 龍湫普靈 嗣梅山禎 天保七丙申年正月十七日示寂
- 十二代 提山通秀 嗣義光信 轉住瑞光院
- 十三代 來鳳益儀 嗣蘭溪芳 明治元戊辰年七月五日示寂

本尊 釋迦如來

天和二年創建

天和二年唐僧雪堂の建てたものである。雪堂は支那福建省泉州府同安縣の人  
で俗姓は陳氏であつた。拾參歳にして出家し、支那黃檗山に上り延寶二年渡來し  
た。その後千駄に師事し延寶四年より同五年まで看坊たりしが、貞享三年二月十  
六日示寂した。時に世壽參拾六歳であつた。

境内 百八拾坪横拾八間入拾間

庵室 壹棟拾坪五間に貳間廢庵の年代は詳らかでない。

祇樹林

本尊 釋迦如來

貞享二年創建

長崎村西山郷椿原今縣立高等女學校右上手皇典講究所に在つた。貞享二年唐僧惠雲、後雪摩と云ふ。支那浙江會蘇州府常熟縣の人。延寶五年來朝してが興福寺境内に創建したものであるが、後元祿貳年當寺内に之を移し、享保二年に至りて雪摩の徒子和僧鉄舟が更に之を西山郷に移轉した。同六年唐船主等は定例寄進銀を附した。當庵は崇福寺下椽庵の一つで、境内廣く、幽邃閑佳で、頗る繁昌して居た。

明和五年八幡町天華庵の庵號を當庵内へ引置き、再興を計企したが、遂に事成らずして止んだ文化頃に至り、負債百四拾貫目餘に及び、唐船寄附額は全部之を償却に充てられたるより、大に衰微した。此の頃當庵繼席に關し、紛紜を生じ、解けざることを年餘、遂に鉄舟、南岸兩派交代を約して落着したが、當庵は徒らに衰微してゆくばかりであつた。

明治八年庵主海音は維持困難なるため、崇福寺末庵たる廣福庵に退居し、同十年五月庵號をも廣福庵に合併することになり、同十五年二月整理のため境内千八百四坪を賣却して了つた。

當庵が本寺境内に在りし頃は、境内坪數は九拾坪、堅拾間横九間で、庵室壹棟の建坪は貳拾四坪六間に四間、寶永四年であつたが、西山郷移轉後は、敷地總坪數貳千五百

餘坪、東西四拾貳間南北六拾間、地子銀貳拾壹匁壹分四厘參毛内四匁壹分四厘參毛、庄屋森田周、藏方へ納他は西山郷乙名等へ渡であつた。西山郷へ移轉の當時當庵は町年寄藥師寺又三郎の所有地參百坪と百姓持地貳千坪餘を購入したのである。

明和四年三月、崇福寺末庵明細帳に據れば、當庵敷地は次の如きものであつた。

- 東方 六拾五間 拾九間 鉅鹿太左衛門墓所境
- 西方 五拾貳間 拾壹間貳尺 百姓橋左衛門垣根境
- 南方 四拾五間貳尺 拾壹間貳尺 原次郎太屋敷境
- 北方 貳拾間 四拾間四尺 古川町伊平太屋敷境
- 表往來筋(今の西山道)
- 百姓墓所境

祇樹林歴代庵主世系

- 開基 雪摩海潤 嗣千景性安 寶永五戊子年閏正月六日示寂
- 二代 鉄舟寂浪 嗣雪摩潤 自寶永五年至享保三年十一年在職 享保十八癸丑年四月十七日示寂
- 三代 東洲 自享保三年至同五年三年在職
- 四代 十洲 自享保五年至同十一年七年在職
- 五代 南岸寂柳 嗣雪摩潤 自享保十九年至延享四年十四年在職 延享四年六月十二日示寂
- 六代 梅林照檀 嗣南岸柳 自延享四年至明和二年九年在職 安永七戊戌年三月廿一日示寂

長崎市史地誌篇 崇福寺 四七四

七代	珉光普明	嗣懶睡覺	自明和二年至安永七年十月十四日示寂
八代	本光普瑞	嗣梅林檀	自寛政三年至文化十年七月二十三日示寂
九代	耕雲通吟	嗣珉光明	自安永七年至寛政元年十二月廿六日示寂
十代	慧燈益心	嗣耕雲吟	自文化十年至文政三年八月八日示寂
十一代	萬海通春	嗣本光瑞	文政七年甲申年九月七日示寂
十二代	達觀益龍	嗣耕雲吟	天保十一年庚子年二月十五日示寂
十三代	兀庵益兀	嗣耕雲吟	明治四年辛未年四月二十三日示寂
十四代	華山益頂	嗣萬海春	萬延元年庚辰年五月十三日示寂
十五代	義堂暉節	嗣達觀龍	慶應二年丙寅年七月十五日示寂
十六代	海音暉潮	嗣仙芝瑞	

因に八代本光は宗法違背のかぎにて寛政元年退去を命ぜられたる故、一書の世代には載せてない。

竹林院 本尊 藥師如來

貞享參年創建

所在 廣福庵の東隣に在つた。

沿革 貞享參丙寅年唐僧玉岡の建てたものである。玉岡は支那福建省福州府福清縣の人、俗姓劉氏、九歳にして黄檗山に至りて出家し、延寶貳甲寅年雪堂と共に長崎に渡來して崇福寺に入り、千餘に師事して延寶參乙卯年より崇福寺住持長崎實餘大成には監寺とあるが、寶永四年長崎寺社帳には住持とある。たること拾九年に及び、元祿六癸酉年十月六日を以て示寂した。時に世壽五拾參歳であつた。後道本もこの庵に退隱した。弘化元甲辰年十二月維持困難に因り當庵は改築されて縮小した。廢庵の年代は詳らかでない。

境内 貳百拾坪横拾七間半堅拾貳間  
 庵室 五拾四坪入六間横九間  
 藥師堂 七坪入貳間横參間半

崇福玉岡老姪創竹林室隨喜

鐵心

高陟妙峰頂踏雲入寶坊林青吟興普茶熟道論長鳥噪喧幽席煙浮鎖短牆送迎  
 幽地少羸得竹陰涼

虛室落成 以下竹林院

道本

踴促蓬窓障六塵經營斗室置閑身了無俗物憎群盜只有圖書對古人四壁清光

明几案一龕寥寂曠心神不知世上升沉事小口臨疲作欠伸

鎮松 同

水陸芳菲可以群奇哉此種未曾均葉如鸞鳳飄金翠射似虬龍累鏡鱗花信風來  
摠不管秋來霜落亦何峻嚴威自戒媿嫻態好留山林別作春

竹林院即景八詠 效網川體 同

竹林

竹密自成林林深足賞心我來爲修滌新梢長十尋

羅漢松

雙樹顏如鐵固足稱羅漢拱立我門前不作炎涼看

雙桂

雙桂移深谷樹之我庭院八月自開花香滿黃金殿

珠簾

山泉漏石隙錯落日南珠一幅如簾箔堪將入函圖

玉箸

石壁泉如削雷爲雙玉箸時出妙音聲不混諸流去

蓮池

水不盈三尺惟容數斛泥綠荷紅菡萏亦足愛滌溪

石沼

一曲清漣沼光涵尺五天花飛粘日暉魚躍動星躔

山海樓

茲樓雖小構且足觀山海聊以聘吾懷是故名之乃

訪竹林不遇

朱

紳字佩章

旅人拜訪駕他遊未遇高真靜室幽沐浴虔誠思再晤不知可肯惠然收

清涼庵

本尊釋迦如來

元祿元年創建

所在 清涼庵はもと崇福寺境内後方上段に在つたが、後爐粕町に移轉した。

沿革 この庵は元祿元年和僧江外海長が崇福寺境内に創建したものである。

江外は新紙屋町即ち今の八幡町乙名木下八郎左衛門正榮の子であつた。江外の母は早く逝きしたため木下氏は後妻を迎へたが、江外は感ずる所ありて崇福寺住持

清涼庵

所在

江外

千駄和尚を師と頼みて剃髪した。その後服勤多年、遂に千駄和尚の法を嗣ぎ、尋いて諸國遊歴の途に上り、一時黄檗山に在りて千駄和尚を輔けて居た。また尾張の東輪寺にも住して居た。晩年は清涼庵に住して悠々自適餘生を送つた。

長崎君舒通に佛門に入りはじめ玉英と云ひ、後元亨慧と改めた。の如きも江外に師事したものである。而して長崎奉行日下部氏の如きは心を傾けて参叩し弟子の禮を修したと云ふことである。

延寶八庚申年五月十七日バタン人十八人が日向國へ漂着し、伊東出雲守の家臣に護送されて六月十七日長崎に着した。そのうち一人は同年七月四日客死したので、崇福寺境内に埋葬された。その際江外は引導誦經した。尋いて同月七日、十一日、十四日、十六日、十八日、廿五日、廿八日、八月八日、十三日、十四日、十八日に各一人宛合せて十一人のバタン人が病死して、同じく崇福寺境内に埋葬された。生存者六人は同年九月蘭船に乗せられて咬嚼吧へ送られた。

長崎君舒はその著長崎圖志清涼庵の條に於て、在寺上方三十丈許、地與大光寺接、元祿二年僧江外創、松杉叢茂、泉石清絶、固有塵外佳致、内清涼地、藤蘿月、瀧花泉、鑿頭松、聽法岩、吼泉、攀雲磴と述べて居る。

江外バタン人  
埋葬式に臨む

附考 長崎名勝圖繪に云ふ。

吼泉は其源八尾ヶ岡の南に在り、石竇より出つ、流れて半畝の田に漑き、また流れて清涼庵の池に入る。故に源流名を同す、其泉極て清く、味ひまた甘美なり。源小水といへども、脈長し、派分れて一名水たり。

寶曆の頃この庵は自ら火を失して焼失したので、寶曆十一年爐粕町なるもと堀町松村勘兵衛抱屋敷址に移して再建されたが、文化八年六月に至り、當庵は荒廢太しきに因り、庵號を崇福寺内に移轉することになり、更に再興を計企する所ありしも、機熟せずして、遂に廢庵となつて了つた。

寶 永 頃 即ち當庵が崇福寺境内に在りし時代

境内坪數 貳百坪 暨八間横貳拾五間

庵 室 四拾坪五合入四間半横九間

明和四年三月 即ち當庵が爐粕町に在つた時代

境内坪數 參百四坪餘

東 方 拾九間壹尺四寸 石垣北馬町境

西 方 表口拾八間餘 爐粕町通



南方 拾六間貳尺參寸 爐粕町横町通

北方 拾六間貳尺 松右衛門屋敷境

千 呆

示江外徒子建清涼庵

壽山頂上沒陰陽結箇庵兒清且涼信手劈開獅子窟自然傑出曼殊堂泥牛海底  
吼明月石女林間歌吉祥喜得地靈多勝槩千秋吾道永傳揚

大悲菴

大悲庵

本尊 千手觀世音菩薩

脇立 文殊菩薩 普賢菩薩

元祿六年創建

元祿六年崇福寺内に創建せられたが、寶永二乙酉年八月に至りて、當時長崎村  
西山郷諏方馬場上西山町五拾八、九番地、今の現林館の地なる本下町金子次郎右衛門の  
懸屋敷址に移轉した。而して唐僧靈源の住すべき庵室と關帝堂とが建てられた。  
第四代月州の後は第二代玉麟の法嗣と第三代覺天の法嗣とが拾年を一期と  
してかはるゝ庵主となることになつた。  
明和四年三月明細帳に據れば、當時當庵境内は左の如きものであつた。

總坪數 參百九拾貳坪

東方 貳拾八間 生垣小道境

西方 參拾間半 塀表通り諏方馬場一書に參拾貳間とある。

南方 拾六間 塀長野太三兵衛家境

北方 拾四間 垣小道境

東西拾四間南北貳拾八間地子銀七匁四分五厘長崎村庄屋方へ納む

當庵は崇福寺末祿庵の一つで、明治維新前後に第十代隨車第十一代古岩相繼  
いで庵主となつて居たが、維持困難なりし故古岩示寂後、崇福寺住職松村寶林は  
百方其の恢復を計企せしも容易に成らず、其の間に堂宇頽破いよゝゝ甚しかり  
しに因り、官許を得て、其の敷地貳百貳拾七坪を賣却して、當庵を崇福寺内廣徳院  
に合併した。時に明治拾年九月廿壹日であつた。

綠蘿庵

本尊 釋迦如來

元祿八年創建

高野平郷崇福寺境内地續の地に在つた。元祿八年崇福寺第五代唐僧大衡の創

長崎市史地誌篇 崇福寺

建したもので、崇福寺五末祿庵の一つであつた。境内百四坪横拾參間八間中に庵室壹棟、  
貳拾四坪六間に四間があつたが、明治四拾貳年に至り維持困難のため廢庵となつた。

養源院

本尊 釋迦如來

元祿十一年創建

長崎村片淵郷に在つた。元祿十一年崇福寺第五代大衡は小川町太原佐七の懸  
屋舖の片淵郷に在つたのを購入して、庵室壹棟五間に參間物置壹棟四間に貳間半等  
を建てた。寛政元年に至り頽破甚しきに因り、同年五月、高野平郷曇華院内に庵號  
が移轉されたが、その後當庵は遂に再興されなかつた。

總坪數 貳百七拾參坪 地子銀六匁壹厘長崎村庄屋方へ納む

東方 貳拾間

百姓作道

西方 貳拾六間

百姓作道

南方 拾間

百姓藪垣境

北方 貳拾九間半

百姓九平次地境

曇華院

本尊 釋迦如來

元祿十二年創建

長崎村高野平郷清水寺北手後方に在つた。元祿十二年崇福寺住持唐僧大衡の  
創建したものである。寛政元年五月には片淵郷養源院が當庵境内に移され、また  
文化八年六月には同郷天壽庵が當庵境内に移された併しこの兩庵は孰れもそ  
の後再興せられなかつた。當庵は明治四拾貳年維持困難に因り廢庵となつた。

明和四年三月

境内 八百拾坪餘

東方 四拾間

百姓七郎次畑境

西方 參拾四間

貳拾貳間石垣百姓五郎左衛門畑境

南方 貳拾四間

拾四間文殊院畑境

北方 貳拾間半

拾四間百姓七郎次畑境

明治參拾七年

境内

長崎市史地誌篇 崇福寺

宅地 參百四拾九坪

畑地 壹畝拾參步地價壹圓拾四錢七厘

山林 壹畝貳步地價拾壹錢貳厘

墓地 貳拾壹坪

客殿五葺

建坪 貳拾四坪六間に四間

もと當庵の所有であつた唐僧大衡及び靈源の木像、錫杖、香爐、花瓶、磬、木魚等は現時崇福寺に於て保存されて居る。

曇華院歴代住職世系

- 開基 大衡海權 嗣千泉安 正徳五乙未年拾貳月廿八日示寂
- 二代 恢峰寂廓 嗣大衡權 正徳五乙未年八月貳拾貳日示寂
- 三代 彌登照嵩 嗣恢峰廓 寶曆拾四甲申年參月四日示寂
- 四代 月潤普明 嗣彌峰嵩 寶曆拾三癸未年三月十日示寂
- 五代 祖幹普胤 嗣彌峯嵩 安永九庚子年八月貳拾貳日示寂
- 六代 喝山通震 嗣祖幹胤 文化拾癸酉年七月朔日示寂

- 七代 禪海益澄 嗣喝山震 天保拾四癸卯年五月八日示寂
- 八代 白峰暉峻 嗣禪海澄 明治六癸酉年拾壹月拾八日示寂
- 九代 虎岩暉月 嗣禪海澄
- 十代 嶺南暉信 嗣禪海澄 慶應參丁卯年拾月貳拾日示寂
- 十一代 虎岩暉月 再住
- 十二代 藤樹聯祥 明治四拾年拾貳月拾壹日より明治四拾貳年迄

本尊 釋迦如來

元祿十二年創建

崇福寺本堂の後方上段三和尚壽塔の西隣の地に在つた。元祿十二年五代大衡の創建したものである。廢庵となりし年代は詳かでない。寶永四年長崎寺社帳に據れば當寺の境内坪數は五拾四坪横九間竪六間で庵室壹棟貳拾四坪六間に四間があつた。

本尊 釋迦如來

元祿十四年創建

天壽庵に合併

長崎村高野平郷曇華院附近に在つた。元祿十四年鉄柱大衛の法子の創建したものである。後天明五年五月に至りて維持困難により片淵郷天壽庵に合併せられ、敷地建物とも賣却された。

明和參年四月

境内 四拾六坪餘

東方 四間半

百姓七郎次地境

西方 六間半

同斷畑境石垣切り

南方 九間半

村山久平次收納小屋境

北方 八間

百姓七郎次地境

棲雲庵

棲雲庵

本尊 釋迦如來

寶永貳年創建

棲雲庵は長崎村中川郷松山に在つた寶永貳年に唐僧千駄の法子品峰海皓の創建したものである。

品峰は俗姓目賀田氏、近江國八幡の人であつた。年甫めて拾四歳にして、近江の

永源寺に至りて剃髮し、南嶺和尚に師事した。而して貳拾五歳の頃黄檗山に上りて、千駄和尚に參し、山に留ること十餘年に及んだ。寶永貳年貳月朔日千駄和尚遷化するや、乃ちその遺骨の一部を齎して長崎に來り、暫く崇福寺に寓し、同年一座具の地を松山に獲て庵を構へ、その師千駄和尚を祀つた。而してこの庵を二靈山棲雲庵と稱した。斯くて品峰は貳拾年餘り松山にて木食僧の生活をつゞけて居たが、庵主の席を法弟子堆雲に譲りて長崎を去り、その後尾張の東輪寺近江の正明寺等に住し、寛保參年六月十八日示寂した。時に世壽七拾有五であつた。而して洛の山科福聚院に埋葬されたと云ふことである。

享保貳年四月品峰は當庵を宇治黄檗山萬福寺の末庵となした。併し當庵は後再び崇福寺の末庵となつた。その後大悲庵主が當庵の庵主を兼ねて居たが、天保五年四月略纂寺舊記には天照臺寺第二十代俱胝はこの庵敷地を購求して、その隱栖の處となした。爾後俱胝の法嗣が此處に住して居たが、明治四十二年七月に至りこの庵は高林寺に併合さるゝことになつた。

末庵 票

肥前州長崎中川村二靈山栖雲禪庵現住品峰禪師請千呆和尚爲開山今將

其庵送入本山蒙堂頭和尚許容永爲末庵者也憑此爲照

享保貳年歲次丁酉四月初二日

境內 明和四年參月調

黃藥常住

都寺石門  
副寺老梅

客

果天

真歲龍山

侍衣大明

一書には參百四拾坪とある。

東方 四拾貳間

御立林岸境

西方 貳拾五間半

野道境

南方 參拾壹間

拾間百姓林右衛門如境  
貳拾壹間石屋五平次如境

北方 貳拾六間

百姓九兵衛畑境

訪二靈山棲雲庵主堆雲禪師即興

僧 大潮

蒼松翠竹擁禪關古路羊腸不易攀爲問雨華臺上月共誰稱偈到人間

雪中過二靈蘭若寄素軒居士

僧 曇石名梵雲

因想二靈雪吟節上翠微天花枯木屐趙壁點麻衣聽伴定僧落殿園古佛飛詩翁  
乘興到何意抱琴歸

花朝棲雲庵集分韻

吉村迂齋

群山環合巧成屏四處茅庵春滿庭半天慘雪兩三樹一座散風深涉磬澗澗長流  
晴後響鶯鶯新語酒邊聽百年幾得花朝會醉與白雲宿晚亭

上善菴

本尊 釋迦如來

享保元年創建

當庵の創建年代のみは判明すれども、その他は悉く詳らかでない。

寶授 庵

本尊 釋迦如來

享保十五年創建

享保十五年唐僧道本は一庵を小島郷に創建境內整貳拾五間餘横拾四間して之を萬壽庵と稱したが、後寶授庵と改めた。延享元年崇福寺住持伯珣は新大工町吉田久右衛門の懸屋敷の中川郷に在りしを當庵敷地として購入し、當庵を移轉して、唐僧大成の庵室に充てた。當庵は一時崇福寺下に於ける祿庵となつて居たが、明治四拾貳年崇福寺に合併された。

境內 七拾坪 地子銀壹匁四分參厘長崎村庄屋森田周藏方へ納む

東方 拾壹間參尺餘 石垣下下條志郎次畑境  
 西方 九間 石垣百姓九平次地境  
 南方 拾壹間五尺 貳間石垣限り下條志郎次畑境  
 九間五尺石垣限り森田周藏畑境  
 北方 拾參間參尺 下條志郎次畑境(明和四年三月調)

寶授庵歷代住職世系

- 開基 大成照漢 嗣道本傳 天明四甲辰年貳月拾日示寂
- 開派 鉄舟寂浪 嗣雪尹潤 享保拾八癸丑年四月十七日示寂
- 一代 懶睡照覺 嗣裁舟渡 明和參丙戌年拾壹月廿五日示寂
- 二代 珉光普明 嗣珉睡覺 安永七戊戌年閏七月參日示寂
- 三代 耕雲通吟 嗣珉光明 文化拾參酉子年六月廿六日示寂
- 四代中興 慧燈益心 嗣耕雲吟 天保拾五甲辰年貳月貳拾壹日示寂
- 五代 寶幢暉宗 嗣慧燈心
- 六代 寶林暉果 嗣慧燈心 明治二十四年八月七日示寂、年六拾五
- 七代 默堂聯雷

本尊 釋迦如來

享保十七年創建

長崎村片淵郷現今舊砲術稽古場の標札ある場所に在つた。此の地はもと東中町古川權六の茶屋敷地であつたのを、享保十七年、崇福寺に譲り受けて、當庵を創設したのである。天明五年、高野平郷内極樂庵を當庵に移したが、其の後衰微して文化六年八月頽破甚しきに由り庵室を解取り、同八年六月、敷地壹反六畝貳拾四歩を町年寄高島四郎兵衛家來西田慶右衛門に譲り、庵號は之を高野平郷曇華院内に移した。爾後當庵は再興せられなかつた。

明和四年參月

境内 五百四坪

地子銀拾匁參分參厘 外に敷増地地子參分七厘 長崎村庄屋方へ納む

東方 四拾貳間半

春徳寺墓道境

西方 參拾貳間半

石垣百姓作場道境

南方 貳拾五間半

百姓善四郎藪垣境

北方 貳拾九間半

百姓九平次地境

長崎市史地誌篇 崇福寺

臨川院

長崎市史地誌篇 崇福寺

臨川院

四九二

本尊 釋迦如來

元文四年創建

新大工町錢屋川畔に在るが、今は天神を祀つて居る。此處は元文初年頃迄は、町年寄數家の共有地であつたが、元文四年開基謙光寂泰が町年寄高島四郎兵衛に請ふて此處に臨川院を創建したのである。當時の境内は次の通りであつた。

境内 百八拾參坪 地子銀五拾九匁七分貳厘長崎村庄屋方へ納む

東 方 拾八間參尺 垣切外は小溝

西 方 拾八間參尺 垣切外は向井齊宮居宅

南 方 拾壹間參尺 垣切外は表通路

北 方 拾壹間參尺 垣切外は向井齊宮畑

明治維新後臨川院は廢せられて、天滿神社が建立せられ、以て今日に至つたのである。

天華庵

天華庵

本尊 釋迦如來

天華庵

寛延二年創立

天華庵は八幡町に在つた。此處はもと酒屋町鉅鹿太左衛門の懸屋敷なりしを、寛延二年崇福寺に譲受けて當庵を創建した。當時の敷地坪數は左の如きものであつた。

境内 貳百六坪 地子銀貳拾八匁七分四厘八幡町乙名方へ納む

東 方 拾五間參尺參寸 寺町通り塀

西 方 拾四間四尺九寸 嘉四郎宅境

南 方 拾參間參尺 八幡町通り

北 方 拾四間壹尺 大神五郎兵衛屋敷境 聽松庵境

明和五年當庵の敷地は永福庵に譲渡され、庵號は一時祇樹林内に移轉されたが、その後遂に再興せられなかつた。天明二年に至り、此處は高林寺の有に歸した。

祇樹林内に移轉

慈眼庵

慈眼庵

本尊 觀世音菩薩

長崎村夫婦川郷に在つた。創建及び廢庵の年代は詳らかでない、明和四年三月調によれば當庵の境内は次の通りであつた。

長崎市史地誌篇 崇福寺

四九三

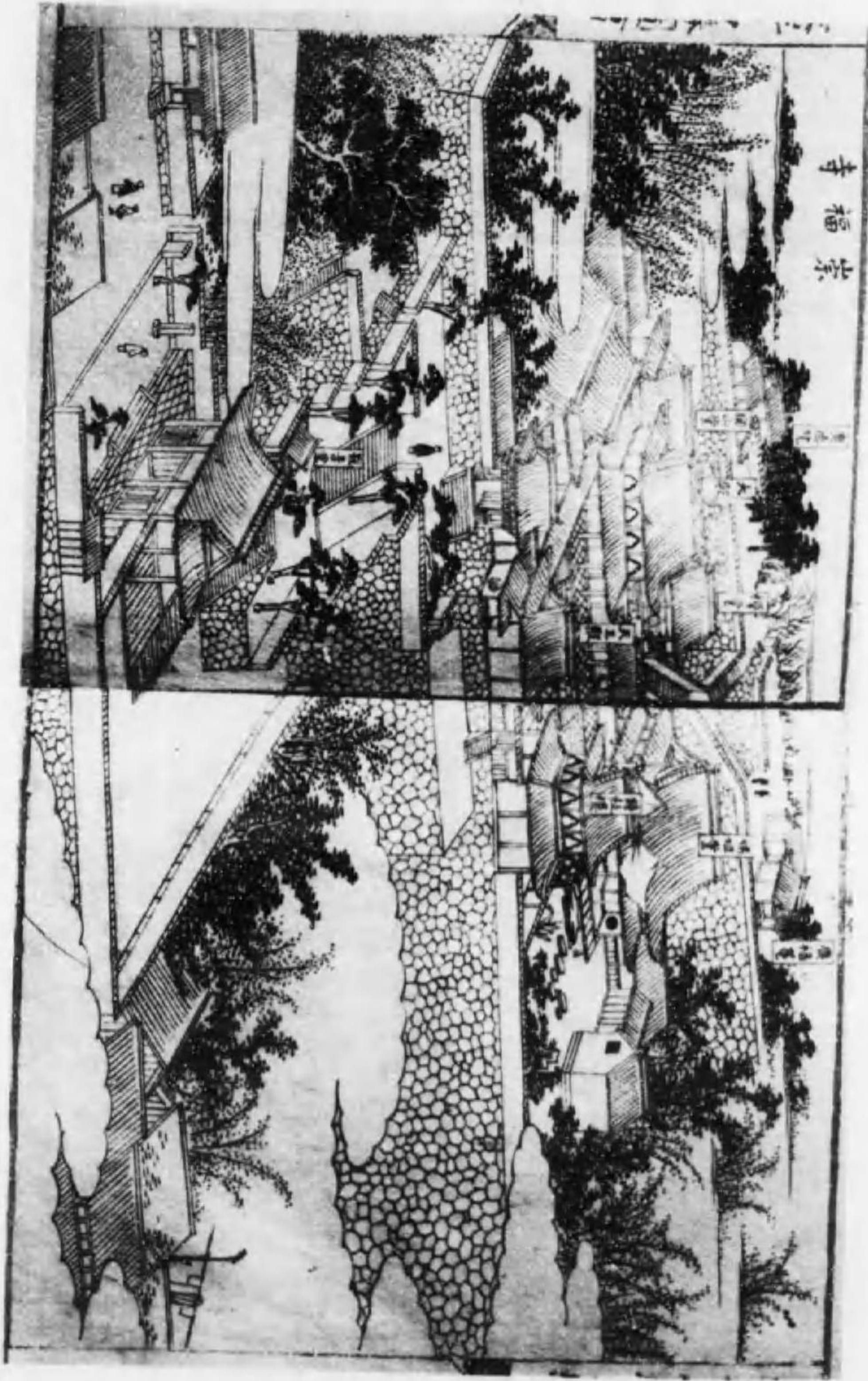
境内 貳拾壹坪

東	方	七	間	春徳寺道境
西	方	七	間	理元尼屋敷境
南	方	參	間	妙相寺庵室境
北	方	參	間	春徳寺石垣境

壽林庵

壽林庵は高野平郷清水寺の背後上手に在つたと云ふことである。その沿革は詳らかでない。崇福寺の文書はもとより長崎の諸舊記もこの庵に就いては些も説明を與へて居ない。但だ長崎名勝圖繪には壽林庵に關する詩數首が載せてあるばかりある。その詩に據ると壽林院の境内には櫻があつて陽春三月には花が咲き盛りて雪あるかと疑はれたと云ふことなどが判明する。尙ほ山池ありて夏になると紅白の蓮の花が一杯に咲くのであるが、その蓮は唐土傳來の佳種であつたと思はれる。

それから壽林庵には享保年間に長崎生れの大龍と云ふ僧が住して居た。彼は庵主であつたらう。而して道本と密接な關係があつたらしい。



文政年間の崇福寺



道本は享保五年に長崎に渡來して享保十六年十二月廿六日に遷化したのであるから、この庵が享保五年から享保十六年の間に存在して居たことは争ふべからざることある。

寶永四年長崎寺社帳には壽林庵の名稱が載せてない。それから長崎實錄大成にも同じく壽林庵の名稱が見ぬ。してみれば壽林庵の創建は寶永四年以降享保までの期限内のことで、その廢庵となつたのは寶曆頃以前であらうと想はれる。

櫻 桃

花以下壽林庵今廢

大

龍崎人住壽林庵

的磔咲禪室年々三月時樹垂疑有雪鳥繞欲無枝不並黃花瘦偏堪白玉姿幾回吟賞處遮莫暗香奇

壽林院蓮盛

菴

亭

山池一曲勝方塘紅白荷花簇錦裝白玉無瑕初剖璞紅雲有暈正朝陽雙々交映偏生色兩兩同開益覺香應爲主人多護惜千枝相續接秋光

和

右

大

龍

傳來佳種栽山塘五月中旬即盛裝玉藥出泥原不染金盤凝露向炎陽日斜照見

長崎市史地誌篇

崇福寺

青蓮相風廻難分紅白香對此清標娛老眼匡廬社裏憶風光

廣 勝 庵

所在及び沿革共に詳らかでない。

崇福寺歴代住持世系

開

基

超

然

普

定

覺

聞

道

者

超

元

支

那

當山開基超然外長老禪師寬永六年渡來

正保元年甲申年九月八日示寂年七拾八

正保元年九月より同貳年まで監寺貳年

明暦元乙未年歸唐

當山住持百拙理禪師

支那福州人正保參年渡來

正保參年より慶安貳年四月まで在職四年

慶安貳巳丑年四月拾八日示寂

支那福州の人

慶安貳年より同參年まで監事貳年

明暦元乙未年歸唐(二人共)

支那福建省興化府の人慶安四年渡來

慶安四年より萬治元年まで在職八年

萬治元年歸唐

臨濟正宗第參拾參世當山開法上即下非一老和尚御座

支那福州福清縣の人林氏明暦參年貳月拾六日渡來

萬治元年渡來

寬文辛亥拾壹年五月貳拾日示寂年五拾六

臨濟正傳第參拾四世當山第貳代曾法祖上千下杲安老和尚御座

支那福州長樂縣の人陳氏明暦參年貳月拾六日渡來

萬治元年より寬文參年まで在職六年

寬文拾壹年より延寶貳年まで再住四年

寶永貳年貳月朔日黃檗山に於て示寂年七拾

當山住持後堂化林合禪師

支那福州の人萬治參年渡來

寬文參年より同七年六月參日まで在職五年

寬文七年丁未六月參日示寂年七拾壹

當山寺主鶴搏天禪師

支那福州人萬治參年渡來

寬文七年六月より同八年まで看坊貳年

寬文拾貳壬子年四月拾五日示寂

延寶參年より元祿六年十月まで在職拾九年

元祿癸酉六年拾月六日示寂年五拾參

支那泉州同安縣の人陳氏延寶貳年渡來

延寶四年より同五年まで看坊貳年

貞享參丙寅年貳月拾六日示寂年參拾六

長崎市史地誌篇

崇福寺

七代

大衡海權

臨濟正傳參拾五世當寺第參代法祖上天下衡慧老和尚御座  
支那福州福清縣人翁氏元祿六年渡來  
開法五代 元祿六年より同八年まで同九年冬より寶永六年八月まで在職拾七年  
正徳五乙未年拾貳月廿八日示寂年六拾五

黃燧九代

靈源海脈

支那福州連江縣の人許氏元祿六年渡來  
元祿九年より同年冬まで在職壹年享保元年黃燧山萬福寺住持となる  
享保貳丁酉年五月拾八日示寂年六拾六

八代

別光寂透

臨濟正傳參拾六世當寺第四代別光透和尚  
支那福州延平府陳氏寶永六年五月廿日渡來  
開法六代 寶永六年八月拾貳日より同七年拾貳月廿八日まで在職貳年  
寶永七年庚寅拾壹月廿八日示寂

九代

義勝寂威

臨濟正傳參拾六世當寺第五代義勝威和尚  
支那福州延平府の人鄭氏寶永六年五月渡來  
開法七代 正徳元年より享保元年八月まで在職六年  
享保元年丙申八月六日示寂

靈源海脈 前出

享保元年八月より同貳年五月まで兼務在職貳年當時萬福寺住持

大龍和僧

彌登同

享保元年八月より交代看坊

瑞宗同

十代

道本寂傳

臨濟正傳參拾六世當山第六世道本傳大和尚  
支那福州福清縣の人陳氏享保四年六月渡來七日朝入寺

開法八代

享保四年より同九年まで在職六年  
享保拾六年辛亥年拾貳月廿六日示寂年六拾八

黃燧第二十代

十一代

伯珣照浩

賜紫臨濟參拾七世當山第七代伯珣照浩和尚  
支那福州延平府龍溪縣の人劉氏享保七年正月渡來  
開法九代 享保九年四月より寛延參年五月まで在職貳拾七年  
安永五丙申年拾月貳拾參日示寂年八拾貳

十二代

克明普玃

(和僧)克明光和尚  
寛延參年五月より明和元年貳月まで監寺拾五年  
明和元年甲申貳月拾五日示寂一本に六日とある

十三代

龍雲寂文

(和僧)龍雲文和尚  
明和元年より安永七年まで監寺拾五年  
安永八年己亥五月六日示寂

十四代

祖幹普胤

(和僧)臨濟正傳參拾八世幹胤老和尚  
安永四年四月より同九年拾壹月まで監寺六年  
安永九庚子年八月貳拾貳日示寂

黃燧廿一代

大成照漢

黃燧第貳拾壹代當山八世大成漢大和尚  
支那福州龍溪縣の人享保七年渡來  
安永五年より天明四年貳月拾日まで兼住九年  
天明四年貳月拾日示寂

十五代

月樵普頌

月樵頌和尚  
安永九年より寛政貳年九月まで監寺拾壹年  
寛政貳年庚戌年九月拾貳日示寂年七拾參

十六代

鳳山普瑞

鳳山瑞和尚

十七代

喝山通震 喝山震和尚

寛政貳年九月より享和參年六月まで監寺拾四年  
享和參年六月より示寂

十八代

無着通染 無着染和尚

享和參年六月より文化拾年七月まで監寺拾壹年  
文化拾年癸酉七月壹日示寂

十九代

蘭溪通芳 蘭溪芳和尚

文化拾年七月より同拾四年八月貳拾七日まで在職五年  
文政五年壬午拾貳月壹日示寂

二十代

曦皓普信 曦皓信和尚

文化拾四年八月貳拾八日より天保元年正月五日まで在職拾四年  
文政拾貳日丑年正月貳拾六日示寂

二十一代

禪海益澄 禪海澄和尚

天保元年正月貳拾五日より退任年代不詳  
天保拾四年癸卯七月九日示寂

二十二代

達觀益龍 達觀龍和尚

天保元年正月貳拾五日より同拾四年五月八日まで監寺拾四年  
天保拾四年癸卯年五月八日示寂

二十三代

寶參普悟 寶參悟和尚

就任退職年代不詳  
天保拾壹庚午年貳月拾壹日示寂或は拾日ともあり

弘化元年七月五日より退任年代不詳  
嘉永五年壬子年五月拾日示寂或は拾壹日ともあり

二十四代

仙芝益瑞 仙芝瑞和尚

弘化元年七月五日退任就任年代不詳  
文久辛酉年拾貳月貳拾四日示寂

二十五代

柏州普榮 柏州榮和尚

就任退職年代不詳  
安政貳乙卯年八月拾參日示寂

二十六代

兀庵益兀 兀庵乙和尚

就任退職年代不詳  
明治四年辛未年四月貳拾參日示寂

二十七代

來鳳益儀 來鳳儀和尚

就任退職年代不詳  
明治元戊辰年七月五日示寂

二十八代

白峰暉峻 白峰峻和尚

就任退職年代不詳  
明治六癸酉年拾壹月拾八日示寂

二十九代

寶幢暉宗 寶幢崇和尚

就任退職示寂年代不詳  
明治六癸酉年拾壹月拾八日示寂

三十代

寶林暉果 寶林果和尚

臨濟正宗四拾壹世當山第參拾貳代寶林果老大和尚(俗姓松村)  
就任退職年代不詳

三十一代

虎林暉嘯 虎林嘯和尚

明治貳拾四年八月七日示寂(年六拾五)  
明治參拾五年拾貳月拾日示寂

明治貳拾五年より同參拾壹年參月まで在職七年  
明治參拾五年拾貳月拾日示寂

三十二代

拙門 暉關

臨濟正傳四拾壹世當寺第參拾四代上拙下門關大和尚(俗姓藥師寺)  
明治參拾壹年參月より同參拾八年拾貳月まで在職八年  
明治參拾八年拾貳月拾日示寂年七拾六

三十三代

仙文 聯傳

臨濟四拾貳世當山第參拾五代仙文傳大和尚(俗姓守)  
明治參拾九年八月貳拾九日より同四拾壹年壹月拾壹日まで在職參年  
明治四拾五年壬子壹月六日示寂

三十四代

藤樹 聯祥 (俗姓藥師寺)

明治四拾壹年貳月壹日より在職す

以上の崇福寺住持世系順序に就いて一言説いておかねばならぬ。

一、當山開基より大衡までの世系は「崇福寺歴代住持並年數」に據ることにした。即ち左の通りである。

- 開基 超然 二代 百拙 三代 道者 四代 千猷
- 五代 化林 六代 玉岡 七代 大衡

長崎實録大成には開基超然、二代百拙、三代道者、中興開山即非、二代千呆、三代大衡とあるけれども、即非は開山にあらずして開法たりしものなるにより世系に加へなかつた。

寺成、徑初入道操  
持分年、法不、會通、不  
開基人、會、法、未、去、去  
此、是、操、持、分、年、の、法、  
身、持、分、不、會、通、不、明、吸  
不、去、在、寺、中、難、和、名、在、人  
長崎、開、基、人  
長崎、開、基、人  
長崎、開、基、人



聖福寺開基鐵心道胖

松月院(鐵心の生母)



第四節 萬壽山聖福寺

延寶五年創立

所在 長崎市上筑後町四拾八番地維新前は境内の一部分は長崎上筑後町掛てあつたが維新後村岩原郷に編入せられ岩原郷四番戸と改められ大正貳年

萬壽山聖福寺は女風頭チナゴカサガシラの麓に在りて、東は永昌寺に近く、西は觀善寺に隣接して居る。

當寺の建物は福濟寺や崇福寺の建物のやうに輪たり奘たるものではないが、遠くより之を望めばその配置がよく調和して莊麗に見ゆる。

櫻町北側の人家の二階より北の方を眺めると真正面に聖福寺が見ゆる。中央に在るのが天王殿で西に在るのが鐘樓である。それから鐘樓の下手に在りて少し西により屋根だけ見ゆるのが總門である。尙ほ天王殿の裏手に在る大殿の屋根は天王殿より高く聳へ、松月院は大殿の眞上にありて大分東によつて居る。禪堂は鐘樓の裏手に在るので些も見ぬ。そして天王殿の東に在るのが方丈でそ

所 在  
位 置  
建 物  
建物の配置

大王殿

聯額

隱元の書いた

の假山の樹木なども見ゆる。庫裡などは方丈の裏手に在るので見ゆる筈がない。當寺が建物の配置に於て興福寺や崇福寺と異りて、福濟寺と等しいのは彌勒殿と天王殿とを兼ねる建物を有することである。聯額は少くはないが、陳言薄の書いた聯などは自餘の唐寺に無いから當寺を観る者の見落してならぬものである。

總門にかけてある聖福禪寺の文字ある額や禪堂にかけてある壁立萬仞の文字ある額などは隱元の書いたものであるから、此等の額だけ見て、當寺の文書を一覽しないならば、聖福寺の開創は寛文十二年頃であると考へさせられるであらう。併し鉄心が延寶五年十一月十一日に智覺院を譲りうけて寺基を定め、翌年諸殿堂を建立したことに就いては當寺の文書の証明する所を信せざるを得ないのである。尤も先是鉄心が一寺を開創するの宿志ありしたため、預め隱元に請ふて聖福禪寺の文字を書いてもらうたものであるかも知れぬ。併しこの推測を斷定するに足る丈の史料を發見することができないのを憾みとする。要するに隱元の書いた文字のある額は疑問の額であると謂はねばならぬ。佛像のうちでは大雄寶殿内に安置せる釋迦、迦葉、阿難三尊の像が最も見事な

佛像

鐵心の大鐘

作であらう。それから關帝の像なども長崎の人に親しみのあつたものである。それは聖福寺の關帝祭がその年中行事中の最も重要なものであつたからである。

毎夜八時頃全市に響きわたる當寺の鐘の聲は諸行無常と告げわたる陰氣なものではなくて勇ましい陽氣なもので、釋尊の大獅子吼を鐘聲にしたらあんなものではないかと空想を畫きたくなる。火災の際これほど熟睡して居る者でも一度この鐘がなれば直にさめない者はない。

長崎の兒童は隱木、即三僧の名は知らずとも、鐵心の名はよく知つて居る。それは鐵心の大鐘を毎夜聞かされるからである。あんなによく響く鐘は少からう。鐵心がかねて貯へた多くの大判小判をあつた鐘を鑄る際に用ひたから、あんなによく響くのであると長崎人は云ひ傳へて居る。

松月院は後山に在る。鐵心和尙の塔が大浦の日本廿六聖殉教者堂の内にブチジャン師の墓が在るやうに、松月院の堂内に在る。長崎で一寺の開山の墓で鐵心和尙の墓ほど鄭重に取扱はれて居るのは無い。

墓碑は後山に列んで居る。陳氏や鐵心和尙の母西村氏の墓などはもと稻佐に

松月院  
鐵心の墓  
墓碑

あつたのを、後此處に移したものである。而して唐通事西村氏、吳氏等の墓などは重なるもので、唐人の墓は絶わて無い。

もと境内には老松や古木が少くなかつたので、境内の風致は佳かつたが、此等の老樹は殆んど皆枯れて了つたので、今日では風致は往昔のやうに佳くない。もとは天王殿の下手なる石階の兩側に枝振りのよい巨松が在つて、唐めきたる建物に云ひ現せない美觀を與へたものである。

當寺の眺望はまことに絶佳である。當寺より眺むると、東には飯盛山、娥眉山、南には文筆峰、鍋山などはもとより、遠く八郎嶽など聳へ、海はやゝ左により過ぎ、西は稻佐山から觀音岬のあたりまで崇岡蜿蜒として起伏して居る。

それで聖福寺八景のうち七景まで眺望を主とするものであるのは當然と謂はねばならぬ。次に八景の詩を載せておく。

聖福八景並序

鐵心道 胖

夫憶疇昔素性疎狂每恨後時江湖暫罷掩門紫亭凝思岩嶽徒慕老嫻楊岐風矣嘗與天間老翁契稱莫逆及戒不出每與松所不請之友而經書不求之伴耳梅雪未消桃臉復綻屢觀物變易愈憶事不常嗒聞有味交世無心作事雖緩力

風 致  
眺 望

聖福寺八景の詩

到爲期忽觀湖凍水潤醒執覺著夫方不圓則不化圓不方則罔規自爾居營東山之麓靠北面南幽叢翠色崇岡蜿蜒商舶來往江波潏潏風動籟起霧捲雲收煙市鬧境豁壑漁邨奇挺溢乎眉睫間者咸備天地中和之氣象者哉就成八景分以四季逸所欲吐而家向外揚者夫

萬壽春林

在寺北面爲屏世云笠頭是也其麓樹林青翠有一帶樵徑往復接踵

習靜潛蹤一舊叢誇萬壽主無窮山花造物賑雙眼好是春林積翠中

文筆當窻

在寺前一菜卓出雲間勢如畫千大虛因名文筆峰

管城何歲卓蒼虛畫出煙霞無極圖夜靜寒蟄咽日下風流胡必假琴書

寺前夏市

唐松親南風乘夏至所國商號聚貿易然寺在高岡伏瞰街中

十笏縮成鄰市程市聲每自雜經聲四來夏客忙塵市隔市岩頭閑一生

海門曉色

在寺殿前兩山八字開衆袖出入曉晴旭日印海倒照山林

曉日麗天破衆蒙煙波萬頃映霞紅生成景物堪圖處都在沙門隻眼中

江山秋月

在寺前面一江如湖千山圍繞至秋月夜游船爭先絃歌侵曉

江山皎潔徹長霄胡識嫦娥雲外飄飽服靈丹身與月禪觀咫尺豈云遙



遠寺暮鐘

社院列寺遠者隔山川或阻江村乘暮鐘音應答林岳

窈窕煙林轉路隈幾聲鯨韻出雲來効乎東閣動詩興不覺吟行破碧苔

孟冬村雪

八景分四季則乘冬粉雪俄積鄉村狀成美觀或快作普賢境矣在寺右前

聳雪列峰勢傲羣幽邨富貴與誰云朝來林樹改觀賞一色花開新篆文

護法益峰

一峰圓頂坤木不生形影恍若應量器在寺前偏勢如護寺俗云鍋山是也

益峰托出衛禪林苔髮文身雨露深夜半密藏江底月金波競起動清吟

八景和章

萬壽春林

閩旋院雪機法兄

萬壽稱山萬木叢地靈瑞發景難窮拉搦幽討融和氣散唱樵兒一徑中

文筆當窻

窻前突兀秀凌虛宛似王維一幅圖削鎮尖新渾不改現成文筆點天書

寺前夏市

下方市肆往來程人語交呼不斷聲炎帝當權無廻避招提占得離塵生

海門曉色

東方啓白解諸蒙日出從波一片紅羣動纔生四望淨森羅萬象分明中

江山秋月

月映長江水映霄桂風拂榻任飄飄夜晴漏點山形露一曲漁歌聲自遙

遠寺暮鐘

鐘聲迴出徹岩隈遠送虛堂雜梵來晚眺悠然景致別布錢此地疊蒼苔

孟冬邨雪

初疑連客立江邨鷺羽和雲一色論際此小陽豐報歲山翁茶集句添文

護法益峰

潑翠益峰聳出林瑞然嚴護法門深長年積貯煙霞碧應量相傳動衆吟

萬壽春林

南岳悅山法兄

厚重青鬢不計叢韶光歲歲壽無窮羣生覆蔭陰涼茂別一乾坤在此中

文筆當窻

卓立尖峰插太虛儼然一幅長生圖長留秀色供貌座萬里晴空看倒書

寺前夏市

寺隔街衢咫尺程祝融布令市囂聲行人畏暑無廻避襲襲涼從殿閣生

海門曉色

雲氣氤氳水氣濛須臾日出浪花紅此時此景難描畫盡在當人雙眼中

江山秋月

冰輪皎潔麗青霄桂樹花開香韻飄隨處江山人賞翫夜深歌鼓樂逍遙

遠寺暮鐘

仙巖佛閣傍雲隈風送鯨音隱々來野鶴歸巢僧出定半規落日照蒼苔

孟冬郵雪

陌上梅開幾點芬九零密布盡彫雲霏霏玉屑鋪茅舍歲稔誤成祥瑞文

護法盜峰

應器何年化作岑晨昏貯積白雲深巍峨擁護法王側或聽蒼龍個裏吟

萬壽春林

東皇應蹟闢禪叢祇樹繁陰景不窮圍繞金仙師子座或教鳳輦到山中

文筆當窻

微垣星現在清虛常把山毫畫海圖無限雲濤飛入榻卻疑天降紫泥書

寺前夏市

萬竈人煙不遠程也知酷暑愛松聲炎涼地近清涼地屋裏青山六月生

海門曉色

天光雲影兩迷蒙萬頃玻璃涌日紅想是老僧朝梵罷金欄展向白毫中

江山秋月

一幅丹青桂碧霄從教摩詰興飄飄金風時露大圓鏡直照洞庭萬里遙

遠寺暮鐘

別開精舍隔山隈百八聲隨落日來乍聽宛如天樂響曇花無數點蒼苔

孟冬郵雪

小陽春不待清芬六出漫空似白雲野老興酣歌有象頭陀應寫豐年文

護法盜峰

誰將應器托高岑帝釋願來花雨澆更貯僧那香積飯二時禪悅動龍吟

萬壽春林

雲滿山前翠滿叢愛山支遁興何窮春來春去人間事不入高僧禪定中

文筆當窻

文筆何年卓太虛應同龍馬負河圖靜看一畫傳經後直作先天無字書

寺前夏市

歷盡多年雲水程靜中不礙關中聲閒時扶杖山前過獨叩禪扉問了生

海門曉色

曙色初開宿霧蒙海門遙映曉山紅霞明樹秀晴窻見身在無邊錦繡中

江山秋月

寒光一碧冷秋霄照徹江山客思飄何似吾師長自在禪心淨映月明遙

遠寺暮鐘

向晚寺鐘隔水隈遙隨風雨度谿來一聲敲破浮生夢獨自惺惺坐碧苔

孟冬邨雪

小春飛雪滿前邨客裏吟殘孰與論檮爐邊間自掃旋噉童子掩山門

護法益峰

巨靈留此護禪林茲托人間歲月淡靜坐蒲團無箇事錫飛峰頂作龍吟

萬壽春林

浙江童立山

萬壽山前綠蔭叢芳菲桃李綴無窮間來杖策遊谿曲處處堪圖入畫中

文筆當窻

秋山如滴映窻虛寂寂禪關秀氣餘卓立筆峰當關外遙天鴻雁一行書

海門曉色

海天渺渺映長空萬里波濤色倩紅借問搏桑語幾許一輪紅日海門中

寺前夏市

遠浦帆檣不計程市塵嘒嘒涉潮聲高僧跌坐幽林裏萬壽峰頭看月生

江山秋月

澈徹江瀾映碧霄丹楓葉落影飄飄禪燈一點寒煙鎖月照秋山萬里遙

遠寺暮鐘

古寺雲封說法臺臺天清籟入聽來鐘聲自出雲淡處漠漠寒煙下碧苔

孟冬邨雪

小春黯黯雪紛紛四顧雲山絕比論羈客自憐多感慨馮欄獨惟憶韓文

護法益峰

老僧卓錫定緇林覆蓋安禪歲月淡說法自能頑石悟蓋中製有降龍吟

萬壽春林

閩興化蒲中吳楨

座繞松杉萬綠叢詩情壽意兩無窮經行指點上方景眼底人家煙雨中

文筆當窓

突岬峰尖接太虛恍然一筆畫堪圖不為艸聖時傳字獨對禪窓伴著書

寺門夏市

聞說由來覓利程人聲滔滔雜濤聲還思浮海許多客萬頃波中度此生

海門曉色

如日之昇佛德蒙欣看匝地海山紅老僧曉誦無生偈聽法魚龍盡此中

遠寺暮鐘

偶然乘興步山隈何處鐘聲入耳來松際忽逢初月露正堪跌坐拂蒼苔

孟冬邨雪

雪散長空白滿邨娑婆明淨事堪論擁爐喜得泉聲靜徧處梅花好讀文

護法益峰

東海滔滔檀林時作供益孟溪叅方開士如雲集不嘆絕糧仰屋吟

次韻聖福寺八景詩

沈燮庵

竹木陰森簇萬叢春來鹿苑景無窮頂知衣鉢流傳意楮在拈花微笑中  
萬壽春林尖峯矗矗透清虛宿霧濃烟盡掃除安得長天供作紙蘸將江水劃之書  
文筆當窓



聖福寺八景

